
続・テーミスの像「ダークマター」

なしか 空

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

続・テミスの像「ダークマター」

【Nコード】

N93800

【作者名】

なしか 空

【あらすじ】

巨悪の王に挑んだ田川の侠客、城島元特捜部検事は、振り返ちにあつて刑務所で暗殺され、愛妹民子も留置場で兄の潔白を叫んで縊死した。

悪魔のように残忍に晒い、魔女のように冷酷に微笑む、インターセックスの刺客、青山姪臣と刺し違えるようにして果てた彼らであったが、それで事が済んだわけではなかった。

運命は、散らばった塵を集めて内部圧力を高め、核反応を起こして第二世代の星が形成されるように、新たな火種を灯していた。

アメリカの国益であり、戦後、法務・検察を牛耳ってきた巨悪の王に向かって、再び侠客の血統がリベンジに立ち上がり、壮絶な聖戦が始まる。

希代の謀殺請負人「青山姪臣」がなお生きているかのようにへ死んだのは愛と正義の弁護士、一覽性双生児の姉・根岸ともみの方だったのか――今再び殺戮と陰謀渦巻くピカレスク・ファンタジーの幕が切って落とされたのだ。

予言の書

兄弟たちよ。

深いイドの底をのぞき見たことがあるかい。

じっと、眼を凝^{まなこ}らして、のぞいて見るがよい。

光——という名の、闇の影が消失した時、

深淵の彼方^{かなた}から、

じっと、此方^{こなた}を窺う見知らぬ眼差しに会おうだろう。

だが、あわてることがはない。

じっと、待てばよい。

光芒^{こうぼう}が放たれた方が、シャドーなのだ。

光子は胸が締め付けられる恐怖にとらわれていた。

十八年間生きて来て初めて味わう超弩級の恐怖だった。

もうどう考えても後ろからつかず離れずついて来る人影は悪意に満ちている。

幾筋もの分かれ道を違えず、ピタリとついて来る。

チャリを押しながらそれとなく振り返って見るに、三角のフードで顔を隠した、絵本から抜け出した魔法使いのような、いかにも怪しい風体。武器ともとれる長い棒を杖のように持っている。

その距離は二十メートルと離れてはいまい。

こんな時間に、月明かりと防犯灯だけを頼りに、坂道ばかりの、墓地公園内を突っ切るコースをとったことを、今になって光子は後悔した。どうかしている。

今の時間——午後十時をまわろうかという——こんな時間には車でさえ通るのは不気味な所である。

左右は墓地で、墓地を過ぎると、両側からカシやシイなど詰屈し

た枝葉を重ねた雑木林が、鬱葱と頭上に覆い被さって、暗くなる。所々に防犯灯が黄色く淡い光を放っているとはいえ、こんな薄気味悪い所、夜一人で歩く酔狂はいない。

それだからなおさら、後ろの人影が只者でない証拠へそれをいえば、自分もそうなるのだが。

ある時、母がいった。

——あんた達はへそこに兄もいた普通の人者と思ってはいけん。いつ何時、暴漢に襲われんとも限らん。そういう運命を背負っているけん、気をつけんといけんよ。

まさに今が、その時か。

部活で遅くなる時の帰りは、いつも母がアルトで迎えに来る。今日に限って、県病に入院しているお祖父いちゃんがまた肺炎を起こしたとかで、迎えに来られないからタクシーで帰るようメールが入った。

なのに、部活の友達とチャリで一緒に帰って来たのが、最初の過ち。あやま

二つ目の過ちは、それなら母がいつも車で通る道、夜半でも交通のある美術館前の明るく広い道路を帰ればよいものを——その方が近いし、適当に人家もある——いつも通り友達ん家がある桜ヶ丘ち經由で帰ろうとしたこと。

というか、過ちとばかりはいえない。意に反したことをしたわけではない。母のいいつけを守らなかったことも含めて、きわめて恣意的な選択であった。もともと、そういう昼でも薄暗く、人通りが少ない、薄気味悪い場所が好きなのだ。もっといえば、血の欲求でもあった。

人気のない墓地公園を通る時のゾクゾクした気持ち、お墓や密林から何が飛び出して来るか、考えただけでもゾクゾクする。お化け屋敷やゼットコースターのゾクゾク感に似ている。

光子は生来そういうゾクゾク感がたまらなく好きなのだった。冒険家のように、危機的状况を求める気持ちだが、その場になったらき

つと後悔するだろうけど〈今のようにな〉、そういう気持ちだが、押さえ難くあるのだった。

恐がりの兄は今でもジェットコースターになんか絶対に乗れないしー城嶋後楽園のジェットコースターは木組みの上を走るので危なかしいことこの上なく、スリル満点なのにー幼ない時分、楽天地の象の背中にさえ怯えて乗れなかった。そういう時光子は、何かにつけ優秀で、両親の誉れである兄の風下に置かれていた鬱憤を晴らして、得意満面だった。

そういえば前にも一度、この墓地公園で血も凍るような恐怖体験をしている。

あれは中学二年生くらいの時だったろうか、もう少し上の、雉飼場いばと呼ばれる本光寺の下辺りは、背の高い広葉樹が生い茂っていて、ドームのような暗がりになっていた。そこは暑い夏でもひんやりじめじめ湿っぽく、日中でも薄暗いくらいで、夕暮れ時ともなればもう、あの頃は防犯灯がなかったから文目あやめもわからないくらいの暗がりとなった。

そこを中学生の光子がやはり部活帰りに一人で歩いていると、光子のすぐ隣を、誰かが一緒に歩いている気配がした。人が動く濃厚な気配がするのだ。ペタペタという足音まで。

ゾツとして、心臓がバクバク、金縛りのようになって、横を振り向いて見る勇気が、その時はなかった。

それが悔しくて後悔でならず、あのゾクゾクした感覚をもう一度味わいたくて、今度こそ闇を透かして正体を見極めてやろうと、何度と同じ時間帯にそこを通ったものだ。これって変態なのかなあ…などと思いつながら。

しかし同じ夢をもう一度見たいと思ってもままならないように、二度とそういうことは起きなかった。

そんなわけで、母から迎えに行けないというメールが入った時、（シメタ!）と心の奥で思う心があったことは確かだ。

しかし今は後悔している。掛け値なく恐怖が勝っている。あとに

なっってから、この恐怖心をもう一度味わいたいと思うことになるかも知れないけど、そうなればよいけれど、今は心臓バクバク。口からお尻が飛び出しそうだ。

進退窮まった冒険家もそうであろうか。滑落したロッククライマーも後悔する？ 処刑台の死刑囚も？ 火炙りになったジャンヌダルクはどう？ 家庭の中で、おとなしくぬくぬくしていればよかったと思う？ ママの懷の中で。

「何んですか、若い娘が。そんな時間に、そんなとこ、一人で歩くもんじゃありません！」

鼻でせせら笑っていた母の忠告が、現実のものとなってしまった。後ろをついて来る人影は、ただの気配などではない。角を曲がる度に、もう来ないだろう、今度こそ別の道に、という願いを――しかしそうなたらそうなたで、「なあゝんだ、つまんない」と落胆するだろうけど――ことごとく裏切って、そいつは、月光に照らされ、あるいは暗がりから勃然と姿を現した。一キロ以上もそうやってついて来る確かな存在である。

間合いを計って――いや、少しずつ距離を詰めて来ている。攻撃を仕掛けるチャンスを窺っている。

仕掛けて来るとしたら、逃げ場のない一本道の雉飼場か。

その前に、逃げるか――逃げるチャンスは何度もあった――戦うか、決めなければ。

――逃げるなんて！

こんな時の為に、下手な男には負けない体力と、武術を身に付けて来たのではなかったか。

あの時、女を棄てようと決意したのではなかったか。

――だけど、この胸の高鳴り！

何せ、実戦経験不足で、ハートがまだできてない。これでは息が上がって、身体が縮^{からだ}かんで、満足に戦えやすまい。

先手・後手自在の空手などの飛び道具と違って、柔道はどちらかといえど受身からの攻撃となる。水のように冷めた目で、冷静に敵

の動きを見究め、打撃をもろに受けないよういなしながら接近戦を制して、相手の懐に飛び込んでしまえば、掴まえてしまえば、こっちのもの。

胆力――が必要なのだ。肝っ玉が！

――おまえは母の胎内に玉を二個置き忘れて来たな。

と、福岡の伯母にいわれたことがある。けど、一度なりとも修羅場を潜らないことには、肝っ玉は据わらないへジェットコースターも最初は恐かった。

ならば今がそのチャンス。天恵の試練。伸るか反るか。

光子は、腹を決めた。

前に続く

この先、墓地が途切れた所に、墓地を挟んだ一通の道路が出合う所がある。そこは道が広まって平らな、ちよつとした広場になっていて、鋭角に左に上る狭い道と、真っ直ぐ雉飼場から本光寺に向かう広い道に分岐する。そこで一戦を交えよう。

そう腹が決まると、そこは並みの少女ではない。田川の侠客の孫であり、娘である。光子は自転車を小脇に佇んで、坂道を上って来る人影を持った。

——ござんなれへ福岡の伯母の口癖である。

どんなやつか現れるか、ゾクゾクした。

しかし、その広場の片隅に、フルスモークの黒いセダンが止まっていることには気付かないでいた。無理もない。それだけ迫って来る怪人に気を取られ、悲壮な決意に興奮してもいたのだ。

後方でカチャという音がしたので半身振り返ると、防犯灯に照らし出されて、のっそり車から迷彩服の男が出て来るところだった。

そいつは同じ色のツバ広帽を被ってサングラスをかけていた。デングジャラスな男であることは、仁王立ちしたその全身が物語っていた。運転席からも頭の禿げた男が姿を現す。こいつはサングラスも帽子も被ってないけど、亀のように顔の半分を黒いハイネックセーターに埋めていた。やはり、アーミーグリーンの軍服のようなブルゾン姿。

——何んなのよ？ これ。……こんなのあり？

下腹がキュツと締まった。

前門の虎、後門の狼である。これでは勝ち目はない。

(ママ、助けて！)

光子は心の内で叫んだ。

その時。

「ヒメ！ わしの後ろに！」といって、いつの間にやって来たのか、

長い棒を持った魔法使いが、光子と男らの間に割り込んでしわがれ声で叫んだ。

けど、いかにも苦しそうに、肩で息をしている。中腰になって、棒でようやく体を支えているような有様。フード付きジャンパーに、夜目にも鮮やかな赤いニッカー・ポッカー姿。

その声ですぐにわかった。三、四年前から屋敷の納屋に住み着いている片腕のテキヤだった。中味のない右袖をブラブラさせている。八十はとっくに超えた老人である。

「何んな。松つあんな」

「こげなこともあるか思うてな」松吉は男らに向き直って、「おい、おまえら、何者んじゃない！」といった。

男達は顔を見合わせた。

「ヒメに手を出すと、五徳のマツが承知せんぞ！」

「ちっ！」と、男らは舌打ちして、ボタン、ボタンと、セダンに乗り込み、「ジジイ邪魔だ、どけ！」

といって、恐ろしい勢いでバックし、タイヤを鳴らしてユーターンすると、一通を逆走して下って行った。

「ふあはふあふあ。ヘコカルイどもが！」

ヘコカルイとはフンドシ担ぎという意味である。今でもタオルで手製のフンドシを捲えて締めているテキヤの松吉は、弁慶のように棒を突き立てて、一本しかない黄色い墓石のような門歯を見せて高笑いした。

「ああ、助かった。けど、松つあん」光子は自転車のスタンドを立て、松吉の傍に行った。「脅かさんでよ。松つあんの方がよっぽどオジ（怖い）かったは。魔法使いみたいな格好に見えたんじゃないもん、怪しい人か思うた」

「あいつらよりか？」

「あいつらの方がまだまし。可愛い顔してたじゃん」

「ほほほっ。ようゆうわい」

「でん、こんことは、内緒にしといてね。ママが心配するといけん

けん」

「よか。よかばってん、ヒメもこげなとこ、暗うなつてからは通らんようにせねばな。わしがおったからよかったものの。ママが聞いたら卒倒するばい」

「うちかてむざむざやられはせん!」

「――おお! これは頼もしい。したら、腹ば、括つとったとか。うーむ。血は争えんのう……」

あとでわかったことであるが、母の遼子にはすっかりお見通しだった。おとなしくタクシーで帰るような子ではない。だから松吉を迎えに行かせたのであった。光子の性格と日常の行動を知り抜いている遼子は、桜ヶ丘の楊志館高校の前で待っていればよいといった案の定だった。

しかし、懸念が現実になったことまでは知らぬが仏となる。それは松吉と光子だけの秘密となった。

「なあ、松つあん。あいつら何者やろう?」自転車を押して歩きながら、光子が訊いた。

「学校の先生には見えんかったな。パーマ屋の親父にも見えんかったじゃろう?」

「まだうちら狙われてるんやろうか?」

「さあ。――ばってん、五のヒメ。若いオナゴが、こげな時間に、こがんとこ通るんは、真っ裸で歩くんと同じことぞ」

「――もう! わかったけん、いわんで。それに、いいかげん、その、時代がかった、ヒメ、いうのもやめてくんない」

先代親分の代から城島家の娘をそう呼んで仕えて来た松吉であった。何度もそう注意されるけど、改める気はない。

雉飼場の樹木のトンネルを抜けると、道がまた三つに分岐して急坂になる。左に行けば本光寺、榊原家の入母屋造りの屋敷は、右手に上って暫らく行った所の高台にある

前に続く

その日遼子は午前様になって帰って来た。

とりあえず娘の部屋を覗いて、光子がベットにおとなしく寝ているへタヌキ寝入りであったが、の確かめてから電気を消し、キッチンで、有り合わせのもので夕食をとった。

納屋にはまだ電気が点いていた。ボディーガードを任じている松吉はまだ起きているのだろう。いつもながら、遼子の赤いアルトがガレージに納まるのを待ってからでないと、決して寝ない。

キッチンの窓からポツリと納屋の電気が消えるのが見えた。今は女しかない一軒家。九十近い老人とはいえ、心強いボディーガードである。もう一人若いのがいたけど、今は畑中の刑務所に入っているへといっても、まだ拘置区で未決拘禁の身であるが。

ドモリのタツという気立てのいい青年だったけど、ちょっとしたことで強盗・傷害の罪に問われている。根岸先生は何とか恐喝・傷害程度で執行猶予をとれないものかと頑張ってるけど、どうなることやら。

二人とも福岡のお義姉さんの差配によるもので、離縁した夫は三年前に獄死、子供らは父親と死別して、遼子としてはもう城島家とは縁が切れたと思っているのに、「光子と竜平は血を分けた可愛い姪子と甥子、どうして放っておけるもんね」といって、ややもすれば光子を養子に欲しがった。迷惑な話だったけど、今はよかったと思う。

さつき見たら、ガレージと家の間に光子の赤い自転車が停めてあったから、やはりタクシーで帰らなかったのだろう、松吉に迎えに行ってもらってよかった。松吉は植木の手入れや、板壁の補修、屋根瓦の防水ペンキ塗りなど、ほかにも屋敷の細々としたメンテナンスにも気を配ってくれて、本当に助かる。

だけど光子には困ったものだ。

コーヒーを入れながら思いは光子に移る。親のいうことを少しも聞かない。小学生高学年の頃からもう自分より背が高く、中学生になつたら見上げるようになって、叱るのにも迫力がない。

特に今は進路のことで険悪な関係にある。できれば近くで平凡なOLに納まって欲しいのに、警察官になるといつて利かない。公安職はこりごり。それだけではどうしても譲れない。大学に行けばまた気が変わるかもと思って、経済的には苦しいけど進学を強く進めるが、駄目。進路指導の先生に相談しても埒があかない。

困り果てて、光子が一番恐れている、福岡の竜子お義姉さんに言い聞かせてもらおうとしたら、これがとんでもないやぶ蛇になった。「光子を警察官なんぞにさせたら絶対いけん。警察も検察も裁判官も刑務官もみんな親の敵^{かたき}。光子をうちに預けんしゃい。光子は普通のオナゴにおさまるような子じゃなか。一つ道をば違えたら、大変なこつうやらかす娘^こばい」

といって、テキヤの跡継ぎにしようという腹なのだ。明治以来の名門の門流、光子の祖父の代から始まった「天門屋一家」が不景気で衰退し、後継者問題に揺れている時期であった。

法律事務所開きの時に、一度だけお目にかかったことのある木之元の親分は、今や耄碌^{もうろく}していて、昼日中から焼酎を飲み、倍賞千恵子の「下町の太陽」や「さくら貝の歌」を聴きながら涙ぐんでいる有様とか。今は竜子義姉さんが支えているけど、将来を思えば、一家十五人へ家族を合わせれば五十人余りの川筋者の命運は、創業者直系の孫娘、光子にかかっているというのだ。

冗談じゃない。光子は榊原家の愛娘、テキヤの親分にするくらいなら、まだ警察官の方がまし。遼子は早々に逃げ帰ったのだった。だけど親の目から見ても、竜子がいうように、光子はちよつと変っている、何を考えているのかわからない。遠くを見つめるような目をして、何かに向かって突き進んでいるように見える。だんだん男のように猛々しくなつて、顔は丸顔で似てもいないけれどー親

の欲目かも知れないけど、誇らしいほどキリッと引き締まった好い顔をしているーしかしその女豹のような精悍な眼差しは、ハツとするように別れた元夫に似ている。

頭が悪いので検察官にはなれないから、警察官になろうというのだらう。警察官になってどうしようというか。元夫のようにまた正義に殉じようというのか。

そればかりは。何とか普通のOLで傍に引き留めておく手立てはないものか。親に少しも甘えることのない子で、あれよあれよという間にもう頭を撫でてやることも、抱き締めることも憚れるほど、大きくなってしまった。

そこへいくと竜平はーコーヒーを飲みながら遼子の思いは東京で大学生活を送っている長男の竜平に移る。

一時、心がなごむ。疲れた体にコーヒーの甘さと苦味が心地よく染み渡った。

光子より三つ年上の竜平については申し分ない。大学進学も一発で東大理学部に合格し〈法学部でなくてよかった〉、生物科学を専攻して着実に学者への道を歩んでいる。

元々内気で学究肌の子だった。榊原家の方の血を引いているのか、父も母も祖父も教師だった。大学教授にでもなってくれたら万々歳。福岡のお義姉さんには、「しゃきつとしんしゃい、しゃきつ」といつもいわれていたけど、親思いの優しい子で、学費や生活費は全部バイトで賄い、お誕生日にはきつとプレゼントを贈って寄すし、月を置かず電話やメールで気遣ってくれる。

女の子一人しか儲けなかった父・母にとっても、竜平は待望の男の孫であり、自分が離婚してからは、榊原家の跡継ぎができた大喜び、優秀な孫を、二人とも目を細めて見やっていた。

そこでまた、なごんだ気持ちに不安が入り込む。

今度は父親の容態のこと。肺ガンで入院を繰り返している父親の史朗は、今度が最後の入院となるかも知れない。肺炎を起こす度に、命の炎を小さくしている。三年前に母親の菊を看取ったばかり

であつた。

前に続く

思えばここ五年は、両親の看病や介護であつという間に過ぎた五年だった。子供らも難しい時期で、手を焼くことが多かったし、親族を含めて入学・進学・婚礼・葬儀など、通過儀礼も目白押しだった。

その間に再婚話もあったのだが、元夫とは愛想が尽きて別れたわけじゃなし……。

しかしその思いも断ち切れ、貴重な女の時期をも逃してもう四十も半ば、更年期障害を抱えた遼子はのろのろと立ち上がり、後片付けを始めた。

そして大儀そうに左右に揺れながら寝室に向かい、布団を延べて、光子が寝ている二階を見上げて電気を消し、疲弊した体をごろりと横たえた。

光子は胎児のように丸まって爪を噛んでいた。そうしながら船を漕ぐように体を揺すっていた。

——あれしきのことで、あんなに怯えるなんて。松つあんが怪しい不審者に見えてしまうなんて。

——何と弱々しい心！

体は鍛えられても、心はそうはいかないのか。体と心は一体ではないのか。

あいつらと一戦交えていればどうなっていただろう。拉致されていたか。メタメタにやられていたか。それとも撃退していただろうか。

——タフにならなければ。もっともっと心身ともにタフにならなければ。

“明日からまたあのベルトを巻こう”

三年前、突如、巨大な隕石が落ちて来て、世界が真っ暗になり、暗澹たる心に、瞋恚の焰が灯った。

あの時の悲嘆と憎悪は今なお少しも衰えてはいない！

——そうなのだ！

国家権力を手に入れないならならぬのだ。

国家の中の国家、権力の中の権力と対決するには、権力を手にしなければ。でなければ、テロリストになるしかない。

権力を手放した為に、父は国家権力によって惨たらしくなぶり殺しにされたのだ。——むざむざと。

きつとそいつらに悪の焼印を押してやる！ ソドムのように、神の火で焼き滅ぼしてやる！

——きつとそうしてやる！ ——そうしないでおくものか！
いつしか光子は夢現の中を彷徨っていた。

光子は戦士だった。

額に銀の鎖で編んだバンダナを巻き、黒い面頬を被って、鎖カタビラの上から丸い肩の鎧を纏った短いスカートの少女戦士は、右手に両刃の剣を持っていた。

剣を持った右腕と左足の太腿には、聖職者が巻く黒革のトゲトゲの付いたシリスベルトが巻かれてあった。

少女戦士は右膝を立て、シリスベルトを巻いた左膝を折り曲げて膝頭を地に着け、お祈りのポーズをとった。左膝にトゲトゲが食い込んで血が滴り落ちる。剣を持った右腕を折り曲げた。同じように血が滴り落ちる。

少女戦士は勇ましく立ち上がり、剣を振りかざして、鷹のように甲高く叫ぶと、地平線の向こうの暗黒に向かって、広野を突っ走った。

行く手を阻む様々な怪獣やモンスターを打ち倒し、突き倒し、斬り倒して、突き進む。

行く手には、暗黒のマントを纏った魔王が聳え立ち、マントを広げると、無数の銀河がきらめいた。

アンドロメダ銀河辺りに金色の目が明き、M51に赤い口が開いて、電子音的な嗤いが雷鳴のように轟いた。

闇の軍勢が甲冑具足の音を立てながら西から東から南から北から黒々と天空を行進する。

閃光が闇を走って、マクロコスモスに闇の軍勢と、暗黒の魔王を隅取る。

光子は暗黒の魔王に向かって泣き叫びながら剣を振り回した。突き、払い、振り下ろした――。

その熱狂はいつまでも続いた。

母親に抱き起こされても泣き叫び続けた。

抱き締められても泣き叫び続けた。

母親は癪の強い娘がついに発狂したのではないかとおろおろして、頬をペタペタ叩き、呼びかけ、赤ん坊をあやすように膝の上であやした。

我が娘の初のテンカンの発作に、その熱く濡れた頬に頬を押し当てて強く抱き締めるより成す術を知らなかった。

強い怒りによる絶叫によって、舌を噛み切らずに済んだのは、真に幸運だった。

光子は白目をむいて抗い、仰け反り、激しく痙攣しながら、なおも泣き、絶叫した。

「――お・お・お・おー！　――お・お・お・おー！　――お・お・お・おー！　――お・お・お・おー！　――お・お・お・おー……」

ミツコ記

その子を愛^めで、

その子を慈^{いつく}しんで、育^{はぐ}むがよい。

そして、

その血を、捧げものへ生^{いけにえ}贄^えとせよ。

その一　X Xとメメの子——タツオ

村上カメの孫娘メメが彦山川の河川敷で父無^{てな}し子を産み落としたのは一九八六の五月のことだった。

まだ中学生のメメは、気丈にも後始末をちゃんとして、赤子を彦山川の水で清めた。台風が通り過ぎたあとで、空は真^さつ青^お、景色は目が覚めるようにみずみずしく、清らかであったが、川の水は濁っていた。

赤子はしかし産声をあげることなく、仮死状態で産まれており、産婆なら尻をバシバシ叩いて泣かせるだろうけど、幼いメメにそんな知識はない。ぶよぶよした赤黒い肉塊を持って余して、タオルの上に横たえた。途方に暮れて香春岳を見上げる。

近くで草を食む牛がのどかに鳴いた。

犬猫の子なら可愛いだけ残し、ほかは目が開かないうちにズタ袋に入れて川に流すのが常だったから、そうしようかと思った。家に持ち帰れば、バアバにどれだけ叱られるか。

赤子はもう死んでいると思った。丸めた小さな口に皺んだ目、握り締めた小さな手、足の腹を見せた細い足、力んでいるようにも見えるが、ピクリとも動かない。

そこへ。

サッと一陣の風が吹いて、どこからともなく天使が舞い下りて来て、赤子に命を吹き込んだ。

赤子が弱々しい産声を上げたので、メメが振り返って見ると、一匹の黒い大きなアブが、アブが赤子の尻にとまっていた。

村上カメは、我が娘がメメをひり出した時のことを思わずにいられなかった。相手は富山のクスリ売りで、毎年宿を貸してやっていたのがアダとなって、三七歳の箱入り娘がクスリ売りの子を孕み、置きグスリと一緒に子ダネまで置いて行ったヤクザなクスリ売りを追い駆けて、娘は産まれて間もない赤児を置いて家出してしまったのだ。

何という因果であろうか。

今度はその手塩にかけて育てた孫娘のメメが、年端もゆかないメメが、母親と同じ過ちを犯して、塩垂れて帰って来たのだ。道端で子猫でも拾ったかのように、タオルで包くるんだものを抱えて。

何んぼ問い質しても、メメは頑として憎き狼藉者の名をいわなかった。が、ともかく、生まれた子に罪はない。産土うぶすなの神の授かり者である。便所にひり落とした者もいれば、ゴミと一緒に棄てる者もいる。よくぞ亡き者にせず連れ帰ったとカメは、叱られるのを覚悟でうなだれている孫娘にいった。

——しょうのなか！ 早よ、風呂場さ行って、体ば、洗ってこい。赤子は小さな手足を動かし、そねくりばって、力強く泣いた。

九十二歳のカメは、九十度近く曲がった腰をトントン叩いて、手て涙ばなを飛ばしてから赤子を抱き取った。

——おお、よしよし。どげんした？ お尻の痒いとか。オシメば、すけてやらんばね。まだまだ、バアバも死なれんわいね。おほほほ。——
といったあやした。

仮名文字しか書けないカメは、今度こそ間違わないようにと、ボールペンを舐め舐めしながら用心して、「タツオ」という名前を書

いて出生届けを出した。竜太郎親分の竜の一字をもらったけど、竜夫という漢字が書けなかったのだ。孫娘の時は「ナナ」と書いたつもりが「メメ」になっていた（博多で「メメさん」といえば何の愛称であるか、知る人ぞ知る）。

その二 ドモリのタツ

メメの子タツオは大きくなって「ドモリのタツ」と呼ばれた。

ドモリのタツが十二歳になった時、カメはもう鬼籍に入っていたが、「ネエネエ」とか、「メメさん」とか呼んで、いた母親のメメは稼業先で事故に遭い、それが元で若死にした。

天蓋孤独になったタツオを引き取って面倒を見たのが「片腕のタツ」こと、五徳の赤峰松吉であった。

ために、タツオは松吉のタネではないかという者もいたが、それは年齢からして考えにくい。むしろ、「後家殺しのタツ」とも異名をとった松吉と、戦争未亡人のカメがいつ時人も知る仲であったから、その辺の義理からと考えるのが妥当なところだろう。

タツオは赤峰松吉によっていっぱしのテキヤに仕込まれた。

その「片腕のタツ」と、「ドモリのタツ」が、大分の榊原家に食客となって身を寄せた時には、まだ先代親分の長男、城島竜二は名古屋刑務所に服役中の身であった。離婚した元妻、当家の遼子お嬢さんと、二人の間の子供は、籍を榊原に移していたけど。

若親分、彼ら一類はそう呼んでいつの日か竜二が一家に戻って来てくれることを切望していた。が、刑務所で非業の死を遂げると、復縁の望みもなくなり、彼らは食客からちゃんと家賃を支払う間借り人になってケジメをつけた。だけど、危険はさらに高まったと、なおも居座ったのである。親子は死別したけれど、甥・姪の血の絆は切れないという博多の意向であった。松吉も居心地がよかったのだろう。

ドモリのタツが初めて傷害事件を起こしたのは、榊原家の居候から間借り人になって何年か後のことである。

齡二十二で、見かけトツチャン坊やのタツは、体格もよく、強靱

な体力を持ち合わせていたにもかかわらず、軽く見られがちで、吃^{きつ}音をバカにされたり、よくケンカを吹っかけられたりした。

けど、墨を入れたり、強面を作ったりするのは性に合わずーそれこそが稼業人にとって無用な争い事を避ける一番のことなのにー笑って受け流した。

見かけ通りの温厚な性格で、争い事を好まなかったから、これまで大した問題も起こさずに来られたのだが、内心はそうとう無理をしていた。

中学時分に一度ケンカに巻き込まれて相手方にケガを負わせたことがある。そこで学習したのが、ケンカは高くつくということ、人間は感情的になったらおしまいだということ、自分は意外と強いということだった。何より義のないケンカをしてメメちゃんや、バアバを悲しませたことが、心優しいタツオを後悔させた。

以来、虚勢を身に着けるより、愚鈍を装おい、辞や腰を低くすることで無用な争いを避けるという、防衛機制を働かせるようになったのだ。決して気が弱いわけではなく、爆発的エネルギーを内に秘めていただけであった。

それがとうとう臼杵^{うすき}市の城址公園桜祭りでの商いの際に爆発した。タコ焼き代金を踏み倒して逃げた高校生の不良どもを、袋小路に追い詰めて殴ったことから、臼杵署に傷害の現行犯で逮捕されたのである。

それが単なる傷害事件では収まらず、強盗・傷害という大変なことになるってしまったのは、強引に代金を徴収したからである。タコ焼き代五〇〇円を意に反して徴収したことが、強盗罪を構成する要因となった。

だが、逮捕直後のタツはそうはいっていない。「威嚇したわけではなく、代金五〇〇円は向こうから投げて寄こしたものであり、殴ったのは小刀を構えて挑みかかって来たからだ」ーと、警察官への弁録では抗弁していた。

しかし、諸般の事情から検察官は「強盗・傷害」容疑で起訴し、

刑法二四〇条を適用して、懲役七年を求刑したのである。タツも警察・検察に攻め立てられて前言を翻し、検察官の調書では、ほぼ警察の捜査通りを供述している。肝心な小刀が出て来なかったのと、目撃者の証言があったからである。

その三 根岸法律事務所

この事件の弁護を引き受けたのが、元城島法律事務所のイソ弁だった根岸ともみ弁護士であった。

城島法律事務所は、ボス弁の城島弁護士の刑が確定したことから、弁護士会から免許剥奪の懲戒処分を受け、閉鎖された。

根岸ともみ弁護士は、この地に根を下ろすことにしたのか、そのあとを居抜きで借り受けて「根岸ともみ法律事務所」を立ち上げたのである。事務員もそのまま榑原遼子と、大分大学の学生当時のからのアルバイト・東トシ子を雇い入れたから、表向きには経営者が代わって看板が変わっただけだった。

東トシ子は、大分大学を卒業してなおも弁護士をめざしているけれど、司法試験は高いハードルのようだった。半ば諦めているのかと思いきや、左にあらず、実務から先に勉強して、司法試験合格後は速やかに法律事務所を立ち上げられるよう目論んでいた。実家が佐賀関で水産会社を営む資産家であるから、資金面の問題はないとしたチャッカリ者である。

城島竜二と別れてからも城島法律事務所の経理事務に通っていた榑原遼子は、かつては使用人だった者から使われる身になったけど、経済基盤が維持できて有難く思っていた。

おまけに、高校を卒業してブラブラしていた娘の光子まで助手として雇ってもらっている。根岸ともみとは色んな経緯があったけど、二人の友情はいささかも揺るぎはしなかった。

案ずることもなく、光子は何度警察官採用試験を受けても、合格することはなかった。やはり親が犯罪者であり、祖父がテキヤであつては、ムベなるかな。

根岸ともみが苦笑いしているのを、「じゃあパパはどうして検察官になれたの」と、光子は口を尖らせる。

「その点は、検察官はわかりかし資格が緩やかなのよ」と根岸ともみ

はいう。「でも、司法試験に合格しても、危険な思想にかぶれていたりすると、裁判官や検察官には採用されない場合もあるけれどね」
光子は逆立ちしても司法試験に合格するような頭はない。遼子は頭の悪い子に生んでよかったと、光子がいない所で根岸ともみにいって笑った。

「どうして光子ちゃんは官憲にこだわるのかしら？」

「さあ。……あの人の血を一番引いているからじゃない」

「大学で柔道を極めればよいのに。九州でも無敵なんでしょう？」

「福岡に田村という強いのがいるらしいけど、軽量級だからお姫様抱っこしてしまえば、カメを裏返したようなもの、空中で絞め落とせば――なんてえらそうなこといつてるけど」

まだ光子が小学校低学年頃から可愛がっていた根岸ともみは、今や自分と同じ目線になり、自分より逞しく成長した光子を、そういうながら手元に置いておきたい風であった。

光子の方も幼い時分からカッコイイ根岸に憧れ、姉のように慕っていたから、助手の仕事もまんざらではないのかも知れない。何でもいい合える気が置けない姉妹のような二人の様子を、遼子は目を細めて眺め、これが最良だと思った。ずっとこのままであればどんなによいかと。

その四 面会

機会を捉えて光子は根岸ともみと畑中の刑務所へ行き、面会室で久方振りにタツオと向かい合った。

前に一度、母親と松吉と三人で差し入れ方々面会したことがあるけど、その時は法律事務所に勤めていたわけではないので、立ち入ったことは何も聞かなかった。

しかし今は切羽詰った状況である。最終弁論が近づいているのだ。このままだとタツは五、六年の実刑を食らうことになる。弁護人の根岸ともみの危機感がひしひしと光子にも伝わってくる。

根岸ともみ弁護士の弁論戦術は罪一等を減じて、何としても執行猶予を取ることだった。その為には検察サイドの事実認定を覆さなければならぬ。傷害の事実歴然としているので、それに至るまでの過程――タツの方が身の危険を感じたことを証明しなければならぬ。

目撃証言を覆す為にはどうしても物証が必要だった。今や拳証責任は被告人の方にあるのだった。

光子は、三つも年上のタツオに、凜とした声で訊いた。

「タツ！ ほんとはどうなん？ 相手は小刀を持ってたん？ 持ってたなかったん？」

「……んんんん」と、ドモリのタツはアクリル板の向こうで低く唸っていたが、百メートル先にいたフランス人がいきなり目の前に現れたかのように、「もも持ってた！ ひ、肥後守（ひごのかみ）の、くくく、黒くて、おおっ、大きいやつ！」と急ぎ込んでいった。

「なら、なんでそういわんの！」

「いいいった。いった！ けけけけど、き、聞いてくれんちゃ」

「ほんで、認めたん」

タツはうなずいた。「さ、裁判官には、き、きつと、聞いてもらえる」

「――バカ！ 裁判官も検察官も同じ法律家ったい。いったん認めてしもうたらおしまいたい」光子は相手によって福岡弁になったり、大分弁だったり、ごちゃまけになったりする。「ほんなら、小刀を持って向かって来たんは、間違いないんやね！」

タツはうなずいた。うなずいて、「ヒ、ヒメ！」といって身を乗り出して来た。

「な、何んな？」

いきなり濃い顔が近くに寄ったので光子は少し引いた。

「……じ、……じ、じじじじ自分がおそ、おそ、お傍におれんでししし……しししし、し、心配で、心配で」

「あんたはひとの心配より、自分の心配をしちよきよ！」

ラビット関根のような大きく円らな黒い瞳の中で星がいっぱい輝いている、切実な顔のタツオに、光子はぴしゃりといった。

根岸ともみは苦笑いをしていた。

その五 事件現場

そんなことがあってから光子は三度事件現場を訪れた。

一度目は週末の金曜日に、ボス弁と、社用車のエブリイを免許取得して間がない光子が運転して出掛けた。コースは一九七号線を通って坂ノ市有料道路から臼杵に入るコース。

さすが運動神経抜群の光子、少々スピード出し過ぎであったが、危なげない運転であった。

「たったの五〇〇円、しかも代金を取り立てただけじゃん。懲役七年はちよつと酷くない？」光子が訊いた。

「たとえ一〇〇円でも、脅しつけ、自由を奪って、意に反して強取すれば強盗罪になるのよ。恐喝との境目は難しいけど。つい先だって同じような事例の判決があつてね、食い逃げの客を、居合わせた客が取り押さえて、殴って代金を払わせたただけなのに、やはり強盗・傷害罪に問われて、懲役六年の実刑にね」

「へー。法律って変なところに厳しいんだね」

「法は変らないわ。それを適用するかどうか、構成要件をどう判断するかによるのよ」

強盗罪は「暴行又は脅迫を用いて、他人の財物を強取したり、財産上不法の利益を自分で得たり他人に得させたりすると成立する（ウィキペディアより）」ということなので、状況は極めて不利である。現実に暴行を加えて全治一〇日間のケガを負わせているのだし（これについては病院代はもとより、慰謝料一五〇万円を支払っている）。

これに対して根岸弁護人は――。

一、自由を奪ったかどうかについて、「袋小路といっても屋敷と屋敷の間に九二センチのブロック塀があつて、逃げようと思えばそれを乗り越えて隣の敷地に逃げることは可能だった。相手は一人、自由を奪われたことにはならない。

二、脅迫について、「被告人がヤクザであるかどうか、イレズミを見せて脅したわけではなく、被告人はイレズミをしていない、見た目普通の人と変らない、むしろ、気が弱く善良そうに見える、もしヤクザだという認識を抱いていたのなら、少年らが、『おっちゃん、イカのタコ焼き、ないんかいな、イカのタコ焼きちようだい』などと茶化したり、長らく長椅子を占拠して、寄って来る小・中学生を睨み付けるなどして営業妨害的な振る舞いをしたり、代金を支払わないで逃げたりしない筈である。

三、強取について、「被告人は代金を手にしていない。代金は知面にばら撒かれていた。これでは財物を占有したとはいいい難く、既遂していない。

四、暴行について、「それらの行為のあとに暴行が行われたのであり、これは少年の供述から、そして目撃証言からも明らかである、暴行によって、少年を畏怖させ、自由を奪い、その意に反して財物を強取したのではない」

と主張。

これに対して検察は、「弱そうなヤクザだからからかってやろうと思った」という被害者の少年達の供述を取り付けており、最高裁判例の「社会通念による」という判示を持ち出して、必ずしも、自由を奪われたかどうか、脅されて畏怖したかどうかの証明は必要としない、ヤクザというだけで畏怖し、反抗の気力と、逃げる自由を奪われる、しかも暴行まで受けているのだから、強盗罪の要件は充分満たす、という主張。

「で、どうなの？ 勝ち目はあるの？」あらましを聞いて、光子が訊ねた。

「今のところ劣勢だわ。少年達の証言を翻させるか、ほかの証言者を見つけ出すかーそれでもやはり、小刀が出て来ないことには難しいでしょうね」

「だって、指定暴力団にも指定してもらえない、仲間内でハバを利かせるためにだけ突っ張ってるような、たった一五人しかない弱

小組織だよ。今時の不良の方がよっぽどヤクザだよ」

「テキヤというだけでそう思うのが社会的通念なのよ」

「目撃証言は何とかならないの？」

「そうなのよ。崩すとしたら、そこからだわ。小刀の方は警察の
海戦術で見つからなかったんだから、たった二人で探し出すのは……
ね。もう一年以上も前のことだし」

車は臼坂きゅうはんトンネルに入った。暫らく二人は前を向いて黙った。

長いトンネルを抜け、明るくなった所で光子がいった。

「大勢だから見えなくて、一人ふたりだから見えるってこともある
んじゃない」

どこまでも自分の都合のいいように考える、能天気なアスリートの
光子の向こうに、根岸ともみはある人物を思い描いた。

「だって、世間はテキヤはヤクザだと見るけど、あたしなんかタツ
をそういう目で見たこと一度もないもん。少年達だって、きっとそ
うだよ。だからいたずらしたんだ」

「だいいいけどね」根岸ともみの心はよそへ行っていた。

前に続く

白木市には一二時前着いた。

なので、天気もよかったし、今橋口から城址公園に車を乗り入れて、お昼までのひと時をぶらつくことにした。

多目的広場では着膨れた年寄りがゲートボールをしていた。花金なので若いカップルの姿がここに見られたし、観光客がそぞろ歩いていた、家族連れも桜の木がまばらに生えた芝生で子供らを遊ばせていたりしている。

そこへ現れたスタイルのいい背の高い二人の女は、それらの人々の目を引かずにはおかなかった。

栗色の髪が面長で端整な顔を流麗に縁取り、黒いウールのハイネックが覗いたダークスーツ姿の根岸ともみは、とても三十九歳には見えなかった。黒っぽく踵の低いパンプスを履き、襟に金色の弁護士バッチが光っているのを除けば、今日は黒づくめ衣装で決めている。そのまま結婚式場の係員にもなれるし、葬儀場にも行ける。

片や光子の方は、若くはちきれんばかりの上体をラベンダー色のTシャツと青いジーンズで包みへ裾は出したまま、やはりはちきれんばかりの下半身をリーバイスが女の子らしい曲線を描いている。靴は赤い線が二本入った白いスニーカー。

圧巻なのは肩パットを入れているようなたくましい肩と二の腕、そのわりには小振りの丸く形のいい頭と――頭に筋肉は付かない――凛々しい顔が、その上に置かれたように乗っている。髪は後ろで一纏めにして緑色のゴムで縛っている。

光子は幼い頃のように根岸ともみの腕を取り、ぶら下がるようにして歩いた。背丈はもう同じくらいになっている。若干光子の方が高いくらいだ。それでも気持ちは前のままだから、頭を根岸の肩に乗せて、抱えた根岸の腕をぶらぶら揺すって歩く。

無遠慮に二人の顔を覗くように見て通る者がいた。振り返って見

るカップルもいた。

二人は空濠の方へ歩いて行った。桜祭りの際には左手に桜が咲き誇り、両側に屋台店が軒を連ねていた筈である。

濠端に来て、「あそこ。村上タツオの屋台があったのは」と根岸ともみがいった。銀杏の大き木が二本生えている辺りを指している。

「ふくん」といいながら光子は、それなら人の流れからすると、本通りから外れているなと思った。光子は中学卒業の時と、高校生になってからも一回、友達と桜祭りに来たことがある。

その時の様子では、古橋口から大門櫓おおもんぐらを通って来る、または行く客の流れは狭いこともあって、少なかった。シヨバ割りで貧乏クジを引いたことになる。シヨバ割りを仕切る地元の親分がしっかりしてないと、それでよく悶着もんちゃくが起きるのだと、松吉がいていた。

二人はそれから両側に空濠を見て本丸に向かった。といっても、本丸らしき形跡はどこにもなく、草が生えた中に桜の木がまばらに植えられているだけ。

亀首櫓とつばながあったという突端は断崖になっている。そこからの景色は絶景だった。臼杵湾が一望できる。

残念なことに、かつて潮干狩で賑わった崖下の海は広大に埋め立てられて、岸壁はフェリー乗り場や、船付場になっていて、埋め立て地には市役所や、消防署や、警察署など官公庁の建物が寄り集まっている、民間の建物や家屋も密集していて、臼杵城が丹生島という島に構築された島城であった昔の面影は微塵もない。

根岸ともみは初めて見る景色でもなかったが、海風に髪をなびかせながら、その絶景に見入っていた。

左右に出入りの激しい海岸線があり、湾の中央にお碗を伏せたような津久見島がポツカリ浮かび、その向こうにも二つ、光子の知らない名前の島があった。

「あそこに見える」光子は左手の海岸線の出っ張りの向こうを指して、「あれが若林水軍の海賊城だった黒島、そしてその先っぽに見える小っちゃな島、三ツ子島のうちの一つだと思うんだけど、あの

辺りにほら、ウイリアム・アダムスのオランダ船「リーフデ号」が座礁してね。日本に初めてオランダ人が上陸したんだ」

光子は大分弁と福岡弁と標準語を使いわけるマルチリンガルである、根岸ともみと話す時だけ標準語になる。

「ウイリアム・アダムスって、三浦^{みうら}按針^{あんじん}のこと？」

「そう！ さっすが、あったまいい！」

「でも、そうだった？ 豊後国というのは間違いないけど。ここだった？ ウイリアム。アダムスはイギリス人なのよね」

「知らない。でも大友宗麟公が大砲をもらってるんだから、ここに間違いないよ。その大砲飾ってあるから、あとで見に行こ」

その「国崩」と命名された日本初の大砲「佛狼機^{ふらんぎ}砲」のレプリカ

——本物は靖国神社に展示してあるというーと、大友宗麟公のレリーフを見てからへ根岸ともみが感動したのは同じ作者による銅像「廢墟」の方だった、そしてそれらはもう前に一度見学済みであった、臼杵トキワ三階のレストランで食事をした。

二人ともカニピラフ。育ち盛りの光子だけそれにハンバーグを追加した。根岸ともみは食後にコーヒーを飲みながら、光子の旺盛な食欲を見入っていた。

「タバコ、やんないの？」光子が顔を上げて訊く。

根岸は、今日はまだ一本も吸ってなかった。少なくとも光子の前では。

「ここ、禁煙みたい」

そういえば、他の客は誰も吸ってない。入り口に「店内禁煙」の札が下がっていたのだ。

ロングピースを咥えて、ボーと立っている根岸ともみの姿は、魂がどっかに行ってるみたいで、でも、何んて、ニヒルで、カッコイイんだらうと、光子はよく思う。

それで、中一の時にこっそり父親の部屋からタバコを盗み出して、鏡の前で真似して吸ってみたことがある。でも様にならなかった。やはりオリーブ色の肌をして、美人で面長で、ちょっぴり男っぽく、

外人のように彫りが深い顔でないと、浅黒く日焼けした肌の丸まっ
ちい顔では様にならない。だから、タバコは大人になってからも吸
おうとも思わない。

「どうしたの？」根岸が訊いた。

今度は光子の方が根岸を見つめていたようだ。「ううん。何でも
ない」

時期によって、根岸ともみの様子ががらりと変えることには、もう
慣れている。戸惑うことはない。けどやはり見つめてしまう。

(……今はオスカルモードだ)

顔つきがそうだし、柑橘系のコロンと、アフターセイブローショ
ンの匂いがする。そういう時だけタバコを吸うのだ。

前に続く

食事を済ませると、二人は事件現場に向かった。

事件現場は城南地区港町、二の丸の城壁に、一列になってへばりつくように建ち並んだ民家のうちの一軒の敷地内だった。

城壁といっても、崩落防止用コンクリ壁であるが、ちょうど多目的広場の南側、樹齢一四〇年といわれる、約三〇メートル高のモミの木が二本生えている斜面の下辺りである。

今度は根岸ともみが案内役になって、検察から開示された証拠を検証しながら、ドモリのタツが少年らを追い駆けた通りの道順を辿ることにした。

車はトキワの駐車場に置いたまま歩いて向かった。古橋を渡って急石段を息を切らしながら上り、大門櫓の城門を潜り抜けて二の丸へ出た。大砲やらがある脇の小道から城壁の上へと出て、大人三人掛りでも抱きとめられないような二本のモミの木を見上げながら――そこからはしかし事件現場は見えなかった――光子が自慢気にいった。

「六年前のクリスマスにはね。この二本のモミの木にイルミネーションを飾り付けてね。三〇メートルの高さの、日本一高いクリスマスツリーが夜空に輝いたんだよ。友達と見に来たんだ」

確かに、日本一という認定書が案内盤に記されてある。超有名ミュージシャンの肝いりだと根岸も承知していた。

「あそこが、ほら、グローブのケイコの実家の料亭『山田屋』――」と光子が指差した。

港町商店街の中程を指しているけど、見えるわけではない。そこらご両親はどんなに誇らしく夜空に輝くツリーを見上げたことだろう。根岸ともみは今ようやくタバコを取り出して口に咥えた。ぽってりした小振りの光子の唇と違って、引き伸ばせばどこまでも伸びそうな薄い唇である。

煙を吐いて、目を冬枯れた山に向けた。暫らくボーと山々を見つめていた。左程高くもない里山である。一番高い鎮南山にしても五〇〇メートルもあるまい。根岸の国のアルプスの山々に比べれば、瘤のようなものだろうと、光子は思った。

根岸の魂が舞い戻ったようなので――根岸はタバコを靴先で踏み消した――二人はまたゆっくりと歩み始めた。そこからすぐのところに、ドモリのタツのタコ焼き屋台があつたのだ。そこにもモミの木と同じ位の太さの銀杏の太木が二本聳えていた。まだ黄色い落ち葉の絨毯に混じって、黄色い果肉が所々に散らばっている。

そこから二人はタツになりきって歩き始めた。広場では老人達のゲートボールに加えて、少年野球の少年達の嬌声もしている。野上八重子記念碑の前で年配の観光客五、六人が記念写真を撮っている。本丸に渡ると、右手に鉄門くろがねもんら櫓跡の石垣があり、それに付随した小さな公園のような広場がある。それと茶店のような建物との間に右に折れる小道があつて、少年達三人はまずそこへ逃げ込んだようである。

そこを行くと、すぐに左手に卯寅うとのいなりじんじや稻荷神社があり、そこからは例の赤鳥居の林立となり、それは狭い急坂を――滑り止め簡易舗装されている――鋭角に折れ曲がりながら卯寅うとのぐち口の踊り場まで続いた。その正面高くに卯寅口門脇櫓があり、その踊り場から一人だけ左に折れて井戸丸の方に逃げ下った。あとの二人はそのままへそこからは階段になっている――下って港町方面に逃げた。タツはそっちを追い駆けた。

階段を下り切った所で、今度は、一人は狭い路地を左に税務署の裏手の方さへ逃げ、あと一人は反対に右に折れて逃げた。股裂きになって躊躇したかどうか、しかしタツは右手に曲がった少年の方を追いかけた。

両側に民家の塀が連なる狭い路地を一〇〇メートルばかり行つた所で、少年はとある民家の敷地内に逃げ込んだ。門扉のない、広い間口の屋敷で、家の玄関から右手は庭と菜園になっていて、左は駐

車場――縦並びなら三、四台は停められそうなコンクリート舗装の屋根付き駐車スペースが城壁まで続く――になっていた。

隣の民家とは高さ九二センチの苔生したブロック塀で仕切られているへ飛び越せない高さではない。建築ブロックを積み重ねた塀で、上部が小さな屋根のような形をしている。

少年はそこに追い詰められて、開き直ったのである。一〇〇円玉五個をばら撒いた。そして懐中の小刀、長さ二〇センチ余り、刃渡り一〇センチくらいの折り畳み式ナイフ、肥後守ひごのかみという刻印のある黒っぽい小刀を構えて向かって来た。「おっちゃん、やるんな」といって。

そこで格闘になり、ナイフをもぎ取って、タツは少年を殴りつけた――というのが拘置場でのタツの言い分だった。根岸はともかく光子はそれを信じている。

それを、道を隔てた斜め向かい側の民家の老婆が、台所の窓から見かけて110番通報した。五分もかからず臼杵署からパトカーがサイレンを鳴らして駆けつけた――時には、タツオは立ったまま、少年は口から血を流して倒れていたと、調書ではそうになっていると、根岸はいった。

目撃者の老婆は「少年はナイフを持ってなかった」と証言し、駆けつけた警官も、ナイフなどはどこにもなかったというのである。

根岸と光子は、路地から事件現場を覗き込みながら、その様子を頭に思い描いた。

「少年の身体検査はしたの？」

「勿論、二人ともね」

「その通報者のおばあちゃんは？」

「このお家のおばあちゃん」と根岸が振り向いて指差した。

「今居るかなあ……」

「お話はもう聴いているけど、あとでもう一度お邪魔して聴いてみる？　それで気が済むのなら」

「うん」

再び現場の方を向いて、少年が咄嗟にナイフを処分するとしたらどうするか考えた。

考えながら光子はそれを確認するように口に出している。「まず、床の下が考えられるよね。それから……駐車場の屋根が途切れたところからあ……」駐車場の屋根は半透明のビニールタンで、城壁から三、四メートル位までしかなかった。「城壁の上までは無理だから、駐車場の屋根の上か、母屋の屋根に投げ捨てる？」

「うん」そんなことは根岸も考えたことである。警察も当然搜索した筈。

「それから……一番ありそうなのはお隣の敷地に投げ捨てた」誰もが考えたことである。「お隣の屋根って随分傷んでるじゃない。瓦は曲がりくねってるし、苔も草も生えてる」

「そうね。黒っぽいナイフなら見えにくいわね。でも警察もそれくらいはわかるから、念入りに調べてると思うけど」

「屋根を越えたってことも考えられるんじゃない？」

隣の家は平屋だった。勿論、可能だ。

「その向こうはコンクリート舗装の駐車場になってるのよ」

「何だ、それならすぐ見つかるか……」光子はくりとまた向きを変えた。

路地を隔てた向かい側の家並みを見た。投げて届かない距離ではないけど、あまり大きな動作だとタツに気付かれていた筈である。下手投げ程度の動作なら、パトカーに気を取られている隙に、ひょいと投げられる。そうなる toward 側には届くまい。

「うーん。それくらいかなあ……考えられるのは。庭木に引っ掛かっている……ってこともないか」

光子探偵は腕を組んで考え込んだ。人が変われば視点も変わるからあるいはーと期待したけど、やはりどうしようもないかと根岸はモミの木を見上げた。求刑から二割落ちが相場だから、五年と半、よくて五年の実刑は免れまい。

「これじゃあ、タツでなくても、申し開きできないよねえ……」

「取調べ現場というのは、よほどしつかりした者でも持ち堪えられないほど、厳しい所なのよ。いっさいから隔離されて、国家権力と個人が向き合うのだからね。だからアメリカなんかだと、弁護士が傍についていて、不利なことは喋らなくていいと、いえるんだけど」

「ほかに目撃者は？ この家とお隣の家にはその時誰も居なかったの？」

「運悪くね」

見たところ、家主に断って中に入れてもらうまでもなく――家主は留守のようだった。

「警察の搜索は万全だったのかなあ……」

「と思うけど」

不思議そうな顔をして根岸ともみは光子を見た。「まだ村上タツオの言い分を真に受けてるの？」と、その顔はいつていた。弁護人からは口が裂けてもいえないことだけど、犯罪者というのは自分の都合のいいようにいい繕うものであるへというか、そう思い込んでしまっている者もいる」。

それがわかっていてもなお、依頼人の最大限の利益を確保しようとするのが弁護人の務めでもある。根岸ともみは村上タツオの言い分を丸々信じているわけではない。

法廷は必ずしも真実を明らかにする場ではない、両者の言い分に合理的な線引きをする場である。真実なんてものは藪の中、当事者以外には、神にしかわからない。従って、ヘビのような頭をしたカメや、カメのような尻尾をしたヘビがうようよ存在する。中には、「――よって、おまえはヘビだ！」と宣告され、途方に暮れるカメもいる。

だけど、光子は一点の曇りもなく、芯からタツオの言い分を信じている風である。そこが根岸にはわからない。純真過ぎる。もう少女ともいい難い、二十歳前の女の子にしては。

やはり、同族のゆえだろうかと思った。部落民と差別され、虐げられて来た一族の、血の結束は固い。

熊谷という表札のある目撃者の家の呼び鈴を押してみたが、応答はなかった。留守のようだ。

なので、納得しない光子にせがまれて、警察署に歩いて向かう。

その六 白杵警察署

「あんたどう、ようそげんこつう、今頃になっち、ゆうち来るなえ」
ドンコのように色黒で大きい口をした警察官は目を剥いていった。

「抜かりあるもんかえ」

声も太いし、体もデカイ。そうやって威嚇するように目を剥くのが癖になっているのだろう、サルなら歯を剥き出すけど、歯並びは悪そうだ。

「初めからそげなもなあなかったんじゃ。ヤー公の、すもつくれん
いいごち、そういつまってる、へつろうち、おらるるかえ」

「隣^ちん家も調べた？」 光子はさらに訊いた。

「ああ、隣^ちん家も。屋根も。庭もじゃ」

「樋も？」

「トイ？ ああ、雨樋か。……雨樋もじゃ」

マツチ箱を横にしたような三階建ての警察署だった。人口四万五千余りの街にしてはこじんまりした警察署の、免許証の手続きなどをする交通係りの待合室でのこと。

かつての係官は、今は交通係の主任をしていたが、胡麻塩頭の初老の巡査部長は、うるさそうに濁声でそういった。

こいつを法廷に引っ張り出してぎゅうぎゅうに締め上げてやればいいのに、という目で見る光子をよそに、「目撃者のご老人には、少年が刃物を持っていたかどうか訊ねたのですか？ それとも向こうから？」と根岸ともみは訊いた。

「そりゃあ、あんた、こっちが訊かんで、誰が訊くんかえ」

「そうしたら何んで、答えたのかしら」

巡査部長は少し考えてからいった。「そらあんた、持ってねえもなあ、持ってねえち、いうがええ」

「あのさあ」光子が口を差し挟んだ。「もしタツがーいんね、村上タツオがいうようにだよ、少年が刃物を持ってたとしたら、訊か

れる前に――いんね、110番通報する時に、刃物を持ちち暴れよる！　とか、ケンカしよる！　ち、いうよねえ、普通は――」

「おお！　そうじゃ！　そうじゃ。ねえちゃんいいこというじゃねえか。そんな通りじゃ。緊急性をアピールする為に、きつとそういう筈じゃ。じゃけん、持ってなかったちゆうことになる」

巡査部長は勝ち誇ったように根岸弁護士を見た。口から太い歯を覗かせて。

「ということは、よう見えんかったちゆうことじゃないん。そんな時の天気はどうなん？」

「何？　天気？　天気はおまえ……曇っちよたわい。ちゆうか、黒雲が山ん方からせり出しち来ち、薄暗れえくらいじゃった。グワリグワリグワリッ！　ち、鎮南山ん上じ、ゴロンゴロン様が鳴りよったけん、雨にならにゃいいがち、思ったことじゃ」

「ああ……やっぱり」

「何がやっぱりじゃ？」

「じゃけん、見えんかった。暗くて見えんかっただけったい！」

根岸ともみはくすくす笑い、「肥後守というナイフはどういうナイフですか？　どこに行けば、手に入れられるでしょうか？」と訊いた。

「そんなもん今頃あるかいや。そら、わしらが子供ん頃んもんじゃ。男っ子ん、必須アイテムじゃった。それじ、木の枝を切ったり削けずったり、女竹を切ったり削そいだりしち、紙鉄砲こしらやら水鉄砲やらを拵こしらえたもんじゃ、鳥籠用んヒゴをこいだりしたもんじゃ。

いうにことかいち、あいつが生まれる何十年も前ん、レトロな小刀を持ち出すとは、すもつくれんやっちゃ」

「じゃけんなおさら、真実味があるんと違うん？　その少年のおじいちゃんかおばあちゃんに訊いてみたん？　不良仲間や、学校の生徒にも訊いてみたん？」

何んじゃこいつは――という顔で、巡査部長は光子を睨みつけた。しかしその為には仰ぎ見らねばならなかった。立派なガタイはして

いても、背丈は一六〇センチそこそしかなかったからだ。

根岸ともみは光子の腕を取って、巡査部長に会釈し、あわてて署を出た。

「——うふふふ、光子ったら。でも、目の付どころは間違っていないわ。自分でやってみなさい。わたしは悪いけど、一つの案件にばかり、かかりつきりというわけにはいかないのよ」

それはわかる。刑事は儲からないとママがよくこぼしていた。民事はお金にものをいわせて勝訴しようとする金持ちが多いけど、刑事事件を起こすような連中はお金に困っている者が多いから、下手すれば赤を打つこともあるし、その上弁護士を踏み倒されることもあるという。

まして、クライアントは弱小組織の天門屋一家。義理で受けたような仕事である。博多の竜子伯母ちゃんは口うるさいけど、ケチじゃない、気前がいいーけど、ない袖は振れない。

（成功報酬なんてあるのかなあ……）

「——まかしといて！」光子は元気よく胸を叩いた。

その七 二度目の事件現場訪問

二度目は日曜日にした。その方が事件現場のお宅や、お隣さんも在宅だろうから、話が聴けると思ったからである。

一人で行くつもりだったのが、余計な者がついて来た。事務員のトシちゃんである。三〇歳のトシちゃんはまだ独身で、でも少しも焦っている様子はない。せっかくのお休みの日なのに、のこのこついて来るぐらいだから、お付き合ひしている人はいないのかも光子は思う。

まだ学生気分が抜けてないようなところがあり、見た目もそう——今は グリーンのカシミアセーターにインジゴブルーの冬用ジーンズ、その上に赤い襟のブルゾンを羽織っている（色はネイビー）。舌足らずな、可愛い子ブリッコ。その甘え声を聞くと、松田聖子といっしょくたに（一緒に）絞め落としたくなる。

あまり好きではないけれど、子供の頃よくお菓子をくれたので、なつてはいた。

今回は光子の方がシックな出で立ち。何しろ「根岸ともみ法律事務所・助手」という肩書きの入った名刺を携えて、事務所を代表して事件調査に赴くのだ、国家警察を向こうに回して。

だからそれなりの衣装を調えた（というかいただき物である）。ダークグレーのパンツスーツに黒革靴姿。白いシャツの襟は出している。肩パットは入れてないのに、マイケルジャクソンのように肩が張って見える。どことなく、衣装に着られた感ありだが、タッパがあり、足が長いので、颯爽としていて、何より初々しい。それと髪はひっ詰め、後ろでバレッタで止めている。

高校卒業祝いにもらったそれらを、ようやく身に付ける時が来たのである。シャツは男物、ベルトや金色のバックルも女物とはいいいないほど太目だし、本皮の靴も先がスクエアになっていて踵は低い、二七センチサイズともなるとほとんど男物——それが内股を開

くようにして〈柔道やってるから仕方ない〉、ズボンの裾をはためかせて歩くのだから、ヤクザも真っ青。

「ねえねえ、光子ちゃんたらあ、何だか恐い筋のお兄さんみたい。

ーでも、素敵。カッコイゝ！」

東トシ子には受けたけど、母親の遼子は顔をしかめて「お義姉さんたら！」といって舌打ちした。光子はまんざらでもなかった。女子高の運動会では、学ランを着て勇壮に空手踊りをしたものだ。男物を着ると身が引き締まった。

そんな二人は、にぎやかにグローブやアミの曲を歌いながら臼杵に向かった。

途中、トシ子の実家がある佐賀関に寄ったので、随分大回りになった。けど、雄大な佐賀関精錬所の煙突や、豊予海峡を左手に眺めながらの、曲がりくねった、景色のいい海岸線を走るのは爽快な気分だった。

ひなびた漁港の風景というのは何処いづこも同じ。とある漁港の岸壁に車を停めて、小休止。海辺に佇み、思わず知れず前屈みになっていた姿勢を伸ばして、腕も広げて、潮風をいっぱい吸い込んだ。冷たい空気が口の中に舞い込む。

「関アジ・関サバっていつでもさあゝ、臼杵湾で惰眠を貪ってたぶよぶよのが、サメに追われて関まで逃げて来て網にかかった途端に、ブランド品のレッテルを貼られて、値段が何割も跳ね上がったから、いい加減だよね」

「そんなこと関でいったら、殺されちゃうわよ。伯母ちゃんにもらった弁当食べたらわかるから。海峡の急流にもまれた、肉が引き締まって、歯ごたえがあって、ほかとは全然違うんだから」

「確かに大分のお刺身は美味しいよね。東京の冷凍マグロなんか、今なら食べられないよ」

光子は幼い時分東京にも住んでいたのだ。

「光子ちゃん、幾つまで東京にいたんだっけ」

「小学一年——二年だったかな？」

「ふん」

光子は目を細め、海を見るとはなしに見て、暫らく物思いに耽った。その間上の空で、トシ子が話しかけたことには空返事をしていた。

「——もう！ 聞いているの？」

トシ子が苛声いらだてを出したので、我に返る。「——え？ 何が？」

「根岸先生と同じね。時々魂がどっかに行っちゃうんだから。——もう、いい！」

トシ子がふくれたので、何となく気まづくなって車に戻り、発進させる。

「誰かが結婚するって？ そういった？」

「誰かじゃなくて、あたしよ！」

「えっ？ トシちゃんにそんな人いたの？」

「失礼ね。いるわよ、一人やふたり」

「そうなんだ。で、いつ？」

「だから迷ってるのよ。もう三十でしょう。司法試験もあるし」

「迷うことないんじゃないの。結婚しちゃえば」

「うんもう！ 他人事だと思って。——人生が決まっちゃうのよ。」

自分が、自分だけのものじゃなくなるのよ」

「どういう意味、それ？」

「光子ちゃんはどうかの？ 彼氏いるの？」

「いない」

そこで二人はそれぞれの思いに耽った。

前に続く

事件現場には九時半に着いた。その辺りは道が狭いので、車は城址公園の――公園内に決まった駐車場はない――ードモリのタツの屋台があった辺りに停めて、歩いて来た。途中の急坂・急階段ではハイヒールのトシ子が何度も転びそうになり――（だいたいジーンズにハイヒールなんておかしいわよ）と光子は思う――黄色い声を上げて、光子に取り縋った。一ミリでも背を高く見せたいというのが低い者の心理。光子にはわからない悩みだった。

事件現場となった吉岡邸では、日曜日とあって初老のご夫婦が庭先の菜園で、何やら土いじりをしていた。大根や白菜などが植わっている。茄子の茎は秋茄子の収穫を終えて剪定されていた。家の前の路地では小さい子供らがボール遊びをしている。

「あのう、すみません」と光子がブロック塀の所から家主夫婦に声をかけた。

メガネをかけた亭主が怪訝な顔を上げた。

「何んですな？」といって、首に掛けたタオルで口の辺りを拭いながらやって来た。

塀はあっても門扉がない開放的な玄関前の庭の方に向かったので、光子らも回り込む。

「こういう者です。少しお話を伺いたいのですが……」初々しい手つきで光子が名刺を差し出した。

当家の主、吉岡貞三は名刺と二人を等分に見てから、「ああ、あん時んことですか。まだ何か？」と怪訝な顔をした。

「ええ、そうです。あの事件のことを」

「あん時きや家内も私も留守しちよりましたな。何も話すことはないけどな」

「翌日に警察が小刀を捜索しに来たと思うんですけど、その時はどなたか立ち会われたのでしょうか？」

「ええ、ええ、それは私が立会いましたよ」

「その時の様子はどうでした？」トシ子がメモ帳を取り出してメモを取る構えを見せた。「何人位の捜査員が来たんでしょうか？」

「四人^{よったり}じゃったね。青い服着たのが三人、私服が一人じゃったかな？」

「四人？ たったの四人ですかあ」と、トシ子が素っ頓狂な声を上げた。

「で、どういった所を？」

「まあ、その辺をつくじり回しよったですがねえ……」

「床の下なんかも？」

「ええ、長い懐中電灯で覗き込みよったですよ」。

「屋根へは上がって？」

「いやいや、脚立でね。駐車場ん屋根は脚立を組んでね。母屋ん屋根は脚立を伸ばして。二階ん屋根には及ばなかったですけど、ほれ、あん梯子を貸してやったんですよ」駐車場の側面に長い木製の梯子が掛けられている。「屋根に上がるちゅうんで、私が断った。雨漏りん原因になるけんちゅうて」

「それじゃあ、屋根には上がらなかったんですか……！。雨樋なんかはどうでした？」

「覗きよったみたいですよ」

光子は「ちよつといいですか」といって駐車場の方へ入り込んだ。

吉岡貞三もついて来て、「ヤクザのゆうことを、あんた方、信じちよるですか？」という。

「依頼人はヤクザじゃありません。テキヤです。依頼人がいうには、少年がナイフを向けて来たそうですから、身を守る為にしかたなく応じただけで……わたしたちは、そこを、とことん調べて、はつきりさせたいと思うのです」

光子は茶色い雨樋を点検しながらいう。縦樋は上から覗き込むよりほかない。覗いたところで途中に引っ掛かっていた場合、見えるかどうか。樋を外して調べたかどうか主人に聞いた。「これ、外し

て調べましたか？」

「いいやあ、上から覗いただけですよ。失礼じゃけど、あんた、お幾つかね？」

「一九です」

「ふゝむ。うちの聡子より二つも下か……、しっかりしておいでのようにゃな。うん。よし！ もう一度心おきなく調べてみるかね。大工か左官なら、屋根に上がってもらっても構わんよ」

「本当ですか！」

「いやなに、私もね、ケンカの両者とも、一面識あるんじゃわね。タコ焼き屋さんは、孫に買うてやった時にね。見かけは確かに好青年に見えた。けれど、ああいうのが実は怖いんじゃと、思ったりしたけどな。……そうかえ。」

——でん、高校生の方は、コンビニや駅に屯するしまたつかん悪じゃ。公園の広場ん中をバイクで走り回るは、女ん子には片っ端から声をかけるは。この狭まい路地も、茶や黄色の髪をしたのが、何台も連ねち、ギャンギャンいわせち通りよる。おちおち、孫らを遊ばせられんもせんほどじゃった」

その孫と思しき男児と女兒をまわり付かせて、奥方も傍に来ていた。

「そう願えれば助かります。それじゃあ、日を改めて大工さんを連れて来ますんで、その時は、どうかよろしくお願いします」と光子は頭を下げた。

「見よ。いちごんもねえじゃねえか。まだ一九と」と吉岡貞三が奥方にいう。「聡子もこげえあつちくるればいいんじゃけんど」

奥方は小柄で上品な顔をしていた。目を細めて光子を見た。光子は照れて、「それじゃあ」といって立ち去ろうとした。

そこへ、隣の家の勝手口が開いて、七十年配の老婆が顔を出した。「おう、ミサちゃん。ちょうどよかった。ちよつと来ない」吉岡貞三が声をかけて手招きした。「来ないちゃ」

「何んな？ 何事な？」と、つくも髪の老婆は手に三毛猫をぶら下

げて塀の方にやって来た。猫はまだ大人になりきれてないような子猫で、後首を掴まれて心ならずもおとなしくぶら下がっている。「こん奴がどっかこっかから入り込んで来ち、悪さをするんじゃ」

老婆は猫を庭に放り投げた。猫はネズミ花火のように走り去った。「ミサちゃん、ほれ、去年のヤクザ者のケンカーあ、いや、タコ焼き屋さんと、高校生の悪ガキとの」

「おうおう、あれか、あれがどげえかしたかや？」

「あん時んこつう今、弁護士事務所ん氏が調べに来ちよるんじゃ。警察はあんたんとも調べたなえ」

「ああ、小刀じやろう。ヤー公のいうこっちゃけど、一応、搜索させちくれんね、ちゆうて、庭やら屋根やら見回しよった」

「もう一回、調べさせて欲しいちゆうんじゃけんど、あんたん方、どげえかええ？」

老婆は光子らを皺んだ顔で見た。光子は名刺を出して渡した。「あとでお宅にもお伺いしようと思ってました」

「こん、ねえちゃん達がかやー？」

「いんね。大工を連れ来るちゆうけん、屋根を傷める心配はねえんじゃ」

老婆の家は平屋だった。江戸時代から建っていたのではないかと思われるくらい古色蒼然としていた。屋根瓦は不揃いに歪んでいた、はみ出していたりして、所々に草が生えている。

「そら構わんが」と老婆はいった。

「有り難うございます」といって光子は頭を下げた。

「おい」と吉岡貞三は奥方に向かって声をかけた。「お케이ちゃんを呼んじ来んか。今おるじゃろう」

「おるけど、何しな？」

「いいけん、呼んで来い！」

上品な顔立ちの奥方は、いわれて路地の方に向かった。孫二人も路地で遊ぶ子供らの所へ行った。

奥方に呼ばれて来たのは、目撃者の熊谷ケイという、やはり七十

年配のメガネをかけた老婆だった。痩せて腰が曲がっていて、意地が悪そうな顔をしていた。トリコットのババシャツの上に綿入りの半纏はんてんを着ている。

「あんたどう、何事な？」

熊谷ケイはみんなを見回し、光子とトシ子に視線を戻して見つめた。

「ケイちゃん。おまえが証言したタコ焼き屋の兄ちゃんがな、論告求刑じゃ、懲役七年を求刑されたんちよ」吉岡貞三がいった。「気の毒な」

「ヤクザじゃけんしかたあるめえよ。代金を踏み倒しち逃げたガキんちよも悪いが」

「ところがそうじゃねえちゅう話じゃ。実際そうは見えんかった。寅さんもテキヤじゃけんど、ヤクザじゃあるめえ。わしらは考え違いしちよったんかも知れん。」

おまえ、あそこにおるメグミが、手に何を持ちちよるか、わかるか？」吉岡貞三は、路地で遊ぶ子供らの方を向いていった。

みんながそっちを向く。青色のボールを小脇にした小学三、四年生位の男の子と、一、二年生位の女の子が二人、それに三輪車に乗った男児と、その傍に女兒が立っていた。

メグミというのはその女兒のこと。三つ位か。さっきまで吉岡の奥方にまとわりついていた小さい方の孫娘。ベージュのセーターの袖口から覗いた手には、小さな裸の人形が握られている。

「何んちや、メグミが？ ……ありや何んかい？」熊谷ケイはメガネを持ち上げて目を細め、裸眼で見つめて、「何も持ちちよらせんわい。ありや指じゃ」といった。

従姉弟の熊谷ケイが白内障の手術を受けたのは何十年前も前のことで、それから徐々に視力が落ちていることを吉岡貞三は知っていた。光子とトシ子は顔を見合わせた。一〇メートルと離れてないというのに、髪も肌色の人形とはいえ、開いた口が塞がらなかった。

前に続く

何もかもが一時に片付いた。

おかげで昼前には城址公園東の突端、亀首櫓跡の所で、藤棚の下
の石のベンチに腰掛けて弁当を開くことが出来た。臼杵湾を眺めな
がらの、爽快な気分で弁当を食べる。

眼下の造船所ではまだ巨大クレーンが二基、小さいのが数基、警
報音を発しながらせわしなく腕を動かしている。一万トン級の船が
二艘並んで建造中であつた。

フェリー乗り場にはフェリーが接岸していた。広い岸壁には海洋
科学高校の練習船と漁船がちらほら。

海は二人の心持を反映しているかのように、明るい色にキラキラ
輝いている。

食堂・仕出屋・弁当屋を営むトシ子の伯母さんにもらつた「関サ
バどん弁当」は美味しかった。「リユウキュウ」という、新鮮なサ
バの切り身を、ゴマとネギとニンニクが入った醤油汁に浸しておい
たものを、ご飯の上にのせてある。惣菜もサバのテンプラに煮物な
どサバ尽くし。名物烏天も加えた豪勢な弁当であつた。

「美味しいには美味しいけど、もう誰とも話しできないじゃん」と
光子がいったほど、ニンニクが利いていた。

「ニンニクの焼いたの、食べたことある？」トシ子が訊いた。
「ない」

「これが美味しいんだよう。ほくほくして。でも、吐く息は勘弁し
て欲しいーって感じだけだね。百年の恋も冷めちゃう」

光子は焦げ目のある炒ったギンナンは大好きだった。ギンナンの
果肉も耐えられない臭いがする。植物もそれなりに子孫繁栄の為の
防御をしているのだろう。

というか、そういう防衛をしているからこそ生き残り、種の保存
がなされていると、ダーウィンならいうだろう。今ある生物はみな、

勝ち組なのだへくらの知識は筋肉少女の光子にもあった、授業中はいつも居眠っていたけど」。

思いはドモリのタツに向かった。タツがウソをついているとは思えない。あのウサギのような目は――少なくとも自分にはウソをいわないという確信があった。

小刀が見つかればよいが、でなければ、タツは青春の一番いい時期を、刑務所で過ごすことになる。そんなの可哀想だ。

「ねえ、ねえ、光子ちゃんたらあ」

「――何？」

「お好み焼き食べたばかりーと思える人とキスしたことあるのよね。無神経だと思わない？　ひと月くらい、気持ち悪さが消えなかった。勿論その人とはそれっきりよ。光子ちゃんキスしたことある？」

「ない」

（彼氏もいないのにどうやってキスするのよ）と光子は心の内で毒づいた。

その八 小刀搜索

国家警察は、ふんだんな予算と人海戦術で大搜索をして証拠物を押収するけど、弁護士はクライアントの財力に見合った搜索で、新証拠を見つけ出さなければならない。

初めからフェアではないのである。いったん容疑をかけられたら最後、99・98パーセントの有罪率のベルトコンベアーに乗せられて、手際よく塀の中まで運ばれる。その手際よさで、警察官も検察官も裁判官も評価されるのだ。

光子の搜索要請に対して、ボス弁は腕組をして歩き回っていたが、ふいに受話器を取り、ダイヤルを回した。先方に事の仔細を告げ、大工か左官を雇うことになるけど、どうかと訊いた。

博多の竜子伯母の声が受話器から漏れ聞こえ、ボス弁は黙って聞いていたが、「わかりました」といって受話器を置いた。

明けて月曜日の朝早くに、二人の男が薄汚れた白い軽トラでやって来て、朝靄が這う上野ヶ丘の森の外れにある榊原家の門を叩いた。一人は烏打帽を被った中肉の背の低い男、もう一人は頭の薄い、中背で痩せた男だった。いずれも六十年配と見え、ともにグレーの作業服を着ていた。

エラの張った烏打帽が通称「大工のトメ」、その名の通り大工で、薄い頭とヤギ髭を生やしたヘチマ顔が「左官の太一」であった。

博多御所が差し向けた二人を出迎えたのは、彼らの大先輩であり、伯父であり、養父でもある赤峰松吉。「大工のトメ」こと赤峰留^{とまひる}は松吉の甥子であり、「左官の太一」こと、赤峰太一は、先代親分の城島竜太郎から預けられた養子であった。この時松吉には志津というれっきとした女房がいたので、それは仮初めの固めの盃ではなく、正式な養子縁組であった。太一は幼少のみぎり、相次いで両親を流行病で亡くしているのである。村上カメの遠縁にもあたるから、タ

ツオとも血の繋がりがあある。

早速、松吉は遼子に二人を紹介した。遼子は、また変なのが增えたーという顔をした。そこへ、光子が現れて、母親に事情を説明したので、ひとまず納得はしたようだった。

ともかく小刀の搜索は、大工のトメと左官の太一と光子、それに赤峰松吉を加えて、総勢四名で行われることになった。員数だけでいえば臼杵署員と同数であるが、意気込みはまるで違う。

その日の午前九時から、吉岡夫婦と、田中ミサ立会いのもとで、搜索を開始した。寒冷前線の狭間だとかで、風があり、行き交う雲間から薄日が射す寒い日だった。

一〇時になると、目撃者の熊谷ケイが、お茶とお茶菓子を持って様子見に現れた。

一五分間の休憩を挟んで行われた吉岡家の搜索はしかし空振りだった。午前中に片付いた。腕組みをして見守る吉岡貞三を始めとする一同に、失望の色が漂った。熊谷ケイはホッとしていた。

お昼を食べて行けというのを遠慮してーどうも吉岡貞三は光子に深い思い入れがあるようだ、アメリカに留学しているという娘に寄せる思いを、光子に向けているのだろうー気兼ねのないレストランにて昼食。例の臼杵トキワ三階のレストラン。

異様な雰囲気をした老人達に囲まれた若い女を、怪訝な目でウエイトレスらは見た。

しかし光子には何の違和感もない、初対面でも馴染安い老人達だった。それぞれの体に掘り込まれた青い絵を見せられても、きつと驚きはしないだろうーもっとも、もはや色は薄れ、模様は皺んで、大蛇はしょぼくれたヘビのようになっていくけど。

光子には、川筋者と蔑まれ、部落民と差別されて、迫害されて来た一族の血が流れている。祖父――城島竜太郎は一族の柱であり、父――竜二は一族の誉れだった。城島の家の子供は、男は若と呼ばれ、娘は姫と呼ばれて、かしずかれて来た。

ゆえに、「一族の弱か者んをば、守るとぞ」と、城島の血を引く者はその宿命を背負っている。

そういうことを、幼い時分から伯母の竜子に、懇々と言含められて育った光子であった。その言霊は光子の血となって流れている。

「いやあ、ヒメも大きく立派になられたのう」

「ほんなごつう、若を見るようじゃ」

孫を見るように目を細めて、トメと太一がいった。いうまでもなく、この場合の若とは、兄・竜平ではなく、父・竜二のことである。「ふおっ、ふおふおっ！ それだけ、おまえらの先が短こうなったちゅうことじゃ」と、松吉がビールの泡がついた顔でいう。

「オジキにいわれたかないわい」とトメがグラスを振っていえば、「オヤジと違ごうて、わしらにゃまだ二、三十年はゆうに先があるばってん、これからが楽しみたい」といって太一がビールを呷る。

「バカちゃん！ わしもまんた、それぐらいは生きるわい」

「――もう！ あんたらそんなに飲んだら、屋根に上がれんようになるよ」光子がたしなめた。

老人達はもう赤い顔をしている。今にも、――「月がく出た出た――月がく出た」とやりかねない手付きだ。

午後からは隣家の田中ミサの家と庭の搜索。

これにはミサは勿論、庭いじりをしながらの吉岡夫婦に、近所の年寄り子供も加わって、ギャラリーは賑やかだった。

ミサは後家の独り暮らしで、築六〇年という家は老朽化しており、方々で雨漏りがするというだけあって、屋根瓦の傷みは酷かった。為に、急遽左官の太一は漆喰を練り、補修しながらの搜索となった。樋もついでに新しいのと取り替えた。光子と松吉は排水溝や家の周り、植え込みの中などを搜索した。

午後三時には今度は吉岡婦人がお茶とお茶菓子を振舞ってくれたので、一五分間休憩した。

「何せ一年も前のことですからなあ……」と、吉岡貞三が見つから

なかった時のショックを和らげるようにいった。

あと残るは反対側、向こう側の屋根と、屋敷内だった。それより向こうはブロック塀を隔てて駐車場になっている。大方そこいらまでが、下手投げで飛ぶ範囲だった。上手投げでもそう大差はなかるうけど、そういう動作ならタツが気付く筈だった。

光子はまだ諦めてはいなかった。今までの所で見落とした部分はなかったか、お茶をいただきながら見回した。鼻の頭と、産毛が生えている人中周辺に汗の玉を浮かべている。顔は火照って赤らんでいた。

ぽってりしたわりにはきゅっと締まった形のよい唇、テキヤの老人達は、そこに在りし日の、四のヒメの面影を見出していた。こんなに人を集めて、偏見も差別もなく、お茶菓子まで振舞ってくれる、持って生まれたカリスマ性があるのだ。このヒメはきゅと一族の柱になってくれるに違いない。

「さあ、やるばい」と太一が立ち、「おうさ」とトメも立った。

しかし、八時間かけた搜索は徒労に終わった。結局、小刀は発見できなかったのだ。夕闇が迫り、見物人達は去って行った。

光子らは後片付けをして、吉岡夫妻と田中ミサに礼を述べて、気の毒そうな顔をした彼らに見送られて現場をあとにした。熊谷ケイは用事があるといって四時前には姿を消していた。

家に帰り着いてからも光子はぼんやりしていた。

「残念だったわね。一年も前のことだから、誰かに拾われたのかも知れないね」

遼子が慰めるようにいった。「これで納得？」といわれた方が正直でいい、どうせ信じちゃいないんだからと、光子は返事もしなかった。

夕食も早々に二階に駆け上がる。

蛍光灯も点けずに、ベットにひっくり返って、そのまま爆睡した。遼子に揺り起こされるまで。

「――いけない! もう朝?」

「バカね。まだ夜の10時前よ。電話」

「電話?」光子はケータイを捜した。「ケータイどこだっけ?」

「そこに放り投げてるじゃない」ケータイは枕とベットヘッドの間に挟まっている。「家の電話よ」

「家の電話? 誰から?」

「熊谷ケイっていう、おばあちゃん声だけど」

「ああ、そう。それなら知ってる」

光子はドタドタと駆け下りた。「ちょっと階段壊さないでよ」といって遼子も続く。

電話機は居間の窓側にある。息を弾ませて受話器を掴み取る。

「お待たせしました。わたしです。根岸法律事務所の榊原光子です」

「あんたな、熊谷じゃけど……」

「ああ、おばあちゃん。どうか、しましたか?」

「いんね、小刀のことじゃけどな」

「ええ、残念ながら見つかりませんでした。ご馳走になったのに、お礼もいわないで」

「いんね、それがな、そんなことじ、わし、ヒラソウズン兄弟氏ん孫にたんね〈訊く〉に行っちよったんじゃ。あん、ガキンちよと同じ学校に通いよる子が、マサルいうんじゃけど、何か知らあせんか思うてな」

「すみません、そんなことまで……」

「それがあんた! あんガキが肥後守を持ちちよるんを見たゆうんよ。たまがった(驚いた)がええ」

「えー! 本当ですか?」

「ああ。それじ、それを見せびらかしち、下級生やら同級生やらを脅しち、小遣い銭を巻き上げよったらしい」

「わあ! ホントに?」

「何? 何て?」遼子が耳を寄せて来た。

「わかりました! それじゃあ、とにかく、明日また伺いますんで、

その時に詳しいことを教えてください」

丁重にお礼をいって光子は受話器を置いた。

「だからいったでしょ！ ママなんか、信じてなかったんだから！」

「小刀が見つかったの？」

「ううん、相手の高校生が、肥後守を持ってるところを見た子が現れたんよ」

「そう」と遼子は意外にも冷静だった。

「何よ、どうして喜ばないの？」光子は不満というより、怒りに近い感情で母を見た。

「そういうのを、伝聞証拠といってね、残念だけど、証拠能力はなのよ。『伝聞証拠排除の原則』ってのがあって」と、水を注すようにいった。

文字通り光子は水を注されて喜色を失った。

「でも勿論、その子が法廷に出て、直接裁判官の前でそう証言してくれば、それはもう裁判官の心証をよくすることは確かだわ」遼子はとりなすようにいった。「根岸先生に電話してみなさい」

だがもう光子は焼いた餅のようにふくれ上がっていた。「知らない」といって、二階に駆け上がった。

そして、自分の部屋からケータイで根岸ともみに電話した。

けど、例の音声素っ気なく繋がらないことを告げた。

翌日、八時に出勤、東トシ子にへトシ子は西中島の大分川土手沿いのアパートからチャリで通って来る、昔、根岸ともみが住んでいたアパートだ。七時半には来ていて掃除を始めている、訊いた。

「先生と連絡が取れないんだけど、どうしたのかなあ？」

トシ子は机を拭きながら、「そっお。じゃあ、また始まったんだ」という。

「何が始まったのよ？」

「月のもの」

「月のものーって？」

「それが始まるとね、四、五日はエスケープして、居所が掴めなくなるんだよう」

「ふ〜ん」光子は生理かと思った。

そういえば以前にもそういうことが何度かあったなと光子は思い当たった。長い時は一週間も一〇日でもある。その時は出張だろうと思っていた。別人のようになって姿を見せることもあった。

「きつと、何ともいえない香水の甘い匂いをさせて帰って来るわよう。オスカルモードもいいけど、オハラモードも素敵、憧れちゃう」

トシ子は宝塚ファンのように、指を組み合わせた手を胸に当て、うつとりした顔をした。実際、トシ子は筋金入りのツカファンであった。イイチコ・グランシアタで公演があった時などは、まだ幼い光子を連れて、いの一番に駆けつけたものである。

「オスカル」というのは、池田理代子の漫画『ベルサイユの薔薇』の主人公で、男の子のように育てられた男装の麗人である。その人氣漫画を舞台化した宝塚の『ベルバラ』は、一大ブームを巻き起こした。「オハラ」は勿論『風と共に去りぬ』のスカーレット・オハラ。これも宝塚劇団で公演されて人氣を博した。

その主人公になぞらえてのトシ子の表現であるが、云い得て妙であった。片や男装の麗人であり、もう一方は気性の激しい南部女で、やはり男役のトップスターが演じた。実際そのように、根岸ともみは、ガラッと人が変わったようになるのだ。

「ああ……あたしも、あたしも変身して、誰も知らない、どっかで羽を、羽を思いつきり、伸ばしたいなあ」と、東トシ子はお祈りポーズで、夢見るように虚空を見つめて頭を振る。

（アホか!）と思っていると、「——ねえねえ、光子ちゃん、そう思わない?」とキラキラした目という。

「思わない」と光子は井戸の水をかけるようにいって「——それじゃあ、先生がお帰りになるまで、どうすればいいのよ。勝手に思うまま仕事していいの?」と訊いた。

「勿論、その間のボスはあたし。決済はあたしに仰ぎなさい!」ト

シ子は急に立ち上がり、真顔になって、両手を腰に当て、胸を反らした。

光子は吹き出しそうになった。「んじゃあ、チーボス。少年が肥後守を持っているところを見たという者が現れたんだけど、どうします？」

「えっ？ ホントに？ 誰なの、それ？」

「同じ高校の生徒。目撃者のおばあちゃんが見つけて来てくれたの。責任を感じたんだね」

「ふーん。そうなの。……光子ちゃんて、何だか不思議。徳人なのかなあ……。普通そんなことまでしてくれないよう。慣れ親しくもない者にお昼食べてけともいわないし、お茶やお茶菓子まで。あんなボロボロの屋根にも上がらせてもらえたし……」

「あの辺の人は人情が厚いんだよ」

「それだけとも思えないな。警察でさえ屋根には上がらせてもらえなかったんだから。——それで、今日にもその証言者に会うつもり？」

「そ。よかったら、今から電話しようかと思って」

「うーん。でも相手は未成年だからね。まず親の了解を取らないと。学校は卒業しちゃってるの？」

「ううん。今三年生」

ケンカ相手の少年らはもう卒業していた。ということは一学年下ということになる。

「そっかあ。法廷で証言してくれるといいんだけど……」

「証言してもらっても、決め手にはならないって、ホント？」

「そう。物証がないとね。だって、頼めば偽証だってできるでしょう。偽証かどうかなんて判断は難しいし。でも何もないよりはね。最終弁論が迫ってるしい」

光子は熊谷ケイにケータイ電話で、電話した。ケイはそぐに出た。「あ、おばあちゃん。根岸法律事務所の榊原です。先程はどうも。これからお伺いしてもいいですかねえ。一時間くらいで行けますけ

ど。……はい。はい、わかりました」カチャリとケータイを閉じて、光子はいった。「待ってるから、おいでって」

「そう。じゃあそうしなさい。気をつけてね」

「はい。チーボス！」

そこへ、事務員の遼子が出勤して来た。遼子は八時半出勤である。勿論自家用アルトで。光子は朝は足腰を鍛える為に、チャリで二十分かけて通っているへというか車を持たない。

母娘はすれ違い様に、ちらりと目を合わせたけど、言葉を交わすことはなかった。

前に続く

熊谷ケイの計らいと取り成しで、親の了解を得て、高校の休み時間に、上田正也という高校生に会うことが出来た。

高校は三重町（現大野市）にあった。そこまで熊谷ケイを乗せて三〇分かけて行った。

昼休み中の一〇分間程度の面会だったけど、小刀の特徴――握りの部分に刃が収まる折り畳み式で、刃元に大きな刃こぼれがあったことなどを話してくれた。坊ちゃん刈りの気弱そうな上田正也は、ほかにも何人も見ている筈だともいった。

しかし、裁判で証言するとなると――親にそう言い含められていたのかどうか――仕返しを恐れて尻込みをした。

連中は高校を卒業してからも、OB風を吹かせてちよくちよく学校にバイクを連ねてやって来るし、白杵や津久見に住んでいて、建設作業員やトビなどをしながら働いているという。

責任は感じているようだった。ほかの子らもきつとそうだろう。法廷で証言するのではなく、裁判官が個室で尋問するのだといっても、逃げるように去って行く上田正也を、黙って見送るしかなかった。

光子は熊谷ケイを家まで送り届け、丁重に礼をいつてから、相手の少年らの家族に直接ぶつかってみることにした。

その日のうちに、直接のケンカ相手の少年「板井健吾」の家をまず最初に訪れた。民事の示談は済んでいた。軽度の傷害だったから、告訴しないということで事は収まったと思いきや、それでは警察の方が納得しなかった。

母親とへ彼は片親でほかに兄弟もいなかった。祖父とが居て、この母、この祖父にしてこの子あり、と思わせる態度で、いきなり暴言を吐いた。

スズメの巣のような赤髪をした母親は「示談が済んだけんち、ま

た何か、因縁をつけに来たんか！」と喚き、祖父に至っては、「孫に妙ない掛かりをつけると、許さんぞ！」と、袷纏はんでんの袖から太い腕をまくり出して見せた。肘の下まで、薄青い絵が描いてある。歳は幾つか知らないが、老人にしては頑健な体つきをしていた。顔も潮焼けか焼酎焼けかした厳つい顔である。

光子は知るよしもなかったが、この家は津久見で名うての鼻つまみ者一家。家業は土建業で――といっても民間からは相手にされず、もっぱら小規模な公共工事――水道局の水道工事や教育委員会が発する学校関係の営繕工事など――が主体、「板井土建」が入札に参加すると、ほかはみな引いてしまうので、わが者顔でのさばっていた。

さりとて市当局も指名業者から外すこともできず「技術力がないので等級は低いから、大きい工事からは排除できても」、何かあるとすぐに怒鳴り込んで来る厄介な、どこにでもいる始末が悪い、担当泣かせの業者であった。

社長をしていた健吾の父親・大吾は四年前に病死、再び創業者の坪根へ八十二歳が現役復帰していたのである。

近所の住民や関係者は、冗談ではなく、この一家が死に絶えるのを願っていた。知らないで隣の土地を買って家を建てた者がいて、一年と経たずにその家を安く叩き売って越して行った者もいる。それを買って次に入居した者も、色んな迷惑行為にいたたまれず出て行って、現在その家は新築の空家となっているへばかりか、敷地の一部は板井土建の資材置き場にされていた。

地の者は家屋敷を抱えて逃げ出すわけにもいかず、ひたすら我慢して坪根が死ぬのを待っているのだが、その願いも空しく、中学生になったあたりから、孫の健吾が坪根のあとを継ぐように、傍若無人に振舞うようになっていた。

畢竟、取り付く島もなく光子は追い払われたのである。

あとの二人の少年の家は留守だった。世界の外といわれる山の中、西河野の「足立洋介」の家は、夫婦共稼ぎのサラリーマン家庭で、

両方ともいなかった。泊ヶ内の「南幸太郎」の家には、夜間訪ねたけど、呆けた婆さんが一人留守番をしていて、「へえ、ただ今漁に出ております」といった。

日を改めて何度も出直し、どうにか会うことができたものの、だけどいづれも不良の息子に手を焼いてる風で、厄介なことには係わりあいたくないのか、やはり取り付く島はなかった。

最後にどうにか会うことができた南幸太郎の家族もそうだった。漁業組合で訊いて、ようやく漁から帰還したところを掴まえて、父親に訊くも、「肥後守か、肥後守の小刀なら、ジイやんの代の遊び道具じゃ。うちんジイはどうに死んじよる。ほかん氏に訊いてみない」と、すげなく邪魔者扱いされた。母親は顔を振るだけ。口が不自由のようだった。

二度に渡って白杵から海岸線をくねくね半島のどん詰まりまでやって来たけど、空しく引き上げるしかなかった。

そればかりか、帰る途中の坂の上で、くだんの三人組の不良少年らの待ち伏せにあうという、落ちまで付いた。

すぐ傍に白波を立てた津久見島を望める絶壁の上に車を停めると、帯電した雷雲のようにフラストレーションを極限まで溜めた光子は、道路を塞ぐようにバイクのクツワを並べた三人組の方へ、自らゆっくりと歩いて向かった。

その九 初の勲章

板井健吾は細身の男だった。背も光子よりずっと低い。一六五センチもあるまい。スズメの巢のような茶髪の場合が母親にそっくりヘクセ毛なのだろう、顔の造りもよく似ていて、名乗らずともすぐにわかった。顔はしかし今流行りのイケ面だった。レーザーのよいうなツナギを着て、ホンダのスクーターに跨ってニヤニヤしている。両側の足立洋介と南幸太郎はデブとノッポだった。足立はカーキ色の作業服に黄色いヘルメット姿で、巨体に似合わずスズキのチョイノリに被さるようにしてニヤついており、黒い革ジャンに黒革ズボン、黒革ブーツと黒ずくめの南は、カワサキの125ccから長い足を伸ばしていた。

板井健吾と南幸太郎は、藍色の丸いヘルメットは後ろにまわして、自慢の茶髪を海風になぶらせて、近づいて来る女にフェロモンを発していた。

族？――にしては、何ともお粗末なバイクではないか。そんなチンケなバイクを連ねて街中・狭い路地をギャンギャン練り歩く？

――アホか！

と独りごちながら光子は、同い年の少年らの前に、堂々たる立ち姿で立った。押しても引いてもびくともしないように、肩幅より少し足を開いて、二七センチの靴でしっかり大地を掴み、重心を地球の中心に据えている。

そして板井健吾を女豹のような目で睨み付けた。

――いいか光子。見切り千両ぞ。位取りで負けたら、犬のように尻尾を巻け。勝ったら器量で押さえ込め。無用な争いはご法度、ご法度。

博多の竜子伯母の言い草だ。

(――何なんだ？ こいつは)

板井健吾はニヤついた顔をヤンキー顔に変じて、女相手にマジで

メンチを切った。

そして、「おまえか！ 小刀が、どうたらこうたらいつて回りよるんは」と巻き舌で体を揺すりながらいう。

「あんたが、板井健吾？」

「そうじゃあ。それがどうした」

「あんたらのおかげで、タコ焼き代金くらいで、村上タツオは懲役七年の実刑を受けるかも知れん。——それでいいん？」

「自業自得じゃ」

「なら、何の真似？ 滅多に車が通らないからって、天下の公道。邪魔だから、どいて！」

そういつて光子は踵を返した。

「待て！」

三人はバイクを降りて、バタバタ雁首を揃えた。ニヤつきながら、三人とも、松の針葉を掲げて見せた。

「さつき、クジ引きをしてな。ご覧の通り、足立の奴が一番クジを引いた。おまえ、なかなかハクイ女だな」といつて板井健吾は、一番長い針葉を持って得意然としている、太った作業服男を顎で示した。「こいつ、一週間も十日も風呂に入らん汚ねえやつちゃで。おまえ、嫌ならパスしてもいいんだぜ」

「どういう意味？」

「へへへ……」黒焦げのサンマのような南幸太郎が、スマートな姿態をアピールするようにシナを作って、「なに、これからあんたをマワシにかけるちゅうこっちゃ。俺は毎日、朝シャンに夕風呂は欠かしたことはないでえ」

「そんなし、インキンタムシ持ち」

足立が茶化して、三人とも下品に笑った。掘り切りの上の小道に引っぱり込んでーという算段はできていたのだ。そうやって何人の女を毒牙にかけたことか。素性を知って誰も告訴しないのをよいことに。

光子はもう我慢ならなかった。

「あんたら」蔑むように三人を睨みつけて、「三人ともお断りだわ。ほかを当たってくんない。あたし、面食いな。雑魚を相手にする気ないから」

「何っ！ こいつー」プライドを傷付けられた板井健吾が怒り狂った。「足立！ やっちまえ！」

足立洋介がツカヅカやって来て、光子の胸倉を掴むーか掴まないうちに、一〇〇キロを超す巨体が宙に跳ね、裏返しになって、砂利で固められた地面に叩き付けられた。

あっという間の背負い投げだった。手を離していたら頭を打って、大怪我をしていただろう。だけど、尻と腰は強か打ったので、転んだ馬のように立ち上がろうとするも、願念叶わず、もがいた。

その様子を呆氣にとられて見ていた二人は、光子を驚きの目で見返した。

それでも男のメンツがあるので、ノッポのーといっても一七八センチある光子と同じ位の背丈にして痩せっぽちの、南幸太郎が素手で向かって来た。

無暗にパンチを繰り出したが、紙一重でかわされ、右ヒジを掴まえられたのが運の尽き、すぐに左肩を掴まれて体勢を崩され、大外狩りで投げ飛ばされた。

もう見栄も外聞もない、非力な板井健吾は折り畳み式ナイフを取り出した。残念ながら肥後守ではない。南も素手では適わんとばかりに、バイクに仕込んであった警棒のようなものを、四、五十センチくらいに引き伸ばして向かって来た。

それに、遅ればせながら足立洋平も立ち上がり、ヘルメットをアゴヒモで振りまわしながら戦列に復帰した。

こうなると多勢に無勢、素手の光子に勝ち目はない。警棒で叩かれ、ヘルメットを打ちつけられて、ナイフでも腕に二、三箇所防御傷を負い、腿にも一箇所、深い刺し傷を負って遂に片膝について動けなくなった。

あとはもう頭を防御するのが精一杯、殴る蹴るの暴行に任せるし

か手はなく、ボコボコにされたのだった。

ようやく通りかかった車に助けられて、臼杵市街の病院まで運ばれて手当てを受けた。それほどの深手を負っているながら――刺し傷は深さ三センチにも及んでいた――光子はけろりとしていた。診断書は書いて欲しいけど、警察沙汰にするつもりはないというので、「これはもう被害届云々のレベルじゃない。傷害事件だ」と医者は呆れていた。

しかし向こうも骨折その他の痛手を負っている筈、ケンカ両成敗だし、面倒臭いからといって、医者には納得してもらった。医者が大袈裟にいうほどには痛みは感じず、痛みに鈍感な体質であることを、この時初めて光子は知った。英雄気分の方が勝っていたのである、一つ修羅場を潜ったことへの。

そして、やるからには情け容赦なくやらなければ、こういうことになるのだと学習した。下手すれば命取りになるのだという教訓を得た。最初の一撃で再起不能にしておくべし。

以前正月によく博多の祖母の家で顔を合わせた、木之元というテキヤの親分は、右手の小指から中指までの三本がなかった。それと左手の小指も。第二間接から先が綺麗にぶつ切りになっていて、それぞれそこに金銀の指輪を嵌めてあった。

痛くないのかなあと思いながら恐々覗き見たものだけど、痛覚に鈍い者が実際いるんだなあと、実感できた。祖父も体中傷痕だらけだったというし、松つあんは片腕ごと切り落とされてるし、きっと自分も同じ種類の人間なのだろうと光子は思った。

しかし痛々しく包帯を巻いた姿を母に見せたくない。けどそういうわけにはいかなかった。顔も体も内出血で黒ずんで、あるいは腫れ上がっていた。さいわい骨折はなかったけど。骨太でもあったのだ。

案の定、母・遼子は悲鳴のような声を上げた。大声で松吉を呼んだ。飛んで来た松吉も気色ばんだ。

「おおー！……何ということじゃ！——ヒメ！ 誰にやられた！ わしが付いて行かなかったのは一生の不覚！」

「たいしたことないって。——それより、根岸先生から連絡なかった？」と光子は遼子に訊いた。

遼子は動転していた気持ちをようやく落ち着かせ、「……ないわ」と震える声をようやく絞り出した。

「ご飯にしてー」といって光子は二階に向かった。

今回はさすがに、いつものように駆け上がるというわけにはいかない。竜子伯母からの頂き物であるビジネススーツはズタボローのちにそれを見て城島竜子はうんうんと頷きながら目を細めたものであるー明日から何を着てこうかなどと思いながら、用心して階段を一步一步上った。

前に続く

日を置かず、宵のうちに榊原家に二人の訪問者があった。

応対に出た遼子は、二人の風体になぜ恐れをなした。が、手に菓
子折りを提げていたので、謝罪に来たのだなと安堵した。いわずと
知れた板井坪根と孫の健吾であった。

二人を居間に通し、お茶を入れた。ナフタリンの臭いをプンプン
させたよれよれの背広姿の坪根が、仰々しく畳みに手を突き、頭を
下げていった。

「この度は、家の孫が、仲間にそそのかされちかり、お宅さまのお
嬢さまに狼藉を働いたそうで、真に申し訳ありませんでした。この
通りお詫び申し上げます」

「い、いえ」遼子は恐縮した。

「こりゃ！ ワレも、お詫びせんか！」と、後ろでやはり頭を下げ
ている健吾を振り返って、坪根はドスを利かせた荒声で怒鳴った。

遼子はビクツとした。無理もない。孫を叱ると見せかけて、実は
遼子に脅しをかけているのだ。ヤクザ者の常套手段である。

「すいませんでした」と健吾もしおらしく頭を下げて見せる。

坪根は身を起こして遼子を見据えた。

「これの連れがもう二人おったんじゃけど、二人ともお嬢さんに
投げ飛ばされてーいや、お嬢さんが柔道の黒帯だとは知らなんだ
もんでーヒジや、尾？骨を骨折しておりましたな、ケンカ両成敗、
謝る必要なんかない、などと勝手申しておるものだから、それらに
代わっても、私からお詫び申します。許しちゃんない」

慇懃無礼に、そういうながら坪根は、遼子の体を舐めるように見
て、左手で右手のヒジ下を掻いた。すると袖口からチラチラと青い
イレズミが見えた。

遼子は「そ、それはご丁寧にー」というのがやっとなった。身
を硬くして、目を伏せ、瞳を泳がせた。離れに明かりが点いている

から、松吉は居るのだらうけど、呼びに行くわけにもいかない。光子がいけないのはもっけのさいわいだった。

「まあーこいつもこのように反省しておりますけん、許しちゃんない！ これも一人じゃ何んもできんのじゃけんど、悪りい仲間がおると、空元気を出しよる」

謝っているのか、告訴したら承知しないぞ！——と脅しつけてるのかわからない。

そこへー。

スーと障子が開いて、長身の着流しの老人が現れた。とび色の黄八丈である。

老人は、驚いて見上げる板井坪根と健吾を見もせずに、座卓の横にやって来ると、パン！——と着物の前をさばいて、どっかりと胡坐を搔いて座った。

そして、二度ばかり両腕を怒らすように張って、武士が羽織をさばくような仕草をした。

それきり、背筋をピンと伸ばしたまま、肩を張って膝に手をへ片方だけへ突き、坊さん頭の、赤嶺松吉は動かなくなった。

この異様な雰囲気 of 老人の出現によって、空気はガラツと変わり、重たくなって、意外にも、さっきまで厳つい顔でシオマネキのように肩を怒らせていた板井坪根は、度肝を抜かれたかのように、肩を落として、皺んだ目の中で、とび色の瞳を右往左往させた。

そこへ、追い討ちをかけるように、パツと松吉が上半身のもろ肌を脱いだ。青い絵を見せる為ではない。素人を脅しつける為でもない、そこに刻まれた無数の斬り傷・突き傷・刀傷——田川の侠客の生き様を見せる為にある。

自分の為に負った傷など一つもない。義の為、弱い者を守る為に負った侠客の、「勲章」をとくと身よ！ 城島竜太郎親分に斬り落とされたーという右腕の先っぽを、振って見せた。骨は肉に包まれてはいるが、斜斬りにされたままの、肩から五センチくらいしかない腕。

——これは効いた。

小役人や素人衆を脅す為のチンケなイレズミをした板井坪根は、尻をすぼめて、「そ、それじゃあ、奥さま、ほかの者は日を改めて、謝罪に伺わせますけん、今日のところはこれで……」

といつて、いざるように去って行った。

「ふおっ、ふおっふおっ！　ヘコカルイめが！」松吉は位取りに勝って高笑い。この世界ではハツタリも必要なのだ。斬り合いは高くつく。

確かに無数の傷跡は歴戦の勇士の勲章には違いなかった——けど、肩から下がない右腕は、斬り落とされたのではなく、実は生まれつきなかったのである。どこを捜してもなかった。覗いて見たわけでもないけどなかった。みんなにはちゃんと二本あるのに、どうして自分には一本しかないのか。恨めしかった。これが引け目になった。それでイジメられもした。

さいわい中学生になったあたりから、体が急激に大きくなり、あつという間に背丈が一八〇センチ近くになった。もう誰もイジメるやつはいなくなった、ばかりか、逆にイジメる側になった。特に強そうなやつ、強がっているやつを、好んでイジメた。

IPPASHIの悪になって——それは片腕の代償だった——お決まりのコースを辿って博徒系のヤクザになった。テキヤ系ヤクザの城島竜太郎と斬り合ったのが縁で、同族でもあったし、その器量に惚れて子分になったという次第。

子供好きの松吉は子供らを集めて——また子供らの方から集まってきた——子供相手によくダボラを吹いた。城島家の子供らはみんな松吉のダボラを聞いて育った。

子供はしかし残酷である、きつと片腕のことを訊く。「松つあんな、何で片方の腕がないと？」そういう時松吉は、「竜太郎親分に斬り落とされたとばい」といって、子供時分のマイナーな気持ちを晴らした。

――何で斬り落とされたん？

――ピストルば握っちゃったけんたい。だけん、斬り落とされた腕ば担いで、すたこら逃げたっちゃ。ピストルば持って帰らんと親分に叱られるけん。

子供らはゲラゲラ笑うから興にのって。

――途中、松ノ木に叩き付けてみたけんが、これが真剣握っちゃっちえ放させんよ。

この話は小さな子供らに大うけにうけた。けど、少し年がいった子らはこれでは納得しなかった。

――お医者さんに行けばくっ付けてくれるんと違うんね？

――おお、そうたい。ばってん、ピストルば放さんけん、神経を繋いだ途端に、ズドン！ とやられちゃかんわんゆうて、お医者が、反対向きに縫い付けたんじゃ。背中搔くのに便利なばってん、寝るとき邪魔くそうてな。

ここで子供らは腹を抱えて大笑い。姫君たちにはちよつとエツちな「潜水艦」の話をしたりした。

松吉は右腕の先っぽを動かしながら、その時分のことを思い出してニヤついていたが、ふと、遼子と目が合って、遼子お嬢さんを怖がらせていたことに気付いて、あわてて着物を羽織った。

「こ、これは、はしたないところを――」

年甲斐もなく赤くなった。若親分のお上さんでなければ――今はヤモメとはいえ――後家殺しの松としては垂涎の的のような遼子であつた。

「いいえ、おかげで助かったわ。松吉さんがいると、本当に心強いわ。――あっ！ そうそう。ちよつと待っててね」

といって遼子は松吉を座敷に残したまま、居間の方へ立った。座敷には石油ストーブが焚かれていて寒くはなかった。けど、居間に通される仲になりたいものだと思つた。恐れ多いことだとすぐに恥じた。

えらいヒマがかかった。松吉は何度も首を伸ばして廊下の方を見

やったり、足を崩して胡坐を描き、フンドシの前下がりをつまみ張ったりして、そしてすぐにまた正座して威厳を正したりした。

やがて廊下に足音がして、遼子が障子から顔を出し、「遅くなつてご免ね。用意ができたから。居間の方にどうぞ」といった。

「――えっ？」

松吉は呆けた顔をした。頬が凹んで、いつそう老けた顔になった。「遠慮しなくていいのよ。お酒の用意をしたから、今夜は一緒に飲みましょう。これが飲まずにおれますか」

居間の飯台へ電気炬燵であるには刺身の盛り合わせと熱燗が用意されていた。

赤嶺松吉にとっては、そこは眩しいような聖域であった。勿論一度も通されたことはない。アンティークな家具・調度に囲まれた六畳間で、昔ながらの寛ぎやすい典型的な日本間であった。

しかも、炬燵に足を入れてみてわかったのであるが、年寄りに優しい掘り炬燵。

しかし、古びて、ほの暗く、色褪せた観は否めなかった。子供が成長して巣立ってしまうと、どうしてもそうなって、華やかさを失ってしまうもの。蛍光灯がほの暗くさえ感じられる。子育ての時間が一番活気があり、部屋の隅々にまで光が行き届いて、一番苦しい時でありながら、一番光輝いていた時期でもあったのだ。

遼子は一人子であったけど、同じ年頃の従兄弟へ従姉妹へが近所に大勢いたから、この部屋はいつも賑やかだった。その痕跡が壁の落書きや家具に貼られたワッペンなど、随所に見られた。

赤嶺松吉は杯を受けながら感慨深げに部屋を見回した。彼にも志津という石女うづめの女房とまやがいて、貰い子ばかりだけど、川べりの貧しい苦屋での子育ての時期があったのだ。

「いただきものの。冷凍室に凍らせてあったんだけど。尻腐れという別府湾で釣れるモイカなんだけど、おいしいわよ」

イカソウメンにしてあった。大皿にはマグロやサバ、そして珍し

くタチウオの刺身が盛られてある。

清酒『西の関』の熱燗を相互に注ぎ合って飲んだ。

遼子はベージュのナイトパンツに濃紺のセーター姿で、艶やかに横座りしていた。セーターだとどうしても胸の膨らみが強調されて見え、いやがうえにも四十女の色香が漂って、赤嶺松吉はもうくらくらししていた。目と鼻の辺りに煩惱が如実に表われていた。

そこへ光子が帰って来た。

前に続く

まず光子の目に飛び込んで来たのは、未だかつて見たこともない母の艶つややかな姿だった。白い襟足えりあしの後れ毛と、横座りしたふくよかな腰つきに、厭らしい女を見た。

「こんな時に、よくお酒なんか飲んでいられるね」

その気持ちはそんな言葉になって表れた。松吉を睨み付けた。

松吉は赤い鼻をして崩していた姿勢を正した。

「しあさつてには、タツが懲役六、七年の刑を宣告されることになるかならないかという、大事な裁判を控えて、いい気なものね」

その村上タツオに面会に行つて、どうしようもない自分の非力を詫びて来たのだ。

「何てことというの！」 遼子も姿勢を直して、言葉を返した。「松吉おじさんのおかげで、助かったんだから」

しかし飲みつけない酒を飲んで、しどけなく顔は赤らんでいる。

「どういうこと？」

「板井坪根というヤクザ者が脅しをかけて来て、松吉おじさんが追っ払ってくれたのよ！」

「告訴するなつてこと？　　そういいに来たの？」

「そうよ。少年と二人で。怖かったわ。松吉おじさんがいなかったら……どうなつてたか」

「ちくしょう！」

光子は唇を噛んだ。

松吉はそそくさと座を立った。「したら、わしはこれでー」

「まあ、ゆっくりして。ゆっくり飲みましょうよ、おじさん」

だがもう松吉は下人のように姿勢を低くして障子まであとずさり、濡れ縁に出て、ひざまずいて、障子を閉めた。

それから光子は不機嫌な顔で夕食を食べた。このところ親子の会話は必要最小限しかない。食器の音が空しくするだけで、テレビを

見ながら食べ、食事が済むと、すぐに光子は二階に駆け上がってしまふ。今日は臼杵の現場に出掛け、治療を受けた病院へも寄って、そして畑中の刑務所でタツオと面会——という予定行動が予定表に記されていたから、そのことと傷の具合を二、三質問したけど、返って来たのは生返事。

いつものようにご飯が済むと二階に上がってしまった。お風呂にはもう三日も入ってない。ケガがあるからとはいえ、シャワーくらい浴びてもよさそうなものだ。女の子なのに。部屋に洗濯物が山になってるに違いない。

恨めしそうに食器を抱えた遼子は階段を見上げて溜息をついた。

光子はベットにひっくり返って、先ほど見た母の姿を想い浮かべていた。白い襟足の後れ毛が憐れであった。このまま年取ってしまったのは何とも不憫。しかし、母に新しい男ができることなど、考えただけでも厭らしい。断じて受け入れられない。松つあんにさえ嫉妬したくらいだ。

寝返りを打って、今度はタツオのことを考える。このままではタツは五、六年の実刑を食らうことになる。タツでさえ救いきれない自分に、これから何ができようか……。

二ヶ月前の論告求刑公判で、検察は、冒頭陳述通りの公訴事実で、懲役七年を求刑しているのである。この公訴事実を覆すには小刀という反証が是非とも必要だった。

そういった根岸先生はどこで何をしているのか。あと正味二日しか時間がないというのに。所詮、先生にとってタツはクライアントの一人でしかないのか、それも儲からない客に過ぎないのか。別に手を抜いてるわけではないけど、もう少し切実になってくれてもよさそうなものだと思えなく思え。

一、目撃証言は崩した。

二、肥後守の小刀は確かに存在していて、少年が所持していたこ

とが確認された。

三、その物証の痕跡でも現場に残されていれば――。

今日またタツに詳しく問い質したところによると、警官が駆けつける前、つまり、パトカーのサイレンが聞こえて来た時、板井健吾は立っていたという。それがパトが横付けされた時には這いつくばっていた――というのだ。

ほんのちよつとした隙である。その隙に一体どこへ？

「そんな時、板井健吾はどこに立ってたん？」

「ど、どこ……といっても、……ぶ、ブロック塀の横。うん。そそう。ぶ、ブロック塀」

ブロック塀にはどこにも異状はなかった。かなり古い建築ブロックで、苔生しており、上には屋根状の蓋が付いていた。どちらのものか聞かなかったけど、それが境界線になっていることは確かだ……。

色々考えをめぐらしているうち、ふと。

――こん奴が、どっかこっかから入り込んじ来ち悪さをするんじや。

という田中ミサの言葉が蘇った。もしかすると、猫が入り込む隙間に小刀が入り込んだのでは！

その一〇 新証抛発見

翌朝、朝早くに光子は社用車のエブリイを駆って、臼杵の事件現場に向かった。左太腿に深さ三センチ、二五針も縫う大怪我を負っているというのである。

昨日はタクシーを使ったけど、タクシー料金が一万五千円余りかった。海坊主みたいな運ちゃんが、待ち時間を、メーターを止めていてくれたのにも係わらず。

さすがにもうそんな経費は気が引けて使えないへよくよく考えるとその経費は天門屋一家に請求されるのだけど。だから、うるさいチーボスが出勤して来ない内に出掛けることにしたのだ。

勿論、家から事務所まではタクシーを使ったので、母親の遼子とてそんな無謀は知らないし、知っていたら許しはしかなかっただろうし、それを素直に聞く光子でもなかったけど、あの赤い鼻をしたエロジイジイをお供につけるくらいの妥協は余儀なくされただろう。

（ママに手を出したら承知しないから）

光子は松吉のよからぬ噂は子供時分に――その時は何のことやらわからなかったけど――嫌というほど聞き及んでいた。

だいたい、親分の木之元薫にしてからが――大人になってからようやくその意味がわかって――顔を顰めたくなるような噂が光子の耳に入っていた。その噂を、子供らが傍にいるのにも係わらず、平気で吹聴していたのが松吉だから、真偽のほどはわからないにしても、どっちもどっち。

二人とも下の方の癖が悪いのだ。そして二人は仲が悪い。松吉は祖父・竜太郎の舎弟だし、木之元薫は小倉の房前一家では祖父と兄弟分だった。そして祖父は独立して天門屋一家を興し、それを松吉ではなく、木之元薫に譲ったのだった。

その辺のゴチャゴチャした事情が、盆正月や冠婚葬祭の折に、決まって話題になり、竜子伯母が話すのを、光子ら子供らは聞くとは

なしに聞いて育ったのだ。

——あん奴は命懸けでないと燃えん男よ。小指はおまえ、兄貴分の女に手を出した時のもので、薬指はオジキの妾、中指は親分の愛娘^{むすめ}、左手の小指を詰めたんは——親分の親心で絶縁は免れてじゃな、人吉の鶴丸親分のとこに預けられたばってんが——鶴丸親分とこは男所帯、女といえは賄いの八十過ぎのばあさんと、メスヤギが一頭おるだけ、よもや間違いは起こすまいとの親心を——あんバカちんが、あろうことか、今度は若頭に手を出してしまい、——見境のねえ野郎だ、おめえは一物を詰めるか、首を詰めるか、どっちかにしろい！——ちゅうことになったのよ、——ふふあふあふあふあ。

見てみい！ それぞれに貰った指輪をば、勲章のごつ、それぞれの指に嵌めくさってからに、いい気なもんたい。

という松吉のダボラを聞いて大人たちは大笑い。子供らは年齢に応じた反応を見せ、光子は傍の民子姉^{ねえね}に——民子姉は本当は叔母だけれど歳が近いからそう呼んでいた——イ・チ・モ・ツってなあに？ と無邪気に訊いたものだ。

そんなことを思い出しながら光子は、——「松の奴、ママに手を出したらただおかないから」と、今度は声を出してつぶやいた。だんだん不安な思いが膨らんで来ていたのだ。

それにしても、どう鼻^{ひな}目に見ても、父方の一族には変なのばかりがいる。この間来た左官の太一も、体がくの字に曲がって傾いているところから、福岡の伯母へ叔母へからは「片ギンタンの太一」と呼ばれていたし、大工のトメは、いつも目を白黒させてクギを口の中で弄^{もてあそ}んでいる変人だった。

それでも彼らに愛着を感じてしまうのはなぜだろう？ どうして自分はやっきになってタツを救おうとしているのだろう。光子の疑問はいつもそこに落ち着いた。

車はいつもと違って国道一〇号線を走っていた。途中から県道に入って、臥竜梅で有名な吉野を通して白杵に向かうコースである。

「何んな、また、何ごとな？」

無理もない、昨日の今日である。訝る田中ミサに、光子は急ぎ込んで訊いた。「お婆あちゃん、猫——野良猫だけど、どっから家に侵入して来るの？」

「ああ、あれか。あん奴は——」といって、光子を手招きした。

玄関から庭の方に回って、縁側の雨戸の上を指した。梁の上の板壁に猫ならどうにか通れそうな破れ穴があった。

「まずはあっこじやな。ジイが修繕するするちゅうち、とうとうせんま死によったけん、そんなまじや。屋根があるけん、別に困りやあせんけんど」

光子は隣の吉岡家との境界ブロック塀の所まで下がって見た。残念ながら、そこからは軒が邪魔^{のき}して見えなかった。ということはナイフを投げて、屋根に阻まれるということ。家は棟^{むね}から両側に同じ長さの軒を伸ばした、典型的な安普請の切り妻造りだった。

光子はがっかりして、そこからほかに猫が入り込めそうな隙間を搜した。

「やっぱり、駄目か……」といって田中ミサもやって来て横に立った。

「このブロック塀はどちらのもの？」と、ふいに光子が訊いた。高さ一メートル足らずのお粗末な建築ブロックだから、隣の家とは不釣合いと思った。

「こらおまえ、うちの境界線じゃあ。隣の吉岡さんとは何十年もあとに越しち来ち家を建てた。まあ、あらためち塀を築くのもイヤラシイけんち、遠慮しちくれちよんのじやろうで。代わりにマキの木を植えただけじゃけんど、品がいいの見よ」

光子はブロック塀を一跨ぎして隣の庭に、少年が立っていたという辺りに立ってみようかと思ったけど、さすがにそれは憚られた。だから塀ぎりぎりに立って、それに腰掛けて眺めようとした——ところ。

「ああ、駄目ちゃ！」

と、田中ミサが急に声を出した。

「えっ？」

「塀に腰掛たら屋根が外れるちゃ！」

「屋根が？　これ動くの？」

「ああ、古りいけん、コンクリが剥がれち、とうきなへたまに」動くやつが出る。そんたび修理しよんのじゃ」

「――！」

「これがおまえ外れたら、すぐに修理せんと、じきじゃあ、水が溜まっち、塀が痛む」

「と、いうことは何――もしかして、あの時も動く屋根があつたかも知れないということ？」

「そらまあ、どうかのう……」

「屋根をずらして、隙間から小刀を落とし込んだらどうなるの？」

「そらおまえ、建築ブロックちゅうのは中がウトへ空ろ」になっちゃうけん、一番下まで落つるがええ」

「け、警察はこの屋根を調べた？」

「そんなもん調べるかええ。脚立を立てち、家ん屋根の上を覗いただけじゃ」

「それなら、あの事件のあと、この塀の屋根を修理した？」

「ああ、そらまあ、何箇所かはな」

「――お、おばあちゃん！　このブロック塀新品にやり換ええない？」
「なしか？」

「ねえ、もつといいのにやり換えようよ」

「バカんじょういう、そげな金がどこにあるんかえ。年金じ、ようよう暮らしよるちゅうに」

「まかしといて、左官の太一にやらせるから！」

前に続く

その日のうちに田川から急遽例の二人組を呼び寄せ、大勢のギャラリが見守る中、ブロック塀が取り壊されて、遂に「錆びたナイフ」が発見された。

勿論、肥後守である。刃元に大きな刃こぼれのある、待望の新証拠が発見されたのだ。

吉岡夫妻や目撃者の熊谷ケイ、近所の住人達や子供ら、そして、得意然としている田中ミサなどの祝福を受けて、光子は青空のようすがすがしい気持ちになった。

そして何気に振り返った所に、根岸ともみが立っていた。

雪のように白いハイネックのセーターに、暖色系のタータンチェックのスカート、その上からブラウンのジャケットを羽織って、そして何と、スカートの裾から伸びたシームレスの足には、ハイヒールの靴がー。

ーオハラモードだ！

光子は駆け寄って、ハンカチに包んだナイフを突き出した。そして湧き上がって来る感情のうねりを、鼻の奥から口腔内に滲み出て来る液体と一緒に飲み込んだ。

根岸ともみはそれを受け取り、広げて見て、「……やったわね」と低く小さくいっただけで、ギャラリィのみんなに会釈して、そっちへ向かった。

光子は取り残された。肩透かしを食ったような気分で。こんなに苦勞して、やっと見つけたというのに。それが「やったわね」の一言だけとは！

(そんな……のある?)

子供時分のように、頭を撫でたり、抱き締めて褒めてくれとはいわない、気分はそうでも、もうそんな歳でもないからーでも、肩の一つも叩いて、「凄い！ よくやった！」と、感激してくれても

いいじゃない。裁判に勝てるかも知れない重大な証拠物を発見したというのに。

それに、口角の青タン見て何もいわないなんてー。

——だいたい自分は何なのよ！　どこで何してたのよ！　男と会ってたなんていったら、承知しないから！

光子は心の中で何度も毒づいた。

正月が過ぎてからもう二ヶ月近くなるけど、光子は正月餅のように膨れ上がった。

根岸が戻って来て、「あんた、ブロック塀を無償でやりかえてあげるそうだけど、博多の了解は取ってあるの？　三〇万はかかるそうだけど」といっても、プイとよそを向いた。

「知くらない」

家に帰ってから光子の機嫌は悪かった。

遼子のスカートにまでイチャモンつけて、「ちょっと派手なんじゃないの。離れにはエロジジイもいるんだし。それにあたしのセーター着るのやめてよね」と珍しく夕食後に居残っている。

「もう着ないっていったでしょう」

「だからといってママが着ることないじゃない。もう歳なんだから」
「歳、歳っていわないでよ。それでなくても、老け込んでしまいうなんだから。少しは若作りしたらって、よくいわれるんだから」

「誰に？」

「お友達なんかによ。みんな若々しい格好して、カラオケだ、飲み会だと、……この頃つくづく思うのよ。ママの人生は何なのかって。このまま年取ってしまうかと思うとやりきれない……」

何だか辛気臭いことになって来た。光子は逃げ出そうとした。

「根岸先生のことだけど……」それを察知した遼子が引き止めるようにいった。「先生が時々居なくなるけど、それは大目に見てやってね」

自分の心を見透かしているのかと光子は思った。それがイライラ

の原因だというのを。

「先生はいうにいわれぬ問題を抱えてるのよ」

「どうせ、男に会いに行くんでしょ」

「バカね。そうじゃないわよ」

「だって、すつごく香りのいい、くらくらするような香水の匂いがしたもん」

根岸ともみの秘密を知る者は養父母を除けば、この世に二人しかない。根岸の夫宛の手紙を検閲した刑務官と、夫の遺品の中にあつたその手紙を読んだ遼子の二人だけである。

検閲官は守秘義務を守っていると見えて、その事実が世間に漏れることはなかった。遼子もその手紙を焼き捨てた。なので獄死した夫を含めたら三人だけになる。

「じゃあ、どこで何してるのよ？」

「さあ、それは知らない。けどね、人には人の事情があるから、そつとしておいてあげようね」

「そうはいかないよ。タツのことは放っぱらかして、あたしが新証拠を見つけ出さなかったら、タツは五年も六年も刑務所暮らしだったんだよ。それが正義の味方の弁護士といえる」

「いえるわよ。あんたを信頼して任せたんだから。根岸先生が一生懸命やつても発見できたかどうか。先生が信頼したあんただからこそ出来た。だから先生がやったのと同じ。人間にはみんな向き不向き、得て不得手があるの。その人にしかできないこともあるのよ」

理屈では適わない。感情のわだかまりは解消しないけど、もういい返す言葉がなかった。

「だから、お風呂に入ろうね、ママが洗ったげるから。怪我して洗いにくいだろうから」

「お断りします。体くらい自分で洗えます。でも入らない。最終弁論が終わるまで、入らないって、決めたの」

「ーちよとやめてよ」

その二 最終弁論裁判

二月二四日。午前一〇時。

大分地裁小法廷にて、最終弁論裁判が開かれた。

天気が悪いせいでもあるまいけど、傍聴人は、榊原家の母娘と赤嶺松吉のほかは、捜査関係者と思しき者が数人、板井家の者は誰も来てなかった。マスコミ席も、地元テレビ・ラジオ放送局と新聞社が一社だけ。

閑散とした法廷に、弁論要旨を滔々（とうとう）と読み上げる根岸ともみ弁護人の声が響く。その前の長椅子には、刑務官に挟まれた村上タツオの姿があった。

新たな展開に驚く検察官を尻目に、根岸弁護人は次々に人名をあげて証人申請をした。

「よって、板井健吾、板井坪根、上田正也、熊谷ケイ、田中ミサ、吉賀虎子——の証人尋問を申請します」

「不同意！」検察官が凜とした声をあげて立ち上がった。「その必要はないかと思えます。いたずらに裁判を長引かせるだけです」

はからずも検察官も女性であった。それも、いずれ劣らぬ長身の美形、裁判長は見比べるように二人を見て、「吉賀虎子というお方は？」と訊いた。

女性検事は珍しくもないご時勢、しかし兩人とも目を見張るような美人でもあった。

「臼杵警察署の警察官で、階級は巡査部長です。ちなみに虎子といっても、虎の子と書いて虎子——女性ではありません。まず最初に現場に駆けつけた警察官です」

「ほう、それはまた珍しいお名前ですね。それで弁護人はそれの方々から、どういう証言を引き出したいわけですか？」

「勿論、被告人の主張する事実と、検察官の主張する公訴事実——との違いを明確にする為です」

「裁判長！」東浜明美検事が発言を求めた。

「許可します。どうぞ」

「物証のない不毛の証人尋問はもうさんざんやって来たことであります。その人数をどれだけ増やそうと、書証以上の証言が得られないのは明らか、これ以上は時間の無駄かと、重ねて申し上げます」

「裁判長！」

「弁護人の発言を許可します。どうぞ」

「それではここで、検察官お望みの物証を、お目にお掛けいたしますしょう」

何という心憎い演出であろうか。初めから披瀝するのではなく、ここぞという時に――その効果は絶大であった・

根岸ともみ弁護人は、肥後守の小刀が入った透明のビニール袋を高々と掲げ、「これがその被告人が主張する肥後守という刻印の入った小刀であります」といって席を離れ、向かい側の検察官席に行き、それを見せ、そして、中央の事務官に手渡した。

それは事務官から裁判長に手渡され、裁判長と右陪席裁判官と左陪席裁判官が顔を突き合わせて眺めた。

やがてお三方はうなずき合って、鈴木是政裁判長は厳粛な顔を正面に向けていった。

「証人申請を許可します」

それから三者――弁護人と検察官と裁判長――の話し合いにより、次期公判の日取りが決められて、閉廷となった。

外はしとしと冷たい雨が降っていた。

ちょうど昼時であったので、裁判所から東にちょっと行った所の法曹会館の横のカフェで軽食を食べることにした。

赤嶺松吉もついて来たそうな顔をしていたが、光子に睨まれてすごすご城崎の事務所に歩いて向かった。事務所といっても天門屋一家の事務所で、ビルの一室を借りて「大分営業所」という看板が掲げてあり、中九州一円をカバーする拠点である。今はシーズンオフ

なので松吉の遠縁にあたる本庄純二が一人で寝泊りしている。

カウベルを鳴らして店に入り、三人は窓際の席に腰を下ろした。先客は三名、たいてい法曹関係者である。そのうちの一人と根岸ともみは会釈を交わした。

店内にはタンゴの調べが静かに流れている。光子はこういうところは初めてなので、雰囲気の良い店内を見回して、大人になったような気分がしていた。

南方系の顔立ちと色合いをしたウェーターがオーダーを取りに来たので、それぞれ決めてあるものを光子が注文した。

「APUの学生さん？」と遼子が訊いた。

「はい。そうです」

「だと思った。どちらから？」

「ミヤンマーから、です」といってウェーターは照れて、三人の視線から逃れるように去って行った。

「ママったら、すぐそうやってオバサン丸出しで知らない人でも話かけちゃうんだから」

「いいじゃない。別にナンパしてるわけじゃないんだから」といって遼子は、「何とかしてよ。小姑ここうのように傍から口うるさくて」と根岸にいう。

根岸ともみは光子を見つめて「よくやったわね」としみじみ褒めた。「おかげで、あの検事に目を付けられてしまったわ。新人なのになかなか切れ者らしいわよ」

「そういえば、前の検事さんはどうなったの？」遼子が訊いた。

「前任は去年の暮れに心筋梗塞で倒れたらしいわ。後任は大変だったと思う。膨大な公判記録の読み込みや何かで。そこにいきなりのカウンターパンチ。一生怨まれるわ」

「でも、板井健吾に坪根、それに上田正也少年、証人として出廷してくれるかなあ……」光子がいう。

「大丈夫、出て来なければ、裁判所の召喚状が出る。これは拒めないから」

「あたしが診断書持って訴えたらどうなるかなあ、板井健吾の奴」
「準強姦致傷などで、最低でも懲役三年の実刑は免れないわね。勿論そうなると執行猶予は付かない」

「わおーっ！ 証言次第じゃやってやる！ 民事でも二、三百万はふんだくれるでしょう、タツが一五〇万なんだから」

「勿論、おしとやかなお嬢さんの場合であればね」
「どういう意味、それ？」

「相手も診断書取ってるかも知れないということよ」遼子がいった。
そこに、料理が運ばれて来た。根岸も遼子も特製ランチで、光子はエビピラフに、ハンバーグだった。

一週間後に開かれた公判で、オスカルモードに切り替わった根岸ともみは、黒ずくめの衣装でクールに証人を追及し、検察の公訴事実を次々に覆す証言を引き出していった。

板井健吾と坪根は証人として出廷することになった時からもう、どっちが得か、損得勘定に聡い彼らのこと、観念していた。

板井健吾の尋問。

「証人は肥後守という刻印の入った小刀を見たことがありますか？」
「あります」

「どこで見ましたか？」

「蔵の中で見つけました」

「それは誰のものですか？」

「死んだ父のもので、祖父の代からのものです」

「それはどんな形をしたものですか？」

「刃渡り一五センチくらいの握りの部分に刃が収まる折り畳み式ナイフです」

「どんな色をしてましたか？」

「鉄の色そのものでした」

「ほかに何か、特徴はありませんでしたか？」

「刃元に大きな刃こぼれがありました」

そこで根岸ともみは証人席に行って、「それはこれですか?」とビニール袋に入った小刀を掲げて見せた」

「錆びていますけど……そうです」

「間違いありませんか?」

「間違いありません」

根岸ともみは席に戻ってまた質問を始めた。

「証人は被告人を初めて見た時どう思いましたか?」

「たこ焼き屋の親父だと思いました」

「料金を払わずに逃げたのはなぜですか?」

「からかってやろうと思ったからです」

「民家の庭に追い詰められた時はどう思いましたか?」

「塀を乗り越えて逃げようと思いました」

「それで?」

「塀に手を突いた時、ずるっと屋根が動いて、やったろうかという気が起きました」

「何をですか?」

「ポケットの中の小刀で脅してやろうかと思いました」

「それからどうしましたか?」

「百円玉を五個ばら撒いて……やるんか、おっちゃんといって小刀の刃を起こして構えました」

「被告人はどうしましたか?」

「真っ赤な顔で何かいおうとして、口を開けて、固まってしまいました」

「それでどうしましたか?」

「立ったまま気絶したのではないかと思って、ちょっと突き刺してみようと思いました」

「それからどうしましたか?」

「いきなりカミナリのような声を出したので、ビクッとしてしまい、ビビッたところを殴られました。小刀をもぎ取られました」

「何発殴られましたか?」

「よくわかりませんが、三、四発くらいだったと思います」

「小刀をもぎ取られてからも殴られましたか？」

「いいえ」

「それからどうしましたか？」

「パトカーのサイレンが聞こえて来ました」

「その時被告人はどうしていましたか？」

「道路の方へ歩いて行きかけて、立ち止まっていました」

「その時証人はどうしましたか？」

「ブロック塀の屋根が動いたのを思い出して、ヤバイと思い、小刀を拾って、隙間に落とし込み、屋根を元に戻してから、地べたに這いつくばりました」

「警察官は何人来ましたか？」

「三人来ました」

「警察官はどうしましたか？」

「たこ焼き屋さんの腕を二人が掴み、一人が、大丈夫か？　　といっ
て抱え起こしてくれました」

「それからどうしましたか？」

「暴行傷害の現行犯で逮捕するといったたこ焼き屋さんに手錠を掛けてパトカーに乗せて行きました」

「証人はどうしましたか？」

「あとから来たパトカーに乗せられて警察署に連れて行かれ、色々
聴かれました」

「警察官にはどういつて説明しましたか？」

「ちよっとかからかってやろうと思ったただけなのに、むきになって
追い駆けて来て、追い詰められ、代金をよこせというから払ったの
に、殴られたー」といいました」

そこで根岸ともみは「質問をおわります」といって、裁判官に礼
をして着席した。

廷内は静まりかえった。

食事休憩を挟んで午後からは、板井坪根と警察官の吉賀虎子を尋

問してへ上田正也少年は個室で裁判官が尋問した、すべての証人尋問を終わり、最後に被告人・村上タツオの意見陳述を以って結審一週間後に判決公判があつて判決がいい渡されることになったのである。

勿論、判決は満足すべきものだった。完全無罪というわけにはいかず、未決拘禁期間よりわずかに永い、懲役一年二月、執行猶予五年という判決で、社会的通念により、正当防衛は認められなかったのである。五年もの永い期間弁当を持たせることもそのゆえか。

ともかく、博多御所は大満足。「まだ福岡と熊本にも入っちゃるばってん、銭にゃあ、何んばあってん、足りゃあせん」といいながらも、上機嫌であつた。

無論、判決公判には城島竜子と絹江も傍聴した。そのついでに榊原家に立ち寄つたのである。

「光！　こたびは大活躍だったそうじゃのう」

といつているところへ、遼子が拝領のビジネススーツを持って現れ、広げて見せた。「お義姉さんこれ見てください」

「おほほほ。また派手に暴れたもんじゃのう。うんうん。しかしまだまだじゃな。わしなら足腰立たんようにしてやるばってん。――よか。よかよ。そげんなもん何ぼでんあつらえちやる」

「それに――いってくださいよ。最終弁論が済むまでは、なんていつて、一週間も一〇日もお風呂に入らないんですよ」

「何んが。家のハルなんか中学生時分は」ハルというのは謀殺された次女の芳江の娘のことで、竜子が養女にしている光子より二つ上の従姉妹、春奈のことである。「それぐらいなもんじゃなかばい。コケと脂で黒光りしよったちゃ。その方が悪い虫がつかんでよかつたい」

「――もう、お義姉さんたら。家の光子は二十歳前の娘ですよ」

離れの納屋では、松吉や本庄純二やタツや太一にトメなどがドンちゃん騒ぎをしている。炭坑節が聞こえて来る。

光子は隙を見て二階に逃げ出そうとした。

「こら待て！ 光子。どこ行きよるか。久ぶりに会うちやに。ここ来て座りんしゃい。伯母ちゃんの横ば」

「何よ。疲れたけん眠たかよ」

仕方なく、竜子の隣の掘り炬燵に足を入れて座った。八人がゆったり座れる掘り炬燵である。

「いいか、光子。おまえも親父に似て、錢に疎い。三〇万もあれば、ムシヨでお勤め中の者の家族に、三家族に手当てができるぞ」

「ばってん、あれは伯母ちゃんがいいってゆうたやん」

「おまえが三〇万くらいかかるからちゅうけん、――そうか、ちゅうたつたい。一〇万といえ、一〇万で済む。話しは持って行きよ。うたい。どこの世界にただで三〇万もくれてやるバカがおるか」

「お義姉さん、それはちよつと酷いんじゃないやありません。光子は――」

「遼子さん。ここは肝心なとこばい。錢のケジメをば、性根に叩き込んでおかねば、上に立つ者にはなれん」

光子は膨れた。上に立つ気などない。しかしこの伯母は怖い。おとなしく聞いているしかない。

もう一人の叔母の姿が見えないと思ったら、離れのドンちゃん騒ぎの中から声がしている。絹江伯母は四十過ぎて独身だった。

竜子は光子の頭を荒々しく手で撫で回して、「ばってん、こたびはようやった。上出来たい」といって、上機嫌で、笑った。

その一二 見晴台変死事件

その名の通り、そこから眺める景色は絶景である。

遠くに国東半島を眺め、その手前のライトブルーの帯びは別府湾、左にパーンすれば、原始風景さながらの荒々しさで、ゴツゴツ隆起した鶴見岳や由布岳など千メートル級の山々が望まれ、そしてその山裾には日本一の湯煙を上げる、「湯の街・別府」が煌めいており、更に日本一のサル山である「高崎山」から大分市街へと展望される。しかし絶景なのは夜とて同じである。

夜ともなれば、眼下に突如として大小様々な光の海が現出する。まさに、まぼろしの百万都市が立ち現れるがごとくにである。

初めて見る者は、その夜景に感動と驚きを禁じえないだろう。目を奪われるに違いない。そして見晴台の住民は、昼夜の絶景に天下を取ったような気分になるのだろう。

その正体は昼ならなんでもない、臨海コンビニートの灯であった。とりわけ新日鉄が凄い。それだけ、夜でも大勢の労働者が働いているということであり、その団地内で発見された変死体もその労働者の一人であった。

そして、その事件の容疑者として逮捕されたのも同じ職場で働く同僚であり、その容疑者の母親が根岸法律事務所に弁護を依頼して来たことから、その奇怪な変死事件が俄然身近なものとなった。

それまではテレビニュースを観ながら「何？　どういうこと？

嫌だ！」と、あれこれ評論していた光子らであるが、新しい新たなクライアントがやって来てボス弁と長らく応接室で話し込んでいると思ったら、やがて根岸ともみが休憩室に現れて、目の前に映し出されている事件の担当を命ぜられたのであるから、光子が呆気にとらわれたのも無理はない。テレビからいきなりサダコが現れたようなものだ。

ボス弁の根岸ともみは、相変わらず民事の方で忙しく、自然、刑

事案件は光子が担当するようになったのである。お手柄を立てたばかりだし、当然光子が張り切ったことはいうまでもない。

しかし、接見を申し込んでも断られるし、当面やることといえば、家族から事情聴取して、新聞・テレビなどのメディアによる情報と突き合わせて、事件の概要を把握することであつた。

その事件は春爛漫の、四月一八日の午後一時三五分に、110番通報により、所轄の大分中央署・高城交番が駆けつけて、認知された。

事件現場は、見晴台団地の最上部に位置し、築四年・建坪四〇坪ばかりの二階建て家屋。遺体はその家の一人住まいの独身男で、守山孝明〈34歳〉。死後四、五日経過しており、寝室六畳間でのその態様はまことに奇怪なものであつた。

通報者は、第一発見者の清水紀夫〈四一歳〉。ガイシャとは職場の同僚であり、無断欠勤が続いていたことから様子見に来て発見。玄関の鍵はかかっていたので、近くのマンションに住むガイシャの母親を連れて来て開錠したものである。

諸般の事情から第一発見者の彼に嫌疑がかかりーおびただしい数の彼の指紋が現場に残されており、死亡推定時刻にアリバイがなく、二人の間に金銭トラブルがあつたことなどー一時は自殺説もあつたのだが、目撃者が現れたことによって、確かな物証がないまま、警察は逮捕に踏み切つたのだつた。

しかし、清水紀夫は一貫して事件関与を否定し、確かな物証が得られないことから、接見はなかなか認められず、そのことで根岸ともみ弁護士と東浜明美検事との間で火花を散らしたこともある。裁判所の前で偶然行き会つたことから生じた小競り合い。

同行していた光子が口尖らせて、「タツのことで根に持つてるんでしょ」と検事に食つてかかったので、さすがに根岸ともみは失礼を詫びて、光子を引っ張って去つた。男性の事務官が傍にいてあきれて見ていた。

道路を横切りながら、「彼女、まだ若いし新米だから、警察に遠慮してるのよ。何といっても実際に動くのは警察なんだから」と根岸はケンカっ早い光子にあきれている。

そして歩道に差し掛かった所で「ふふふっ」と笑ってタバコを取り出し、カッコよく火を点けて、たった今の応酬は何だったのかと思わせる穏やか顔でタバコをふかすのだった。

今時、女が歩きタバコするか？ 男でもないのにーという顔で光子は根岸を見る。

でもカッコイイ。彫りの深い外人のような顔に孤独の色を湛え、クールに目を細めて、どこを見るときもなく見ながら、紫煙を吐くのだへそこには一かけらの幸せも見出せない侘しさがある。

光子はそれをときめいて見つめ、そしてすぐに、人が変わったように変身した時の、ウエットな根岸を思い出して、戸惑う。

その時は嫌悪ともジェラシーともいえぬ、理解し難い感情にとらわれるへ男に抱かれて来たな、などと思ってしまうのだ。

それはきっと、自分だけヒイキにして可愛がってくれた同性の先生が、お嫁に行ってしまう時に感じる女生徒の、淋しい気持ちに近いのではないか。

――根岸先生はどうしてそこに立っているのだろうか？

父と民子姉へ叔母へによって、双子の弟を殺されたというのに。謀殺人であり、父と民子姉に酷い仕打ちをしたにしても、自分は弟の仇の娘であり、姪子ではないか。母はその妻だったではないか。

そしてまた根岸先生は父の仇、悪の帝王の手先の姉でもある。なにどうして自分はこうも先生に魅かれてしまうのか。先生が男なら、抱かれないなどー。

そこへ「光子」と、ぼそっと根岸がいった。

「何？」

「分大ぶんだいに行つて、客員教授の野島氏に会つて来て」

「それはどういう人？」

「新聞見なかったの？ 元警察庁の鑑識課長で、退職時は審議官だ

った人、検死の専門家。その教授だけが、自殺説を唱えている」
「そんな偉い人がどうして？ 現場に臨場したとでもいうの？」
「らしいわね。詳しいことは知らないけど」

そういうわけで、光子は午後からエブリイを運転して旦野原の分大分大学に向かった。

一人余計な者がついて来た。いわずと知れた東トシである。分大は母校だから是非とも案内せねばと張り切っているからしょうがない。子供時分にはお菓子に釣られて、どこにでもついていったけど、今はそのハイテンションについていけない。正直鬱陶しい。

けど、そんなひとの気持ちなんかどこ吹く風。

「ねえ、ねえ、光子ちゃんたらあ」

「何？」

「井田教授のケーススタディーだけとお。旦那が奥さんを殺そうと思って拳銃で撃ったんだけどねえ、弾が逸れて天井に潜んでいたドロボウに当たってしまったのよね。それでドロボウさんが死んじやったんだけどお、――これって、殺人罪を構成すると思う？」

「知らないよ、法律なんか勉強してないんだから」

「そっかあ。でも、素人考えではどおお？」

「殺意はあるから、でもほかの人に当たったんだから、業務上過失致死かなんかになるんじゃないの？」

「やっぱそう思う」

「違うの」

「うーん。どうだったかな？ ほんとうとね。もう何年も前に勉強したことだから忘れちゃったの。問題自体そんな問題だったかどうか……」

「はあ。そんな頼りないことでいいん？」

「ほんとうとね。司法試験は五年以内に三回失敗すると、もう受験資格なくなるんだ」

「で、トシちゃんは？」

「えへへへ。――三回」

「え？　じゃあもう資格ないの？」

「そう」

「何だ。空念仏だったのか。じゃあ、さっさと結婚しちえば」

「ほんというとね」

「何？　まさか相手もないってんじゃ？」

「ピンポーン！」

光子はドアを開けて蹴り出してやろうかと思った。

まあそんなこんなで、道中退屈せずに済んだけど、婚期を逃したトシちゃんが少しかわいそうな気がしなくてもなかった。キャンパスに着いてから懐かしさをハイテンションに騒ぎ立てる姿を見て、そんな気はすぐに失せたけど。

しかし、アポをとっていたにもかかわらず、教授は学部にはおらず、ニキビだらけの学生がやって来て、「急用ができて、挟間の医科大の方に出掛けたから、そっちへ行ってくれという。

何じゃそらーーと思ったけど、致し方ない。どれだけ大物か知らないけど、えらく勿体ぶってくれるじゃないかと、光子は黄色い声で騒ぎ立てるトシ子の襟首を掴んで、猫のようにぶら下げて車の中に押し込んだ。

そして来た道に戻って医大に向かった。

前に続く

狭間の小高い丘の上に医科大学へのちに大分大学に統合されて医学部となるの建物が、夕陽に白くきらめいていた。

それを目掛けて坂道をグンと上り詰めた所に門がある。二人とも何度か訪れたことのある病院。光子の祖父は県病に入院しているけど、最初の検査はここでした。

教授は医局の方にいるということなので、そこで待つよういわれていたので、外来患者や家族で賑わう待合室で待った。

二〇分ばかり待たされてようやく白衣を着た痩せ型長身の教授が現れた。

といっても野島教授の方は中央に立ってキョロキョロするばかり、光子があたりをつけて近づき、「失礼ですが、野島先生でいらつしやいますか？」と声をかけたから、「ああ、そうだよ」といった。

「根岸ともみ法律事務所の、榊原光子と申します」といって名刺を差し出した。

野島教授はそれを受け取り、それと光子の顔を交互に見た。随分長い顔だなあと、横で東トシ子が教授の顔を測るように見ている。「君、どこかで会ったことあるかい？」

腫れぼったく、こんもりした上目蓋に押し潰された垂れ目のわずかな隙間からじっと見ている。

「——いえ？ お会いしたことはありませんけど……？」

「あそう。ぼくもこちらへ来てまだ間がないんだけど……そうだな。学生以外で君のような若いお嬢さんに会う機会もないな。——で、見晴台事件でぼくに訊きたいことというのは？」

「ええ、先生の」

「まあ、ここじゃ、なんだから——ついて来なさい」

といって野島教授は受付脇から入った所の小部屋に二人を案内した。ちよつとした会議室のような部屋で、衝立で仕切られた所に革

張りの応接セットがあった。

そこに落ち着いて、まだ何か引っ掛かるような顔で光子を見る教授に、光子は続きをいった。

「先生のご見解をですね。検死のエキスパ―でいらっしゃる先生の自殺説のことを、詳しくお訊きしたくて」

「ということは、被疑者の弁護人ということだね」

「はい。そうです」

野島は最早警察官僚ではない。自由にものがいえる立場だった。しかし、事件現場に臨場できたのは県警の検死官の配慮であったから、捜査に係わる迂闊なことはいえない。

第一報が飛び込んで来たのは、おりしも全日空ホテルで九州管内の検死官を集めて講演をしている時だった。いや講演はもう終わって、県警の連中と一階の食堂で食事をしていた。

担当検死官の釘宮警視が、「先生もいかがですか？」と誘ってくれたので渡りに船と、またとない教材だと、数人の検死官と連れ立って臨場したのである。

その時の情景を思い起こして野島教授は押し潰された垂れ目をいよいよ細くしてつぶやいた。

「……あれは自殺でもなく、事故かも知れないな……」

細長い顔中に老人特有の死斑のような染みがある。

担当検死官の釘宮警視ほか二名と、野島教授は迎えに来たPCで高城の現場に急行。すでに所轄の連中が規制線を張って、現場を大勢で踏み荒らしていた。

「ああ……こんなにしちゃって！ これじゃあ、台無しだよ！」と、玄関のタタキからつい現役時のような慨嘆の声を上げたので、「こん氏は誰かえ？」と廊下に立った中央署の榎藤警部が声を荒げた。ダークスーツ姿の痩せ老人を無遠慮に見下ろして。

「警部、口を慎まanka。この方は元警察庁・刑事局の野島警視監だぞ。今は大分大学の客員教授に就任しておられる野島先生だ。現、

警視庁公安部長の野島聡史警視監の御父君でもある」

権藤警部は、これはたまげたという顔をした。が、根っからの横着な性格、それがどうした、という顔もした。

しかしもう、野島教授は彼の脇をすり抜けて、青い出勤服の鑑識職員が忙しく立ちうごめく中を寝室の方に向かっていった。

六畳間の寝室では鑑識係員が変死体を下ろそうとしていた。

「あっ！ 君ら！ 駄目だよ、そのままにしておきなさい！」と叫ぶ。「駄目だよ、君。現場は保存しておかなきゃ」

いわれた鑑識の主任が、「いやしかし、検死官に検死をしていただく為にー？。勿論、十分な写真撮影はしておりますよ……？」

——このジイさんは何者か？

と、権藤警部と同じように怪訝な顔で中津留巡查部長は、続いて入って来た三人のダークスーツの中に釘宮検死官の姿を認め、説明を求めるような目つきで、軽く敬礼した。

「この方のおっしゃる通りだ、中津留君。我々の仕事は発見時のままの状態から始まる」

「はあ……」

野島教授はもう天井からロープで吊り下げられた遺体の方にまわり、正面から、その奇怪なデスマスクを見つめている。真っ赤な色で塗られたーあとでポスターカラーだとわかるー奇妙な顔を。口は半開き状態である。

遺体は、部屋の中央に、天井を支える横木に滑車を取り付け、それに小指程の化繊ロープへ色は白をを通してーそのロープの両端は輪になっており、重みがかかれば締まるようになっていてーその輪の片方に右足首を、もう一方には首が絞まるように首に嵌められていた。つまりエビ反りになって窒息死していたのである。

但し、そのままでは背骨が折れるか、横木の方が重量に耐えられなくなるだろうから、ちょうど腹部に木造丸椅子があてがわれていた。それが支点の役割りをしてバランスを取っていた。

両の手はどうしているかという、約五〇センチ間隔に差し渡し

してあるもう一つの横木に打たれたフックに通した紐の両端を掴んでいる。飛行機の翼のように広げて、やはりバランスを取っている。という様態だった。そして遺体はネルの白地にグリーンの縦縞模様のパジャマ姿で、腹が露わになっているほかは乱れはない。腹は血液が溜まって赤紫色になっていた。

「君。この丸椅子は倒れていたわけではなく、このように身体を支えていたのかね？」

野島教授が訊いた。

「はい」と鑑識主任の中津留巡査部長が答える。

「すると、この状態では窒息するほど首は絞まってない筈だな」

しかし首にはロープが軽く食い込んで擦れた痕がある。

「ふむ」

野島教授は一步下がって眺めながら考え込んだ。

「ムササビが滑空するような格好ですね」と傍で釘宮警視がいう。

「この状態で丸椅子を外したんじゃないですかね」と同行して来た検死官のタマゴがいう。楠木茂樹という二十代の警部。

「それだと、あの横木がもつかね」と、もう一人の検死官・坂田警

視が言う。「顔を赤く塗ったのはどういうことだろう？」

「ホシが塗ったんでしょかね」と楠木警部。

「あたり前だろう。ガイシャがそんなことするわけないだろうが」と坂田警視がいえば、「やっぱ他殺だろうなあ……」と釘宮警視もつぶやく。

「釘宮検死官、これをご覧ください」といって、ジャガイモのようなごつごつした短髪頭の権藤警部が、コピー用紙を差し出して見せた。

そこにはワープロ文字で、“ロシアより愛をこめて”と真ん中に打ち込まれてあった。

——何じゃこれは？

とみんなが見入る。

「このベットの上に置いてあったんですよ」と権藤警部がベットを

指している。

ベツトは入り口ドアに向かって左側の壁際にあり、右手は本棚と衣装ダンスと、押入れがあり、窓には壁色の分厚い遮光カーテンが引かれてあって、外からは見えないようになっている。

「これは怨恨や物取りというより、変質者の犯行じゃわん。物色された形跡もないけん。まともな者がこげな妙な殺し方はせんだろうし」と権藤警部は自分の検視結果を述べた。本部が乗り込んで来るまでは彼が捜査主任だ。

「もうガイシャを下ろしてよいでしょうか？」と中津留巡査部長が誰にともなく訊く。彼より階級が上の者ばかりだ。

「まあ待ちなさい」と、民間人が口を出す。中津留はまだその正体を知らないからぶすくれた。「君、すまないけど、遺体のお尻を捲ってみてくださらんか」

「え？ お尻――をですか？ ――ああ、死亡推定時刻を調べる為に、直腸温度を計るんですね？」

「いやそれはもう、相当日数が経ってるからそれはほかの方法でないと。お尻にキュウリが刺さってないかどうかと思ってね」

「へっ？」釘宮巡査部長は口をポカンと空けた。「キュウリ？」瘦せて小柄な男である。「それはまた――どういうことですか？」

ほかの者もあっけに取られた。苦笑している者もいる。

「いや、何、どうもこの様態から、例のノーベル賞作家の小説をふと思い出してね」と野島教授は真面目腐った顔で遺体の顔を見ながらいう。「小説では顔に赤いベンガラを塗って、お尻にキュウリを刺したまま――そうやって主人公の友達だか何だかが死んでた」

みんな無粋な連中ばかりで、文学にはほとんど縁がないのか、「我國の作家だよ、君」といわれても何のことやらさっぱりわからない風。

「まあ老婆心ながら、――どれどれ私が見てみよう」といって教授は遺体の寝巻きのズボンを捲った。

けど、そんなことはなかった。腹部とは裏腹にロウのような色の

尻が露わになっただけ。

「どういふところからそんなことを？」と、さっきまで尊敬していたのに、という顔で釘宮警視が訊く。

「うん。顔がいつてるからね」

「ええ。確かに逝ってます」

「いや、そうじゃなく、エクスタシーのまま死んでる」

ここでようやく釘宮にも合点がいった。思い出したのだ。野島氏は現役時代は変死体の断末魔の言葉を読み取ることで有名だった。それで幾つもの難事件を解決したという話を、歴代の本部長から聞いたことがあった。病理学者でもあるからそうかなと思っていたのだが。

ほかの者も思い出したようだへ榎藤警部と、中津留巡査部長など鑑識職員を除いて」。

しかし、教授の講釈を聴いて、みんなアホらしくなった。ご神託を有難く聴くものは一人もいなかった。本当にこれが警察庁鑑識課で鳴らした男だろうか、検死官連中は眉にツバをつける思いだった。バカ面下げて五十余名の検死関係者が、遠くは沖縄からもやって来て、神妙に講演を拝聴していたのだから――いやはや。

「人間のね、最高の快感は絶息間際にあるのだよ。神の思し召しかどうか知らんがね。頸動脈を塞がれて危機感を募らせた脳細胞が、何しろ脳細胞の数は一〇の12乗、宇宙の星の数に等しいといわれている、それが新鮮な酸素を求めて痙攣し、脳内麻薬といわれるホルモンを乱放出して、だから首を絞めたり緩めたりして楽しんでい

た者が、手加減を誤って事故死するケースが結構あるのさ。
足でロープを引っ張ったり緩めたりして楽しんでいるうち、足がつったか何かしてね、そのまま究極の昇天をしたってわけさ。何が他殺なものかね。

「だけど、これを証明するのは厄介だぞ、君。まだ学説も定まっていないしね。判事というのはコチコチの現実主義者だからね」

光子は穴の開くほど野島教授を見つめた。これが本当に病理学者なのだろうか。

しかし、この縁によって、光子の運命が大きく変わることになるうとは、当然なことだけどこの時は思いもよらなかった。二十歳前の乙女によくもそんなエッチな講釈をぬけぬけと垂れたものだと、忌々しく思っただけ。

「ねえねえ、光子ちゃん。……あの偉い先生がいうこと本当かどうか試してみない？」

と小鼻を膨らませていうトシ子を今度こそ大分川に蹴り込んでやろうかと思った。

その一三 清水紀夫に接見

事務所には午後六時を過ぎての帰還だった。

母親の遼子は当然もういなかった。根岸ともみが一人で、執務机で静かに書面に向かっていた。

「あゝあ、疲れた」

光子は自分の机の所へ行って、どっかりと椅子に腰を下ろすと、机に突っ伏した。光子の机は窓際にトシ子の机の次に並んでいる。トシ子はお茶を入りに給湯室に向かった。

「どうだった？」根岸が書面から顔を上げずに訊く。

「本当にあの先生偉い先生なの？」さも疲れた風に顔だけ向けていう。心なしか目が潤んでいる。

「どうして？」

ガバと体を起こして。

「だって変なことばかたって、バツカじゃないの。それにさ、あたしの顔じつと見て、どっかで会ったことないか？　なんてゆうのよ。ああやって若い学生をナンパすんだよ」

根岸は書面から顔を上げた。そして光子の顔をじつと見た。

それが男のような眼差しに見えて、光子はゾクツとした。

「それで？　事件のことは？」

「あれは自殺でもなくて、本当は事故だって」

「事故？」

「それがおかしいんだよ」東トシ子がお盆を捧げて現れた。三人分のマグカップと砂糖のスティック入れが乗っている。「ねええ、光子ちゃん」

それぞれのデスクにマグカップとスティックを配り終えて、自分もデスクに着く。

そして、コーヒーを啜りながら、教授のいったままをボス弁に報告した。「遺族のことを思いやって、一応自殺という所見を述べた

けど、本当はーそんな風な口振りだったよね、光子ちゃん」

根岸はマグカップを掻き混ぜながら「声もなく」苦笑して、「そう」といった。「教授がそういうんだったら、そうなんだろうね」「あきれた」と光子はマグカップを乱暴に置いた。「先生もそう思うわけ？」

「実績があるからね。検死であの方の右に出る者はいない」
「ホントに？」

「でも、映画なんかで女の人が絞め殺される時の顔って、あの苦悶の表情って、あれはーあれだよねえ」とトシ子。

「そんなの演出じゃん」

「どっちにしても、本人に訊くしかない」

「え？ 接見許可下りたの？」光子が驚いて訊く。

「勾留延長が決まれば、きつと認める。光子に恐喝されて、彼女ビビってたから」

「ーもう！」

根岸ともみのいう通りだった。

五日後に裁判所から一〇日間の勾留延長が認められると、自供が得られたわけではないけど、検事は接見禁止措置を解いた。

まず逮捕後一二日間は何やかやいって接見を認めず、被疑者を孤立無援にしておいてガンガン攻め立て、一気に自供に追い込むのが捜査機関の常套手段。罪の意識や家族のことや世間体や将来のことで混乱、動揺している時が狙い目である。

これが落ち着いてしまうと都合のいいウソで塗り固めてしまう。まして弁護士に「都合の悪いことはいわなくてよい」などと防御権を吹き込まれでもしたら。

それでもなお清水紀夫は微塵の揺らぎも見せなかった。警察は、いい逃れのできない確固たる証拠を突きつけることができなかった。

——ガイシャの守山孝明とは無二の親友であり、家にはしょっちゅう遊びに行っていたから指紋があるのはあたり前。

着衣も胸を肌蹴たシャツと折り目の崩れたズボンをだらしなく着込んでいる。

「この方々が弁護士事務所の先生方よ。色々と力になって下さるから、何なりとお願いしなさい」

清水志津子は一年前に夫と離婚している。それ以後は松岡の実家近くに一軒家を借りて住んでいる。

清水紀夫は根岸と光子を交互に見て「お願いします」と頭を下げた。

「何か不足しているものはありますか？」と根岸は訊いた。

「ありません。充分です」

「取調べで不本意な所はありませんか？」

「まあ……」

「夜は何時頃まで？」

「夕食後、九時頃だったり、一〇時までかかることもあります」

「いいたくないことはいわなくてよいですから、――いいたくありませんと、はっきりいってください。記憶があやふやな時なんか特にそうです。いったことは記録に残ります。――いいですね」

「はい」

「亡くなったお友達とは長い付き合いなんですか？」

「ええ。一〇年以上の付き合いです。出身地が野津原で、小・中学校も同じですね。勿論同時期ではありませんけど。そういう関係で製鉄所に入ってから親しくなった」

「三百万円というのはかなり高額ですけど、借用証書は？」

「勿論。返済計画も五年で、無理のないよう年六〇万円ということで、ボーナス時に」

「それでも余程信用がないと。金融機関でも厳しく稟議される金額を、よく貸しましたね」

「そのことで警察からも色々勘繰られて……でも担保というほどでもないですけど、彼の車を、セルシオの四年落ちですけど、それをもたらうことに。一筆書いてます」

「でも、滞るようになった」

「ええ。一年分。少し厳しくいったこともあります。でも、殺したりは、絶対してません」

「わかりました。その意思を貫き通してください」根岸ともみは少し考えてから訊いた。「亡くなったお友達は――これはいにくいことかも知れませんが――顔に赤い色を塗ったり、そういった変わった様子は前にありましたか？」

「……いえ。でも……」

「でも何です？」

清水紀夫は周りを見回す素振りをしてから、声を落としていう。

「足の指を赤く塗っていたのは見たことがあります」

「そのことは警察には？」

「まだ、いつてません」

「どうしていわないのです？」

何か隠してるなど、根岸も光子も思った。母親が傍にいることもあるし、このことは日を改めて訊くことにした。

前に続く

翌日の朝、一〇時の休憩の時、根岸ともみはいった。

「明日から井川拓馬という若い先生が手伝ってくれることになりました。年齢は三二歳。司法修習を終えたばかりの新人の先生で、大阪暮らしが長いそうだけど、故郷に骨を埋めるつもりで帰って来るそうです」

大きなテーブルに陣取ってコーヒー・紅茶を飲んでいた遼子も光子もトシ子も、唐突な話に啞然とした。ボス弁は弁護士会館から帰って来たばかり。

「えーっ」と光子。

「大分の人ですか」といって東トシ子は席を立つ。

ボス弁にコーヒーを入れる為だ。フットワークが軽いのが取り得の女。

「中津市相原って所らしい。県北になるのかな？」

「福岡県との県境ですよ」

「急な話だわね」と遼子。

「急ついでで悪いけど、今晚、歓迎会を兼ねて夕食をともにしたい。みんな都合はどう？」

根岸を含めてみな相手のいない孤独な女、都合なんか訊くまでないのである。

「どこでするの？」遼子が訊く。

「都町のフグの店が近くていいと思う」

遼子は複雑な顔をした。（もしや？）と思う。

「机はどうすんのよう？ もういっぱいじゃん」

「井川先生には遼子さんの部屋に入っていたたく。事務も二つに分離して、社名も『根岸・井川法律事務所』ということにする」

「それって別会社ってことなん？」

「そういうわけでもない」

「そういうの、今流行ってるんだよう」トシ子が現れて、ボス弁の前にコーヒークップを置きながらいう。

光子は浮かない顔をして、「それならトシちゃんの方が、年齢的にいっていいんじゃないの。――その先生、独身？」

「そう聞いている。弁護士会の福祉事務局長の紹介なんだ」

「だったら、年齢的にも、お互い適齢期でもあるし、トシちゃん相手いないし、ちょうどいいじゃん」

「どういう意味よ。それじゃわたしが相手いなくて困ってるように聞こえるじゃない。遼子さんだってヤモメだよ」

「ふふふ」根岸は苦笑して、「じゃ、そういうことだから、夕方七時に都町の『ふく屋』に集合」といってコーヒーに口をつけた。

遼子はやはりそうかと思った。

光子はどうせなら夜桜でも見ながら平和公園辺りですればよいのにとと思う。それに魚より肉の方がいいと、不満気な顔であった。

東トシ子は何着てこうかと考えている風だった。

七時には『ふく屋』の二階六畳間に設えられたコの字型の席に、遼子に光子と、東トシ子が向かい合って座っていた。それぞれそれぞれに気を配った衣装で。

がしかし、床の間を背にして座るべきご両人がまだ姿を現さなかった。先付けはそれぞれの前に並べられている。

東トシ子はモカブラウンの長袖シャツに明るい色合いのスカートという、意外とシンプルな衣装ですまして座っている。夜はまだ冷えるので千鳥格子のジャケットも持参、横に置いてある。

光子の方もミント色のTシャツに白っぽいパンツというカジユアルな格好で、母親の遼子だけが、何だか格式ばった黒っぽい地味な衣装だった。

やや暫らくして、根岸ともみと井川拓馬が入って来た。

長身でスタイルのいい根岸のあとに続く男は、上背のあまりない風采の上がない中年太りだった。

けど、正面から見ると、つり上がり気味の目に信念めいた光を宿
していて、軽んじられないと思わせるものがあつた。

腰を下ろす前に、根岸が一人ひとりを紹介した。

「事務員さんの榊原遼子さん、そして、助手をしてくれている、そ
の娘さんの光子ちゃん、まだ一九、来年が成人なんだよね。それか
ら、こちらが、同じく事務員さんの、東トシ子さん」

「井川拓馬といいます。よろしくお願いします」

両名は上座に腰を下ろした。

仲居が二人で忙しく飲み物と料理を並べる。

ヒレ酒が井川と遼子に振舞われ、ほかの者は――根岸ともみは酒
を飲まないからジンジャエール、トシ子と光子はウーロン茶で、乾
杯した。

この場所は、かつて夫の城島竜二とともに、今日のように根岸と
もみと初顔合わせしたところである。年老いた方の仲居はその時の
仲居だった。遼子は感慨深気に見回す。

仲居も覚えていて、根岸ともみと遼子を、親しみをこめて見た。

根岸ともみは、そんなことは忘れてしまったかのように、知らん顔
で、誰もいない正面を向いて、ジンジャエールを飲んでいる。

「大学はどちら？」と、遼子が仲居に会釈してから、井川拓馬に訊
いた。

「関学です。卒業して商社に勤めてましたんですけど、何んかしっ
くり来なくて。急に思い立って、司法試験の勉強を始めたゆうわけ
ですわ。いやあ、苦勞しましたわ」

「何回目で合格されたんですかあ？」トシ子が横から質問した。

「三回目でようやくですわ。もし、それで駄目ならもう中津に帰っ
て、百姓でもしようか思っていましたんやけど、運よく引っ掛かりま
してん」

「それから、どなたにも付かずに？」遼子が訊いた。

「いえ、吹田の矢田恒之先生の事務所で半年ほど働かせてもらいま
したんやけど、どうもしっくり来なくて」

チャランポランな男でなければよいがと、遼子は思った。顔はそんな風な顔はしていないけど。

光子は急に心配になって根岸に訊いた。「見晴台案件はどうなるの？」

ボーと前を向いて空ろな根岸は、魂を呼び戻されて「何？」と訊く。「何かいった？」

「――もう！」

「見晴台はどっちがやるのか――ってことだね、光子ちゃん」

「あれは――引き続き光子と、井川君でやってもらおうわ」

「先生は？」

「わたしは来週からちよつと名古屋に出張してくる」

「何しに？」

「ちよつと、光子、何てこと訊くの！ 先生は先生でお忙しいんだから」遼子が窘めた。^{たしな}

（どうだか）光子は心の中で毒づいた。

「見晴台案件って、今騒いではる事件のこと？」と井川拓馬が訊く。

「そう」トシ子が答える。

「へえー。面白そうな事件じゃないですか。あれをぼくにもやらせてもらえるんですか。やったあ！」

やはりどっか軽いところがあるなと遼子は思った。

そしてまたしても根岸ともみは、清水紀夫の勾留期限が切れるギリギリまで、帰って来ないことになるのである。

その一四 イソ弁・井川拓馬

週の頭から光子は井川拓馬と行動を共にすることになった。残された日にちを考えるとぼやぼやしてはられない。

——いつもやきもきさせられて、損な役回り——ばかり！

と、光子は朝からご機嫌斜めであった。そのせいばかりでもなく、家から出がけに母親とひと悶着あったのである。来年の成人式に何を着て出席するか、着物にするか洋服にするかというバカバカしいことで。

いや、それ以前に、胸に妙なざわめきがあって、やきもきしているのは、そのすり替えにほかならなかった。

「どしたんです？ えらい機嫌悪そうですね。アメ食べますか？」
「いって井川が助手席からアメを差し出した。「いらいらした時にはこれが一番ですね。黒砂糖アメ」

事務所で事件の仔細を説明したのち、これからどうするかを協議した結果、井川の発案で、死亡した守山孝明の人物像を掘り下げてみようということになって、彼の家の周辺の聞き込みに向かっているのである。

井川は勢家町の春日神社の裏手にアパートに見つけて——実際は根岸ともみが前もって探しておいたものだった——日曜日に光子らも動員されて引越をすませている。男の独り身、驚くほど荷物は少なかった。、軽トラ一台で運ばれて来ていた。

「ありがとう」

光子はアメを受け取って、口に放り込んだ。

「ね？ 黒砂糖の甘さはひと味違いますやろう？ 学生時代にあっちこち放浪して歩いて、沖縄でサトウキビ畑も見たんやけど、ざわわ、ざわわ——って歌、ありますやろ。人間の愚かな営みなんかに関係なく、太古の昔から、風は吹いてんねやなって気イしましたわ」

初めて見た時は眼がつり上がっていて、やはり司法試験に合格するような頭のいい人は顔つきからして違うなあーと思ったけど、あれは精一杯眼を見開いていたからだろうか。今は眠たそうにマツゲだけの線になっている。

「井川さんって、弁護士会の事務局長さんという関係なんですか？」

「何も関係ありません」

「え、でも？　じゃあ、どうしてうちの事務所に来るようになったの？」

「ああ、それは、県の弁護士会に登録したい旨伝えた時、事務局長の黒田氏が、根岸ともみ事務所から若手の弁護士の募集が出ているけど、どう？　といわはるから」

「え？　募集が？」

「だいぶ前から出てみたいでっせ」

そんなに自分はあてにされてないのだろうか、光子は思った。それとも自分がもっと自由に歩く時間が欲しかったのか。そんなに仕事が多くあるわけでもないのに。

「ぼくとしては地元の中津の方がよかつたんでっけどね」

光子はアメ玉をガリガリと噛み砕いた。

「あっ、光子ちゃん！　噛んだらあきませんがな。アメは口の中で転がすように舐めるもんでっせ。噛んだらいちどきになくなってしまいます。学生時代のぼくなんか、アメ玉一つで、一日空腹を紛らわせたことありますんやで」

（ほっというよ！）と光子は乱暴にアクセルを踏み込んだ。

前に続く

見晴台から眺める景色に井川拓馬は子供のように歓声を上げた。

「いやあ、ええ景色ですなあ……」

ごみごみした都会に住んでいたから、特別に感慨深いものがあるのだろう。晴れの日ならもっとよいのだが、生憎薄日がさす程度の天気で、おまけに黄砂でけぶってもいた。

車は崖つぶちに停めて、そこからは歩いて向かうことにした。車でも行けるけど、団地の中は道が狭く、急勾配でもあり、駐車するスペースがない。まさか、子安観音の駐車場に停めるわけにもいくまい。守山孝明の家はそのすぐ下にあるのだが。

「おお、あれですか？」息切れしながら井川がいう。「独身の家には勿体ないような家ですなあ。あれが一五〇〇万とはまた、中古とはいえ、えらい安いなあー大阪なら二、三倍はしますよ。ここはまた一番高い所にあるだけあって、素晴らしい眺めやないですか……こら安い買い物やわ」

門にはまだ黄色い規制線が張られてあった。家は洋館風の二階建ての造りである。庭の手入れはしてないので、庭木はのびのびと枝葉を広げている。ガレージにはシルバークレーのセルシオが駐車されてあった。

二人が家屋敷を眺めまわしていると、右下の家から老婆が出て来て不審そうに見る。

そうこうしているうちに下からぞろぞろと年寄り子供が集まって来た。

「あんたどう、何事な？ そこん氏はおらんで」と老婆の一人が訊く。右下の家の老婆である。

「ええ、わかってますう」井川が答えた。「何や事件に遭われたそうですねえ」

「そうじゃ、殺されたんで」

「犯人は捕まったそうですけど、よくここに来てたんですやろか？」
「ああ、よう見かけたで。――でん、あん氏がのう……」

「そんな感じには見えなかったですか？」

「うん。二人とも仲が良かった、何時間もそこじ、夕涼みしながら、楽しそうに話しよった」

「うんにゃ」といって別の老婆が割り込んで来た。左下の二階家の老婆である。「わしゃあ、見たで。二人が観音様の駐車場じ、ケンカ腰じ話しよんのを」

「ほかにも来客はあったんですやろか？」

「そうじゃなあ、家に上がり込むような者は見なかったなあ。玄関先じ話すような客なら何遍か見かけたけど」右下の老婆。

「うんにゃ、わしゃあ、見たで。若いオナゴが家に入って行くのを」左下の老婆がいつそうしやしやり出た。「そちかり、二人の女が一緒に出ち行くのを」

「若い女性の客は二人連れだったんですか？」

「いんねとなあ、一人ちゃ」

「でも今二人出て行ったと」

「――うてあいなんなちゃ。こんバアはそげんこついうんじゃ。あることないこといいふらしち歩くんじゃ」右下の老婆がチャチを入れた。「大方、そこん氏んハアジヨ〈母親〉と娘ん子んこつう、いよんのじゃろう」

「また、オサキがすもしれんこつう。こん目じしつかり見たわい」

「何時頃のことですやろ？」

「決まっちゃんじゃねえか。丑^{うし}三つ時じゃ」

「丑三つ時いうと、夜中の二時頃ですやろ。そんな真夜中にですか？」

「ああそうじゃ。決まってそうじゃ」

「というと、何度も見たということですか」

「三回見た」

「そうすると、おバアさんはそんな時間に、この一段と高い所で何

してはったんです？」

「家二階の窓から見張ったんじゃがね」

老婆は自分の家の二階窓を指している。

「何をです？」

「そんな女が出て来るところをじゃ」

「なるほど。——うゝん」

右下の家の老婆が近づいて来て、井川に耳打ちした。「痴呆が入
つちよるけん、まともに聞いたらいけん」

前に続く

近所の聞き込みからは、それ以上の情報は得られなかった。夫婦共稼ぎがあたり前の時代である。やはり夜でないと、昼日中はどこでも老人と子供しかいない。というか、子供でさえ、今や日曜祭日以外は学校や幼稚園や保育園に行っていて見当たらないのが現状である。団地内の公園にも人っ子ひとりいなかった。

「どう思います？」と車に戻りながら井川が訊いた。「ぼくらはいきなり大変な手掛かりを掴んだのと違うやろか」

浮かぬ顔で光子は、「だといいいけど……認知症のお婆ちゃんのいうことだから」と、いつになく悲観的だった。（そんなに甘いもんじゃないわよ、タツの時はあんなに苦労したんだから）という思いがある。けど、それにもまして、黄砂にけぶった景色のように、気持ちちがブルーなのだ。

しかしふと、清水紀夫の言葉を思い出した。

「……そういえば守山孝明が足の指を赤く塗っているのを見たって、この前の面会で清水紀夫がいった」

「え？　ほんまに。それやったら、もう決まりでっしゃろ」

「女装趣味ってこと？」

「それ以外に考えられますか？　顔を赤く塗るゆうのはどういうわけか知りませへんけど」

「でも、指っていてた……けど、爪のことをいったのか。……若い女性というのも、女装した男？」

「そういうことになりますな。もしかして、それが清水だったりして」

「それはないわ。だとしたら自分からそんなこといい出す筈ないもの。それに、どう扮装を凝らしたって、あの四一歳の清水紀夫が若い女性には見えないと思う」

「それやったら、もしかして清水は守山の秘密をもっと知ってるん

と違いますか」

あの様子から光子もそんな気がした。友達の名誉の為に口をつぐんでいられるのかも知れない。

「それにーひょっとして、清水に訊けば、その若い女性ーじゃなかった女装の男のことも、思い当たる者がいてるかも知れませんか。それほど親しい間柄なら。これから面会に行つて確かめましょう」

「ちよつと待って」といつて光子は肩に掛けたシヨルダーバックからケータイを取り出した。

今日は春めいたカジュアルな格好である。スカートを穿かないのはいつもと同じ。白いブラウスに、ジーンズも卒業してカーキ色のスラックス。その上から薄緑色のカーディガンを羽織っている。

井川拓馬の方は野暮つたいシャツとズボンにジャケット。色はほぼウグイス色に統一している。

地検の番号は登録してあるので、すぐに係りの者が出た。

「根岸ともみ法律事務所の者ですけど、東浜検事お願いします」というと、一分と待たずに検事が出た。

「あ、検事さん、光子です」と、馴れ馴れしい。

指揮書を貰いに行った時から打ち解けて、そうなると体躯会系の図々しさが前面に出る。

「今日これから清水紀夫の接見できないかなあ」

井川は、検事にそんなタメ口を利いていいのかという顔を寄せて聞いている。

「ええー、そうなのう。じゃあ、それでいいから、お願い」カチャリとケータイを閉じて光子は澄ましていう。「取調べが午後三時で休憩に入るから、そのあと一五分間ならいいって」

「凄いなあ、光子ちゃん」井川はえらく感心した。

そうなると、それまでの時間をどうするかである。お昼まではあと一時間半あるし、午後からも二時間ばかり空く。

そこで思い立ったのが、変態学ぶんだいの教授。早速、分大に電話して野

島教授にアポを取る。

これも午後から一時間くらいなら空くというので約束を取り付けた。地検に寄って指揮書をもらい、事務所で弁当を食べて、それから旦の原に向かえばちょうどよい時間になる。

前に続く

「へー。大学の先生がねえ。——うふふふ。でも案外そうなんと違いますか。人間十人十色ですさかいに。そら色々ありますよ。女装趣味にしたって、大阪にはそれ専門のクラブが幾つもありますからねえ」

「それって変態なの？」

「まあ、変態っちゃ変態やけど、そのほかは全然ノーマルですからねえ。男装趣味の女性クラブもありますよ」

「えーそうなの」

「都会はそういうの多いですけど、やはりどこにでもいてるんですよ。まさか都町にそんなクラブはないやろね」

オスカルモードの根岸先生はほとんど男のようだけど、先生も男装趣味だろうかと光子は思った。でも、そんな筈はない。それじゃあ、オハラモードの、あのイヤラシイほどに妖美な先生は何なのかい——ということになる。

今は旦の原の大分大学に向けて国道10号線を走っているところだった。運転しながら、母の遼子がこの間ふと漏らした言葉を思い出した。

——先生はいうにいわれない問題を抱えているのよ。

そういえば、ずっと以前にも、母が「先生も、女なんだから」といったことがある。先生が女なのはあたり前である。なのにわざわざそんないい方をしたのは、今考えればおかしい。も——というのは、うちらと一緒にという意味と取れる。わざわざそんな言い回しをする必要がどこにあるう？

「——どうしました？」

「——え？」

「えろう考え込んで」

「別に」

光子は気付いていないけど、今回妙に胸がざわめくのは、かつて、父親の法律事務所に見習いとして根岸ともみがやって来た時と、今回井川がやって来たのが、状況が似ているからである。

そして同じように、根岸は慌ただしくどこかへ出掛けて行った。父親と同じように。きっとこれからもちよくちよく出掛けては――そうしてしまいいは帰って来ないことになるのではないか――もう何も失いたくない――という無意識の恐れ、深層心理の表れだったのだ。

それから光子は押し黙ったまま大学の守衛がいる門の所までやって来た。そこにはこの前のニキビ面の学生が待ち構えていて、教授が待つ学舎に彼らを案内した。

野島教授は今回は白衣ではなく、グレーの背広姿でスチール机に向かっていた。肘掛回転椅子を回^めらせて、入って来た二人を相変わらず長い顔で、アゴを引いて上目使いに見た。

「こちらは事務所の井川弁護士です」光子が井川を紹介した。

「井川と申します。お世話になります」

「まあ、掛けなさい」と野島教授はいった。

二人はそこらにあるパイプ椅子に腰掛けた。六畳くらいの広さの部屋に、書架や、ゴチャゴチャと色んなものがあって、スチール机もほかに三つばかりあるけど、誰も座っていないかった。

「何か、掴んだのかね？」

「はい」

「あ、そう。早いね」

「それでまた、先生のお考えを――」

野島教授はじっと光子を見つめた。

「あのう……死んだ守山孝明さんですけど、どうやら女装の趣味があつたらしいんです」

「ほう」

「殺人容疑で取り調べられている清水紀夫がいうにはですね、守山さんが足の爪を赤く塗っているのを見たことがあるって。近所のお

婆さんも、女装した男と一緒に女装した守山さんが深夜に出掛けるのを見たっています。でもこのお婆ちゃんは少し痴呆の気があるらしいですから、信じてよいものかわかりません。三回見たといっております。自宅の二階からです。しかも決まって丑三つ時にーずっと見張っていたというんです」

野島教授は上目蓋に押し潰された垂れ眼から光子を見つめて、「君、旧姓は城島だね」といった。

「ええ、そうですけど？」光子は怪訝な顔をした。

「ちょっと調べさせてもらったんだ。やはりそうだったね。初めて君を見た時、その眼差しがねー」

「父をご存知なんですか？」

「ああ、知ってる。広島地検におられた時が最初だったかな？ それから各地で三、四度ばかり一緒に仕事したことがあるーといっても、ぼくは検死が専門だから、言葉を交わすことは滅多になかったけど。ーそうか、それで、司法試験の勉強をしてるんだね」「いえ。わたし、頭悪いから、それは無理。警察官志望でしたけど、父や叔母のことがあって、何度も挑戦しましたけど、駄目でした。だから今は根岸先生のお手伝いをさせていただいています」

「あ、そう……」

「それで先生、それだけの情報なんですけどーあ、それから清水紀夫に面会した時の様子では、ほかにも何か知っていて、隠しているみたいでした。死んだお友達の名誉の為に。」

ーですからこれから、三時に面会して、このことをぶつけてみようかと。その前に先生のご意見をお聞きしたくて。このままでは清水紀夫は殺人容疑で起訴されてしまいます」

野島教授は、「その一緒に出掛けた女装の男というのが清水紀夫ということとは考えられないのかね」と、当然の疑問を口にした。

「ええ。それは考えにくいと思います。自分からお友達が足の爪を赤く塗ったことを漏らしてますし……」

「あ、そうか。そうだなあ。大したもんだ。ウジャウジャいた警察

官でさえ掴めなかったことを、よく掴んだね。いやぼくもね、顔を赤く塗ってるところから、何かあるなとは思っていたんだーうーむ」と教授は腕を組んで考え込んだ。

眠そうな顔で五分は考えてから口を開いた。

「ぼくは心理学については門外漢なんだ。それを前提にいわせてもらえば、顔を赤く塗っているところから当初ぼくは、とある小説の模倣ではないかと思ったがね……そうか。あれは物質化だったのかな？」

「物質化？」井川が繰り返した。

「うん。突き詰めると人間生命も物質に還元される。炭素元素と化してしまうんだがーその先がまだあるということは置いておいてだよ。哲学や宗教も門外漢だね。タバコモザイクウイルスのように、生物と無生物〈鉱物〉の間を、行ったり来たりする厄介なのがいるからねえ。

顔を赤く塗ったのは物質化の象徴かも知れないね。お面を被るのと同じ。そして、タバコモザイクウイルスじゃないけど、生死の境目を行ったり来たりしながら、禁断の、ドーパミンなどの快感物質を不法に享受していたんだねえ」

「はあ？」と井川。

光子は、（ああ、駄目だわ、来るんじゃないかと）と後悔した。

この先生も痴呆が入りかけている。

「それはさておき、君らのいう女装趣味だがね。それは、まず受精卵にまで遡るとしようか。それが子宮に着床して、細胞分裂しながら胎児に育ってゆくんだが、初期の胎児の性器はーいや、これからは純粹に学問だから、若い女性の前でも憚らずいわせてもらうよ。だからその初期の胎児の性器は未分化でね、どういうわけか、女性器然としているんだな、これが。そこから遺伝子の作用によって男性ホルモンのアンドロゲン、女性ホルモンのエストロゲンが放出されて、男性化、女性化が生物学的に始まるんだ。

そして出産。分化した性器に従って心理的にも男性化、女性化が

進み、第二次性兆期を経て、男女に成るってわけさ。発達心理学についてもぼくは門外漢だけどね。憚らずにいわせてもらえば、女装趣味は心理的未分化への回帰じゃなからうかと思うんだ。フェチシズムの観点から、色々論ずる者もいるけどね。捨て去りしものへの郷愁というか。

未分化への回帰といえば、カリブ海のある島では、第二次性兆期に入った少女たちが軒並み、それまではどこから見ても女だった少女たちに、春になると雪を割ってツクシが頭をもたげるように、ペニスがニョキニョキ生えて来て、雨後のタケノコのようにあれよあれよと生長し、島の女の子がまるごと男の子になってしまいうらんだ。亀なんかだと、砂の中の温度で性別が決まるらしいけど、インドにもなんかそんなところがあるらしい。

その道のタイトがいうからウソではないとは思っただけだね。ぼくはこの眼で見たことしか信じないタチだからさ、信じる信じないは君らに任せるけどね。ぼくは生きた人間のいうことより、死んだ人間のいうことを信じる方だからさ」

光子と井川はあきれて顔を見合わせた。もうこれ以上何も訊くことはない。一刻も早くこの先生から離れないと、頭がおかしくなりそうだった。

丁重にお礼をいって立ち去ろうとすると。

「ああ、君ねえ。九月にまた警察官募集がある筈だから、もう一度受けてみなさい」と光子にいう。

「でも、また、どうせ駄目だと思います」と光子は力なくいう。

「いいから、騙されたと思って受けてみなさい。願いが強ければ、時の氏神というやつが必ず現れてね。願いは叶うものなんだよ」

「はい」と光子は適当に答えた。

この教授がかつて、父・城島竜二と叔母・城島民子を窮地に陥れた事件の検死をし、そして、父によって遺棄された謀殺人・青山姪^{おみ}臣へ根岸ともみの一覧性双生児の弟の白骨死体を検死したことも、無論、知る由もなかった。

あの時教授は警察庁に籍を置く警視長だった。青山姪臣を検死した時に、その骨の形状に疑義を抱き、遺伝子検査まで試みたけど、XY男性という結果が出たので、それ以上深くは追求しなかった。（インチキ教授！）という思いをまた強くした光子だが、野島教授の方は、（血脈というのは侮れないなあ……風貌はそうでもないけど、あの眼差しは城島検事そのものではないか）と思いながら戸口の所までついて行って、ラボから見送ったのである。

そして、また頭をもたげた疑義を晴らすべく、一覽性双生児の姉、根岸ともみに一度会ってみようと思うー。

その一五 容疑者・滝田学

接見時間はわずか一五分しかない。光子は慌ただしく清水紀夫に井川弁護士を紹介した。

「井川拓馬いいいます。まだ新米弁護士ですけど、ぼくを信じてぼくのいう通りにしてください。まず最初にこれだけはいっておきます。自分の身は自分で守るゆうことです。ぼくらはお手伝いすることしかできません。よろしいですね」

「はい」

清水紀夫は今回は身だしなみを整えていた。ヒゲもちゃんと剃っている。井川の顔を不安の色を滲ませて見る。

「ゆうときますけど、検察に起訴されたらおしまいだと思ってください。日本の刑事裁判は、結果からいえば、検察官が裁いているようなものですよ。検察が起訴した被疑事件の九九・九パーセントは有罪になってますう。求刑の二、三割落ちゆうところで量刑が決まります。検察官も裁判官も法律のプロでっさかいに、お互いの力量を信じてます。手続きを遅滞なくスムーズに運ぶことが、彼らの最大の眼目であり、職務であり、それが人事考課につながります。無罪判決を出されたり、逆に検察に控訴されたりしたら、人事考課が下がり、両者の出世や俸給に即響くわけです。裁判官はわかってくれるだろうなんて思ったら、大間違いですよ。真実なんて、当事者以外誰もわかりやしません。有罪にするために集めた証拠から、推量するしかないんです。よろしいですね？」

「は、はい」清水は井川をまじまじと見つめた。

「ではお訊きします。守山孝明氏には女装趣味がありましたね？」

「は……はい」

「それで、その手の同好の士が集まるクラブかサロンのようなものがあった、真夜中に出掛けていた」

「……そこまでは知りません」

「そうですか。では彼の交友関係の中にそれらしき者はいてませんか？ 彼の家に来て上り込む程度に親密な関係の友達」

「……」清水は眼を細め、半ば口を開けて考えた。

「いいですか、人のことを考えてる余裕なんてありませんよ。このままだと間違いなく起訴されます」

清水は上を向いたり下を向いたりして考えている。時間がないのにと、光子はじれったく思う。

やがて決心したように清水紀夫はいった。

「滝田という若い男が、多分そうだと思う。守山は、人付き合いはよい方ではないので、家に上がらせるほど親しいのは、ぼくをおいて、そいつぐらいなものだと思う。彼の家で一度だけその男と顔を合わせたことがある」

「滝田は滝の田んぼですね。下は？」

「わかりません。彼がそう呼んでたのを聞いただけで、名字もそんな字かどうか。でも、住んでる所は多分、大在の文理大の近くだと思う。もしかして文理大の学生かも知れない。ケータイで話している時、よく大在とか文理大とかいう言葉が出た」

「どういう容姿です？」

「小柄で顔も小さく女にしたら可愛いだろうなというような感じでした」

「そうですか。ほかに何か参考になるようなこと、ありませんか？」

「車——その車の車はセレナのホワイトだった」

「セレナのホワイトですね。ほかには？」

「言葉は沖縄弁じゃないかと思う。サーーという語がやたら語尾に付いてた」

「なるほど。これは参考になります。ほかには？」

「まあ、そんなところです」

清水は重い荷物を下ろしたのか、気付かれないように「ほーっ」と安堵の息をついた。額に汗が光っているのを、光子はハンカチで拭いてやれるものなら拭いてやりたいと思った。

だが、井川にとってはこれからが肝心だった。

「ところで、守山氏はああゆう死に方をしはったんですが、あれについてはどう思われますか？」

「詳しい事情がよく飲み込めないんだけど、ぼくが殺してないということは、ほかに誰か真犯人がいるということですね」

「自殺か事故ではないかゆう話もあるんですよ」

「自殺はないでしょう。まずないと思いますよ。だって、ぼくに借金があるんだから。あいつはそんなやつじゃないですよ。それに事故？　――とはどういうことかな？」

「それは話が長くなります。その話は今度にしましょう。では殺人だとして――実際、警察があなたに対する殺人容疑の根拠の一つとしてるのが、ワープロ文字で印刷された“ロシアより愛を込めて”という置き文ですよ」

「ええ、そのことで随分変な風に勘繰られて――でも、ぼくのパソコンから打ち込まれ、ぼくのプリンターで印刷されているらしいからね」

「そうなんですってね。どういふことですよ」

「ぼくもわけがわからない」

「あなたのパソコンはどこに置いてあったんです？」

「母と同居している松岡の家。母が離婚したので、ぼくが転がり込む形で、五年前に同居するようになった。放っとけませんからね。母は病弱だし。父はぼくを忌み嫌ってた。ぼくも父が嫌いでしたから、その点はよかった」

「あなたもバツ一でしたね」

「ぼくは二五で結婚して三〇で離婚した。子供はいません」

「じゃあ、松岡の家でお母さんと同居するまでは、五年前まではどこにいらしました？」

「明野のマンションに。これは売りました。それで守山に貸すお金があったんです」

「そのマンションに守山さんは出入りしたことがありますか？」

「そりゃもう、しょっちゅう。彼も両親と近くのマンションに住んでましたからね」

「はいはい。なるほどね」

ここで時間が来てしまった。係官が「はい、時間ですよ」といって部屋に入って来たのだ。これが一般の面会者だと、係官も横に着座してメモを取ったりする。

前に続く

中島4条の事務所に帰って昼食。

六畳の休憩室は賑やかだった。真ん中に二メートルX三メートルの木製テーブルがあって、背もたれのある椅子が左右に六脚あり、それに事務員の遼子とトシ子、反対側に井川と光子が座り、左斜め前方――給湯室への入り口左――の棚の上にある21インチのテレビを観ながら弁当を食べる。

遼子と光子は手製の弁当。井川とトシ子の独身組は配達の弁当だった。

「それで、うまくいきそうなの？」と遼子が井川に訊いた。

「鬼が出るか蛇が出るか。まずは滝田という男に会ってみるしかありません」

「偉い先生が事故っていつてるんだからあ、それを証明する方が早いんじゃないのかなあ」トシ子がいう。

「そんなのどうやって証明します。確かにその手の事故は何件か起きてますよう。けどね、そんなの本人しかわからないじゃないですか。石部金吉の裁判官がですよ、そんな特異なことを考慮するわけじゃないじゃないですか。その前に検察官に笑われてしまいますう」

「じゃあ、井川先生は真犯人がほかにいるっていうんですか？」あくまでトシ子は納得しない。

「ええ、勿論です。滝田という男がカギを握ってるような気がします。その男に会えば何らかの手掛かりが得られる思いますう」

「光子ちゃん、どう思う？」トシ子が光子に同意を求める。

「わかんない」光子はあっさり答えた。「でも、あのワープロ文字の件はどうなるわけ？」井川に訊く。

「あれは清水紀夫がいつてましたやろ、五年前のマンション時代には、しょっちゅう守山孝明が遊びに来てたって。その時隙をみてーというか、清水がいない時にパソコンのワードに打ち込んで印刷

したゆうことでっしやるなあ……」

「何の為に？」トシ子。

「そらわかりまへん。それを何者かーといっても守山の家に遊びに来てたんは清水と滝田くらいなものでっさかいにー滝田が見つけて」

「清水紀夫に罪を着せる為にーってゆうのう」トシ子は今度は遼子の方を見る。

弁当を食べ終わってお茶を飲んでる遼子は、「その滝田って子を見つけられるといいけどね」という。

「午後から大在に捜しに行きましよう」井川が光子にいう。

「手掛かりはあるの？」遼子。

「ええ、幾つかあります。まず、文理大学の事務局に電話して、沖縄出身の滝田ゆう学生がいてへんか訊ねますわ。いてへんようだったら、その辺のアパートに聞き込みをかけ、それでもつかめないようであれば、国道197号線沿いから、セレナホワイトが通りかかるのんを待つ」

「何だか大変そうねえ」と遼子。

「そら大変ですよ。いったん嫌疑をかけられたら、巨大な国家権力の物量作戦を相手に、被疑者には捜査権を持たない我々弁護士しか味方はいてへんわけですから。予算ありませんしね」

「夜中までかかるのう」トシ子が心配そうに訊く。

それは母親の遼子としても心配である。

「徹夜になるかも知れまへん。車の中で食べるもの用意していただけると助かりまっけど」

「それはちよとねえ」とトシ子が遼子を見ている。「嫁入り前の娘と、独身の井川先生が車の中で夜を過ごすなんて」

「あははは。そんな心配いりません。人畜無害の井川で通ってまっさかいに」井川はいよいよマツゲだけの眼を細くして笑った。「アメちゃん食べますか？」

と、黒い包み紙に包まれた黒砂糖アメを二人の前に投げてよこし

た。

前に続く

物事がうまく行く時というのは万事が思い通りに運ぶものである。文理大の事務局に電話すると、確かに滝田という苗字の学生はいた。しかも沖縄県出身というからほぼ間違いないものと思われる。

井川が包み隠さず事務所の名前を出して、真っ向から問いかけたので、事務局員も個人情報に配慮することなく、工学部二回生の滝田学であることを明言したのであろう。「呼び出してもらえませんか」と厚かましくいう井川に、ちよつと待ってくださいといって間を置き、「今、ゼミの最中ですから、二〇分後にもう一度かけ直してください」といった。

そしてきつかり二〇分後に電話すると、滝田学本人が電話に出た。悪びれた様子はない。そこで、夕方五時に滝田が指定する喫茶店で待ち合わせる約束を取り付けた。

何というあざやかなことであろう。オフィスにいて何億もの商品売り買いして、3パーセントのペーパーマージンを稼ぐ商社マンの手際よさ。

風采の上がらないとぼけた顔の井川拓馬であるが、遼子もトシ子も見直したようである。性格も悪くはなさそうだし、これは存外頼りになる先生かも知れない。とりあえず今日の夜の心配がなくなつて、二人とも安堵したようである。

光子の方は違った。アメ一つで騙されてはいけない。細めたマツゲだけの眼から母・遼子を見る眼が気に入らない。三二歳まで独身というのがどうも一癖ありそうで油断ならない。母もトシ子もアメ玉一個ですつかり無防備になっているけど、友達の親は仕事仲間に缶コーヒー一個奢ってもらっただけで、三〇万もする健康器具を買わされる破目になったというのだ。

「さて、それでは光子ちゃん、時間調節に中央署にでも行ってみますか」

「また接見？」

「違いますがな。滝田に会う前に、滝田に関する情報を刑事から仕入れておくんです」

「え？　なに？　警察は滝田のことも取り調べてるってこと？」

「あたり前ですがな。当然ガイシヤの交友関係は全部調べてますよ。その中から清水紀夫が有力な容疑者として捜査線上に浮上したわけです。滝田学が容疑者にならなかった理由がある筈ですからね」

「それはそうだねえ」と遼子がコピー機のところから口を出した。考えてみれば、滝田は一度警察に洗われているわけだから、下手な小細工なんか必要なかったわけだ。手っ取り早く警察に訊けばもっと早かったのではーと思う。

「でも中央署の権藤ってゆう警部は、気が荒いから、気をつけた方がいいわよう」とトシ子が執務机からいう。

「ははは。そういうのはかえって扱い易いんです。そういうのに限って単純だったりして、怒らせたら本音が出ますさかいに」

「じゃ行こう」と光子はバカにされたような気がして、せっかちにいった。

「――何や？　滝田？　滝田学がどげしたちや」と、短髪凸凹頭の権藤警部は濁声でいった。

ちようと刑事部屋から出て来たところを掴まえたのである。当然井川は面識ないけど、光子はボス弁と清水紀夫に初めて接見した時に一度会っている。

向こうも覚えていて、「ねえちゃん、今日は何事かえ？」と向こうから声をかけて来たのだ。二人連れだったけど、井川が名刺を出して、「滝田学について少々お伺いしたいことがあるんですが」といったものだから、連れを先に行かせて、刑事部屋の応接室に案内されたのである。

「滝田学については何の嫌疑もなかったんでしょうか？」と標準語で井川が訊く。

「ああ、何も？」と怪訝な顔で榎藤警部。

「アリバイはどうでした？」

「アリバイ？ どげえしちそげんこつ訊く？」

「ええ。それが、依頼人のいうにはですね。自分は事件に関係してない、無実だというんです」

「そらみなそういう。自分から、やったちゅう者はおらん」

「滝田学について調べてほしい、いいよりますから」

「ふくん。まだそげんこついよんのか。往生際の悪いやつचनाあ、あいつも」

「ですから、わたしらも」

「わかった。わかった。滝田にアリバイはちゃんとある」

井川も光子も落胆の色で榎藤を見つめた。アリバイがあれば万事休すである。

「死亡推定時刻は、四月一四日の、午前五時から九時の間、その時間には滝田は大在一木の学生アパート『日南荘』105号室にちゃんとあった。同じ一階の107号室の桜井ちゅう学生が、日雇いのバイト仕事に五時過ぎに滝田を誘いに行き、それから二人は牧の五高建設まで滝田の車で行った。そこから高速道路の補修工事に湯布院まで出かけとるんじゃ」

「……」

井川に返す言葉はなかった。

「そのかわり、清水紀夫にはアリバイはなかったんですね」と光子が訊いた。

「ああ、清水紀夫は前の晩から夜釣りに行くといって松岡の家を出たまんま、あくる日、一四の午前八時二五分に坂ノ市のスタンドで給油するまでのアリバイがない。本人は関〈佐賀関〉の岸壁で夜釣りして、それから朝まで車の中で寝ていたちゅうが、証明する者は誰もおらん。それに一〇時頃にはガイシャの家の近くで近所の住人に目撃されちよる。本人は金の催促に行ったけんが留守だったちよいよるが」

井川はもう気持ちを立て直していた。

「あの“ロシアより愛を込めて”いう置き文ですけど、あのコピー用紙の指紋は調べはったんですよね？」

「勿論じゃ」

「どうでした？ 清水紀夫以外の指紋はありませんでしたか？」

「それはおまえ、ガイシャの守山孝明のもあったわさ」

「えっ？ それはしかしおかしいのと違いますか？」

「何がおかしい。清水がそれを見せ、守山が手に取って見た。それだけのこっちゃ」

「あ、そうか。なるほど。そういうことも考えられますね。滝田学の指紋はありませんでしたか？」

「おまえもしつこいやっちゃなあ。そんなもんあるわけないだろうが」

「そうですかあ。そうでしたら、滝田に守山殺しの動機は全くないゆうことになりますか」

「いや、動機はねえことはねえ」

「――え？ ほんまですか。そら何でっしゃろ？」

「滝田は守山から借金してた」

「ええーっ？ 守山は清水紀夫から借金して家を買いましたんやろ。なのに――いくらぐらいですか？」

「三〇〇万」

「えええーっ！ 何んですのん。それっやったら、清水から借りた金と同じ金額じゃありまへんか」

「そうじゃ。そっくりそれを又貸したちゆうことじゃろうな」

井川と光子は顔を見合わせた。それなら家は自己資金だけで買えたということではないか。

反論を見越して榎藤警部は先回りしている。

「資産状況からこっちもそんなことはわかっていた。けど、それでも清水紀夫の動機に変わりはない。アリバイもねえ。置き文も清水のもの。滝田にも動機はねえことはねえけど、ちゃんとアリバイが

ある。三〇〇万円くらいで人を殺すかちゅう問題もある」

「でも返済が一年分遅れただけですよ」

「清水にはそれ以外の動機の方が大きかったんじゃない。約束を破ったということより、自分が貸した金が、そっくり滝田に渡っていたことを知って激怒した。それに、滝田の存在自体が許せなかった。置き文がそれを雄弁に物語っちよるじゃろうが」

清水紀夫はなぜそのことを隠していたのだろうか。いや、それは警察の勘繰りではないか。

「又貸しされていることを清水紀夫が知ったゆうのんは、ほんまですやろか？」

「ああ、滝田がそういう。守山がそういよったちな」

「清水は？」

「清水が自分から重大な動機を喋るわけねえだろうが！」

権藤警部は太い眼を剥いた。やはり、迫力のある顔だった。

井川はすぐに話しの方向を変えた。

「滝田は三〇〇万円もの大金を何に用立てたんできやろ？」

「さあ、そこじゃ。そこが今一はつきりせん」

「それがはつきりせんていいん？」 光子が口を出した。

「何んちや」

ギロリと警部は光子を睨んだ。

「まあ、その辺はこれから滝田に会う予定になってますから、訊いてみましょう。いやあ、参考になりましたわ。助かりました」といって井川は席を立った。

刑事部屋を振り返りながら井川のあとを出て行こうとする光子に、権藤警部はいった。

「おまえ、城島元検事の娘らしいな」

前に続く

中央署から事務所に帰り、少し早めの一六時にエブリイで大在に向かった。

「……どこいっても、お父さんのことが出ありますなあ」つぶやくように井川がいう。

「ほんと。検察庁ならわかるけど、こんな地方警察の警部がどうしてパパのこと知ってんだろ」

「そら、みんな知ってますよう、公安職なら」

「井川先生も知ってたん？」

「あたり前ですがな。城島元東京地検特捜部検事のこと知らない者なんて、法曹界に唯の一人もいてません」

光子は驚いた。と同時に、悪を取り締まる検事が殺人を犯したからだろうか、それとも、最期があんな風に衝撃的だったからだろうか、と思った。

「じゃあ、井川先生も、パパを軽蔑するの……」

「何ゆうてますのや、誰が軽蔑しますかいな。城島検事はぼくらの英雄ですがな」

「え？　ほんとに？」

「今でも法曹界に信奉者はいっぱいいますよう」

光子は井川の顔を何度も見た。いつものマツゲだけの眼ではなく、ちゃんと見開いている。そういう顔は賢そうで、そして信念がこもったような瞳をしていて、少しだけイケている。

「どうして？」と光子は嬉しそうに訊いた。

井川はじつと前を向いたまま、それについては何も答えなかった。

滝田が指定した喫茶店には三〇分前に着いた。

国道197号線を一直線に大在まで行って、大在駅を過ぎ、文理大入り口の交差点も過ぎて、三〇〇メートルくらい行ったとこの左側

ということだった。

いった通り、本屋やビデオ屋などが入っている二階建ての建物があり、二階部分の片隅に『ガロ』という純喫茶の看板があった。

こじんまりした店で、中に入るとジャズ音楽が静かに流れており、ヤギ髭を生やした店長と思しき男が、カウンターでスポーツ新聞を読んでいた。ふいの来客に店長はあわてて新聞をたたみ、カウンターを潜って中に入った。

ざっと見、先客は誰もいない。二人は一番奥のブースに陣取って待つことにした。

すぐに店長はオシボリと水が入ったコップを掲げてやって来た。若いのか中年なのかわからない細い指をした痩せた男だった。

「いらっしゃいませ」

井川も光子もホットコーヒーを頼んだ。

訊きもしないのに「女の子に休まれちゃって」といって店長は去った。

マンガ本や雑誌類がラックや書架にふんだんに置いてある。若い客、特に学生客を当て込んでいるのだろうけど、この様子だと思惑通りにいつていないのか――マンガ喫茶という規模でもないから、すぐに読み尽くされてしまうだろう――時間的にこれからののか、でも、恋人同士が語り合うにはよい雰囲気のお店だった。

やがてコーヒーが来て、大人ぶってそれを飲みながら光子は、先ほどの話に戻した。

「パパが英雄って、どういうこと？」

「誰にもできなかったことをやらはりましたからね」と井川はいった。

光子はどこかで聞いたような言葉だと思った。

それはかつて根岸ともみ弁護士が、生前の城島元検事に――その時は辞任して弁護士になっていた――いったのと同じ意味の言葉だった。おそらく母親の遼子から聞いたものだろう。

「誰にもできなかったことって？」

「それはー」といったところで井川の言葉が途切れた。

井川は店の入り口を見つめて口をつぐんだのである。小柄な若い男が入って来たからだ。

「いらっしやい！」と店長が威勢のいい声を出した。

光子も振り返って見る。滝田だと思った。

向こうもそう思ったのか、一直線に向かって来て、「井川さんですか？」といった。赤いシャツにジーンズ姿の美形だった。

「まあどうぞ」と井川は光子の隣に座るよう手で奨めた。

滝田はチラリと光子を見て、赤みを帯びた緊張した顔で応じた。

そこへマスターが「お連れさんですか」といって、オシボリとコップの水を持って来た。

「ぼくもコーヒー」と滝田はいう。

どうやら滝田も初めての店のようだ。その方が気兼ねなく話せるからそうしたのだろう。

「早かったですね」と井川がいえば、「ええ」と滝田はいつて、コップの水を飲んだ。

「大学の寮にお住まいで？」

「いえ。近くのアパートに」

「そうですか……」

店長がコーヒーを持って来るまではそういったたわいのない会話をして、店長が去ると、井川は名刺を取り出して滝田の前に置いた。光子もそれに倣う。

そして単刀直入に切り出した。

「あなたが守山孝明氏から借りられた三〇〇万円ですけど、差し支えなかったら、その使用目的を教えてもらえませんか。何しろ三〇〇万といえば大金ですからね、それを又貸しされた依頼人の清水氏としては、是非とも知りたいわけですよ。しかも、そのせいで殺人容疑までかけられておるわけですからね」

のっけから意表を突く質問をする井川の手法は、相手を動揺させる効果はてき面だった。

「そ、それは……いえません」

「そうですかあ。警察にもいえないことのようにですね。それやったら仕方ありません。ではー」といって一段と声を落として、「女装趣味についてはどうですやろ?」といった。

滝田は眼を泳がせてどぎまぎしている。

追い討ちをかけるように井川はいう。

「守山氏の家から、女装しはったお二人が夜中に出てゆかはるのを、三度も目撃された方がいてはるんですわ」そこで思はずハツタリもかませた。「事件のあった夜も、でっせ」

赤いシャツが反映して顔が赤みを帯びていたのではなかった。今顔色が蒼白になったからだ。

「……じよ、女装趣味じゃないですよ」と滝田は小さな声でいった。

「ほう。じゃあ、何でっしやろ?」

「……コスプレ」さらに声を落としている。

「コスプレ? 何ですのん? それ」知らない言葉ではなかったけど、井川はマツゲだけの眼でとぼけた。女装とコスプレとどう違うのかという思いもある。

「アニメのキャラクターに変身するやつじゃん」と光子が真に受けて反応した。

「ああ、あれね。あははは。そやったんですか。でー守山氏は誰のコスプレを?」

「セーラームーン」

「ええっー」（気色悪う〜）と光子も井川も思った。さすがに「あなたは?」とは訊けなかった。

「ウソだと思ったら、週末に都町ナイトタウンビル地階の『?』を覗いて見るといいさア」と滝田はいった。

その一六 クラブ『?』

広い階段を地階に下りて行くに従って、色んな扮装を凝らした怪しげな男女が、そこここに屯たむろしていて、ノーマルな格好をした三人をジロジロ見た。見るからに不良少年・少女の不純異性交遊を思わせるような連中である。おおむねパンクファッション。男は黒々、女は原色の赤や黄色。

土曜日の午前二時過ぎ。よい子は夢の中の時刻である。

さすがに未成年の光子を、深夜にそんなところに行かせるわけにはいかないという遼子のいうことを、光子がきかなかった。そこでトシ子も一緒にーーということになったのである。

退廃的なムードの中を少し歩いた所に、『?』という金色の文字看板がかかった黒川張りのドアがあった。

ドアを開けると、暗闇からビートの利いたロックが溢れ出た。稲光のような閃光が断続的に光っていて、眼暗ましのようになった。中は薄暗い。

入ってすぐ横に受付カウンターがあってーーそこだけ淡い光があるー魔法使いのような格好をした女がいて、「お一人様、セット料金が千円になっております」という。

井川がズボンの後ろポケットから茶色い革サイフを取り出して三千円払う。

閃光と、ディスコボールが輝く中、ホテルのドアマンの格好をしたギャルソンに案内されて、奥の方の丸テーブルへ。ステージには生バンドが入っていて、喧しいロックをかき鳴らしている。

ビールの小瓶三本とお摘みの小皿が三つ並べられた。それがセツト料金の内で、新たな注文については、新たな料金が掛かる仕掛けらしい。光子は未成年なので、井川がジンジャエールをオーダーした。

眼が慣れるに従って、店内の様子が少しずつ見えて来た。扇のよ

うになったホールの要の部分に舞台があって、右端に生バントが入っている。舞台から客席までかなりの空間があって、そこに色んな衣装を凝らしたコスプレが、ポーズを取ったり、踊ったり、抱き合ったりしている。

それを取り囲むように、木製の丸テーブルが並んでいる。

そして一番外側の暗がりには、一人・二人客用の小さな長四角のテーブルと、長い革張りのソファが壁に沿っていくつも並んでいる。意気投合したにわかカップルなどが、そのソファで密やかに語らうのだろう、実際そういうカップルの影が何組もあった。

光子のすぐ傍に柳腰の風雅な花魁^{おいらん}人形が立っているーと思って見ていると、ジンジャエールを持って来たギャルソンが、「コスプレですよ」と、光子に耳打ちした。「えっ？」と光子は驚いた。顔が人間とは思えないほど小さいし、身体も華奢で、しかもさっきから柳のようなポーズのまま、微動だにしないのだ。危うく手で触ってみるとこだった。

体躯会系で、お嬢さん育ちの光子には、何もかもが驚くような光景だった。トシ子もそうだった。ディスコもない街に育ち、都町には歓送迎会などで来たことはあるけど、居酒屋かカラオケ、飲み屋といえばせいぜいスナックくらいでーそれとも人気俳優の某サンタマリアの母親が経営している店というので一度行ったきりーこういう怪しげな店に足を踏み入れたことはない。ここには魅惑的な退廃があった。

指を鳴らしてギャルソンを呼び、ハイボールをオーダーした井川拓馬は三十男だけあって、さすがにこういう雰囲気には慣れている。大阪南の夜を、キャバクラやオッパイパブなどで鳴らした口だろう。マツゲだけの眼で、おどおど見まわしている二人のレディーを見るときはなしに見てグラスを傾けている。

というか、二人は入って来た時から注目の的だった。暗がりの四方八方から熱い視線が新顔の二人に注がれていたのである。殊に、すっと背が高く、きりつとした顔立ちの若い娘、光子には粘りつく

ような視線が集中していた。

とりわけ右手の一つ向こうのテーブル、華奢なイケ面三人に囲まれた髭面の親父とはよく視線がぶつかった。小さいけど固太りの、いかにも土建屋の親父といった風情だが、用心しなければならぬ暴漢かも知れないという思いが、ちらりと光子の頭を掠めた。

実はそうではなく、彼らは隣のビルの三階に店を構えるスナック『わしの城』のママとホステスたちだったへ別にコスプレしているわけではなく、店がハネてからそのまま飲みに来た、オナベの店の連中だった。

勿論そんなことはつゆ知らない光子である。きっと表のどこかで、じっと自分らが出て来るのを待っているタツのことを思った。自分が家に帰ってベットに入るまで絶対に眠らないし、何かあれば体を張って守ろうとする、松つあんの二代目。

ウザイと思うことがあるし、愛おしく思うこともある。

そんなことを考えていたら、いつの間にか静かになった。

と思う間もなく、舞台に煌びやかな証明が放たれた。そしてすっと立ち上がったトランペッターが、ニニ・ロツソの「夜空のトランペット」を吹き鳴らした。

見事なトランペットソロのあとは、『真珠取りのタンゴ』の曲になり、舞台の左袖からアニメのキャラクターが続々と登場して来た。光子は思わず「何あれ？」と興奮した声を出す。トシ子も、「きもい！」と娘のような黄色い声を上げた。

それもその筈、男も女もあったものではない。好き勝手に、キャラクターになりきっているから、エロいのもあればグロいものもある。男なのか女なのかの判別もつかない。

メーテル、デビルマン、ラムちゃん、乱太郎、まる子、オスカル、ピンクパンサー、峰不二子、筋肉マンなどのアニメキャラに加えて、メイドコスチュームや、チアガール、ランゼリーなどのキワモノも登場して、舞台いっぱいに歌い踊る。

いや、いつの間にか、舞台の下にもウジャウジャいる。さつき階

段や通路に屯していたパンクファッションと毒キノコのような女たちである。

ここはそういった趣味の社交場であった。日頃の憂さを晴らすのには安上がりでよいけど、それだけではなく、やはり男女の危険な出会いの場でもあるようだった。

見ると年齢的にも様々で、二十代から四十代、いや五十代までいるかも知れない。女性の場合、中には小遣い稼ぎの十代も混じっているのではないか。

五時閉店ということであったが、四時前に店を出た。

「頭がどうかなりそう」と、光子がいえば、「具合が悪くなった」とトシ子という。

「あははは。人生色々ですがな」と井川は笑い、そぞろ歩きながら、「どうでした?」と訊く。

「何が?」と、トシ子は本当に具合が悪そうだ。「楽しめたかって訊いてるのなら、冗談じゃないわって感じだわね」

光子は辺りを見まわしている。案の定、列をつくっている客待ちタクシーの陰から、タツオの姿が見え隠れしている。

「そんなこと訊いてません。事件との関係を訊いてるんです」

「あの店と事件と何か関係があるとゆうの?」

「か、どうかはわかりませんがね。ぼくには犯罪のニオイがプンプンしましたよ」

「ほんとにいい?」

「光子ちゃんはどうでした?」

「知らない。てゆうか、あんなの何が楽しいんだろう」

「そうだわねえ。あんなところで出会ったカップルなんて、ろくなことにはならないわねえ」

もう飲み客の姿はちらほらしか歩いていない。銭のない若者がうろつき歩いているだけだ。それでも中国人のエステ女たちは四つ角ごとに二〜三人いるから不思議だ。

タクシーも客はいないのにアイドリング状態で十重二十重と並んでいる。果報は寝て待て、首が折れたようになって眠り込んでいる運ちゃんもいる。その中のごく運のよい者だけが、遅仕舞いの店からホステスがお客を連れて出て来て乗り込む幸運に与る。

バブルが弾けて失われた一〇年が過ぎ、なお不況は底なしに低迷している。飲み屋街はもろにその影響を蒙って喘いでいる。

（三〇〇万円か……）と井川はつぶやいた。

「もしかして、滝田と殺された守山が出会ったのもあの店？」光子が唐突にいった。

「そう。ぼくもそう思いますねん」

「なに、そうすると、守山が親友の清水を騙してまで借りて滝田に又貸した原因が、元を質せばあの店にあるゆうのう？」とトシ子。「まわりくどくいえばそういうことになりますなあ。そこで出会わなんだら、そういうことはなかったんですさかいに」

「でも、そういう同じ趣味の出会いぐらいで、三〇〇万ものお金を貸す？ーしかもないお金を借りてまでーーいうのはちょっと異常じゃない？」光子。

「異常ですよ。脅し取られたといった方がしつくりくる」

「ほんとだねえ」

「でも滝田はそんな風に見えなかったじゃん」

「裏で誰かかんでたらどうです」

井川はそのニオイをクラブ「？」で嗅ぎ取ったのだった。でもそのことは何もいわなかった。

ちょうどそこにイエローキャブがあり、海坊主のような運ちゃんが仰向けに首を折って眠りこけていたので、ドアをコンコンと叩いて起こして乗り込んだ。

上野ヶ丘の光子の家から中島東のトシ子のアパートへ、そして勢家町の自分のアパートという道順で帰った。

おかげで思わぬほど料金が出たので運ちゃんは大喜びであった。

前に続く

月曜日に、早速井川は清水紀夫に面会して、滝田の件を問い質した。光子を連れて行かなかったのは、清水から気兼ねなく本音を訊き出せると思つてのこと。

「率直に訊きますけど、あなた、あなたが貸した三百万が滝田に又貸しされていたんを、ご存知でしたか？」

「いえ。それは警察にも訊かれましたけど、知らなかった。本当です」

清水の表情に偽りめいたものは読み取れなかった。

「じゃあ、どうしてそのことを、そんな重大なことを、前回いつてくれなかったんです？ 警察は頭から信じてないですよ」

「ですから、滝田の名前を出すのを迷いました。先生方にも余計な迷いをして欲しくなかったからです」

「なるほど」スジは通っている。「じゃあ訊きますが、その事実を知つてどう思ひりました」

「そりゃあ、心外ですよ。傍にいたら怒鳴りつけてたでしょう。だって、相当な決心で貸した金ですからね」

「ふゝむ」井川は考え込んだ。

そして、クラブ『？』のことを話して聞かせた。

「今井氏が、誰かに脅されているような様子はなかったですか？」
今度は清水が考え込んだ。

「……そういえば、何だか切羽詰つたような顔でした。様子も落ち着かない様子でしたね」

「それはお金を貸した前ですか、あとですか？」

「前もあとです。何だか人が変わったようになって、顔色も悪かった」

これで決まりだと井川は思った。今井は誰かに脅されていたに違いない。それなら三百万円以外に、もっと脅し取られている可能性

がある。

面会後に権藤警部に会って、その点を質した。

「今井氏の資産状況ですけど、一五〇〇万の家を買った資金は自己資金で間に合ってたんですね」

「ああ、そうじゃ」

「その内訳は？」

「内訳か――内訳は、預貯金が約五百万、銀行スジからの借入金に合わせて一千万ちゅうところじゃな」

「そうですね、それぐらいやったらその時点では、まだ生活に余裕ありますよねえ。それ以後借金は増えてませんか？ 清水氏からの三百万以外に」

警部の気色が悪くなって来ている。

「何が訊きたいんじゃない？」

「ええ、ですから、生活に余裕があるのに、ウソって清水氏から三百万もの大金を借りるぐらいですさかいに」

「おい吉田！」と警部はうしろを振り向いて呼んだ。「ちょっと、清水の資料持って来いや」

メガネをかけた吉田刑事が捜査資料の綴りを持って来て警部に渡した。警部はそれをパラパラ捲っている。

「信金から二百万、おお、消費者金融からも借りとるな。ひいふうみの四社から合わせち二百万――つうとこだな。……うん？ 生命保険も解約しとるな。これが三二万か。――まあそんなところじゃ」

井川は驚いた。

「ええーっ。それやったら借金まみれじゃないですかあ」

「そうじゃ。そじゃけん、清水に払えんようになった」

「その原因は何だったんです？」

「それがようわからんのじゃ」

光子を連れてなくてよかった。光子ならきつと「それでいいん？」
といって警部を怒らせていただろう。

「それでいいんでっしゃるか？」この、でっしゃるか、が大事なのだ。

「よくあるかい。それがわからんけん、今までヒマかかっちゃるじやろうが。検事がしゃっち、それがハッキリせんと起訴できんちゅうんじゃ」

「そろそうでっしゃろ」

「なにっ！」

「いえ、自殺説の根拠はその辺にあったんやないかと」

「そうじゃ、そこが悩ましいところじゃ」

「事故説の方はもう無視していいですよるか」

「あん屁の舞^もうたようなこついうジイさんのこたあ、気にすんなちや」

そのジイさんが井川の留守中に事務所を訪れていた。

女が二人つくねんとしているところへ、野島教授がのっそり現れたのである。

「そこまで来たものだから」といって。

トシ子は教授を応接室ではなく、ボス弁が来客をもてなすソファ^ーの方に案内してお茶を出す。クライアントからのいただきものである高級な緑茶である。光子も同席した。

「今日は何か？」トシ子が訊く。

「いやなに、その後どうなったかと思ってね。そろそろ送検の時期じゃないのかね？」

「そうなんですよう。このままだとねえ」

「でも、手掛かりが掴めそう」と光子が口を出す。

「おや、そうかい」

「真犯人がいたとして、――でも、昨夜^{ゆうべ}考えたんだけど、どうしてあんな状態にして殺したんだろうって。自殺に見せかける為かなあ……」

「お説通りでなくて先生には気の毒だけど」と、トシ子がいえば「

そんなことはないさ」と教授はいった。

まだあんなバカバカしいことを考えてるんだろうかと光子はあきれた。

「たてえそうであっても、最期にエクスタシーを感じて死んだのは間違いないよ」と教授は確信を持っていう。「ところで、君らのボスは？　根岸ともみ先生は留守かね」

「なあんだ、根岸先生に用があつたのかあ」

「根岸先生をご存知なのう？」

「いや、直接知ってるわけじゃないけどね、ちょっととした因縁があつて。……それは残念だなあ。今どちらに？」

「名古屋なの」と光子。

「名古屋？」

「何か？」トシ子が怪訝な顔で。

そこへ奥の井川の部屋から事務員の遼子が出て来た。

「あら、お客様？」

野島教授は、元城島検事の別れた妻をまじまじと見た。勿論遼子は一面識もないから会釈だけで済ませた。

前に続く

午後になって井川は帰還した。昼食はもう外食で済ませていた。光子が野島教授が立ち寄ったことを告げる。相変わらず変な考えに凝り固まっていることも。

「そうですかあ……」といって井川はホームワイドの白いポリ袋を応接セットのテーブルの上に置いた。「どうですやろ、同じ条件で実験してみよう思うねんけど」

中から白い化繊のロープと、化繊の荷造り紐と、滑車と、フックと、ドライバーにビスなどを取り出した。

「えっ、マジで？」

「ここでやるのう」といってトシ子が給湯室からコーヒーをささげて現れた。

「いや、ここはクライアントがいつ来るかわかれしまへんやろ。ぼくらの部屋でやりますわ」という。「遼子さんいてはるんですか？」

「今銀行に行ってる」と光子。「根岸先生の許可なしにそんなもの取り付けていいん」

「ほんのちよつとビスの穴が開くぐらいやから」

三人はソファアーに腰を下ろしてコーヒーを飲む。光子もいつの間にかホットコーヒーを飲むようになっていた。

「で、実験台には井川先生が？」とトシ子が訊く。

「うーん、ぼく、体が硬いねんけどなあ……」

「トシちゃんがやればいいじゃん。やりたがってたんだから」

「ちよつと光子ちゃん！」

その場面を想像して井川は「んふふ」と笑った。それはちよつと見物だろうなと光子も含み笑いをする。

「光子ちゃんこそスポーツウーマンで体が柔らかいんだからーでも遼子さんが帰って来たら大変だわね。うちの娘に何てことするのよ、嫁入り前の娘にーって」

「トシちゃんだって嫁入り前じゃん、ずうと」

「こら！ 調子に乗っていると、チクリまわされるわよ」

「いやーん、こわーい！」

チクリまわすとは、殴るの意だから誤解してはならない。

「ははは。ぼくがやりますがな」

というわけで、奥のイソ弁先生の部屋に舞台を設えて――丸椅子はないので、回転椅子で間に合わせた――実験は始められた。スーツの上着だけ脱いで。

「あいたたた！」

やはり小太りで体の硬い井川はほとんどエビ反りにはならない。回転椅子で体を支え、首に投げ縄のような輪を掛けて、天井の梁に取り付けた滑車を通して、適当と思われる長さの所で小さな輪を作ったのに右足を通した。両手はフックに掛けた荷造り紐を握らせる。それでどうにかムササビが滑空するような格好にはなったへというか口に玉を咥えさせたらほとんどSMの世界である。腹が出るしロープが少し短過ぎたのか相当に苦しそうだ。

「あひたた……こ、これはシャレにな、なりまへんで、むむむ……」
と、そこへ、遼子が帰って来て、「ちよつとあなた達何やってんのよう！」という。

「実験してるんだから、ママは黙って見てて」光子がいう。「先生、首を絞めてみて」

「これ以上し、絞めたら死んでしまいますがな」

といいながら井川は足を伸ばそうとする。ズボンの裾から山芋へ自然薯じねんじょのような白いフクラハギが現れた。足を伸ばせば当然首が絞まって頭が持ち上がるわけである。

「どう？」トシ子が覗き込んで訊く。

「わ、わかりましたさかい、お、下ろして……」

遼子はあきれた顔で自分のデスクに向かう。女が二人掛かりで井川の足からロープの輪を外そうとするも――。

「あいたたた」

「本当に井川先生の体って、硬いのねえ」とトシ子。

「メタボだからじゃない」と光子。

「ほ、ほっといでくださいーあいたたた」

「ちょっとこれ外れないわねえ」

「ママ、手伝ってよう」

遼子もやって来て、三人掛けでようやく足から輪を外して井川を解放した。井川は腰を押さえたり叩いたりして歩き回り、そして椅子にへたり込んだ。

「ちよっとは運動した方がいいわよう」とトシ子がいう。

「ぼくもそう思いました」

「で、どうなの？」と遼子が訊く。「何の実験なのか知らないけど」「いや、ようわかりましたわ」と井川はいつて、「先生には内緒でっせ」と、天井の梁に取り付けた滑車とフックを仰ぎ見る。そこには当然ビスの穴が残ることになる。

何がわかったのかについては勿体ぶっていわなかった。が、「あんな状態で何時間も置かれたら人間どうなるんだろう」と光子がいったのに反応して、「そんなたまりませんよ。少なくともぼくはMでないことは確かです」といった。

世の中には痛みを快楽に変えるMもいれば、それを見て、あるいは痛めつけて、快楽を得るSもいることを光子も知らないではない。でももうその心理については野島教授には訊くまいと思った。

「あの紐だけど、あれは手に括り付けられていたわけじゃないのう。自分で握ってたの？」とトシ子が訊く。

「そうらしいですわ。今わかったんやけど、あの紐がなかったら、バランスが取れないばかりか、足と首にモロに圧が掛かるから、そらあ、苦しおまつせ」

「死後四、五日も経っていたのに、どうして死亡推定時刻が朝の五時から九時なんて狭い範囲でわかるんだろう？　まるで滝田のアリバイを証明する為のようじゃん」

その辺のことは検死のエキスパートの野島教授に聞くしかない。
さっき訊いとけばよかったと光子は思った。

一段落してから井川がいった。

「今晚からぼく、クラブ？に張り込もう思うねんけど、でもぼく滝田に面が割れてるからなあ……」

「あたしだってそう」といって光子はトシ子を見た。

「何よう？」井川も見たので、「ちょっとやめてよ」と遼子に助けを求める。「嫁入り前の娘にーねえ」

「ははは。ぼくが変装して行きますがな。どうせコスプレの集まりやねんから、趣向を凝らせば誤魔化せますやろ」

「女装すんのう」と気色悪そうにトシ子がいった。

その17 モスクワの夜は更けて

しかし、井川拓馬は女装も変装もせずに一人でクラブ『?』に乗り込んだ。そのかわり目いっぱいリッチな中年を演出した格好をして、午前三時過ぎにへなるべく滝田学と顔を合わせることはないように、酔客が迷い込んだような素振りで。

店員の方はちゃんと覚えていて井川を二人掛けの席に案内した。もうピークを過ぎていて客もまばらだった。ステージの上やホールのパフォーマーの数も少ない。

物欲しそうな顔をしてビールを飲んでいると、暗がりからすーと人影が近づいて来て、「こちら、座っていいかしら」といって微笑んだ。一目でそれとわかる女はパスしたへどうせ売り専の女だろうが歳がいつてる。何百万も脅し取るのはこういう類の者ではない。その日は空振りに終わった。

次の日も、空振りだった。

そして三日目、もう滝田のことなんか気にせずにピーク時の午前零時に乗り込んで飲んでいると、ホールで踊っていた少女戦士の衣装を着た女が、「ああ、疲れた。おじさんコックハイ一杯おごつてよ」といってしなだれかかって来た。

マツゲだけの眼で観察すると、肌の色艶やキメの細やかさ、髪の毛の生え際、ウナジから肩にかけての曲線、そして小さな顔立ちなど、どう見ても未成年、(ヒットしたな)と井川は、手を上げて指を鳴らした。

ギャルソンがやって来る。

「コックハイにビール追加、それから適当にツマミも持って来てんか」

「かしこまりました」

女は酔った振りをしている。こんなのに手を出したらえらいこと

になる。

さてこれからが大変だ。下手するとミール取りがミールになり兼ねない。いや、それくらいの分別はある。

けど、恐いお兄さんが現れる間際までいかなければならないのがなんとも。現れてからでは遅いのだ。ガイシャの守山孝明の二の舞になってしまう。腕っ節はないし、逃げ足も遅い。

でも、現れてもらわなければ人定ができない。そいつと滝田学との繋がりが掴めれば、事件の真相に一気に迫れる。滝田を張っていればいずれは接触するだろうけど、そんな時間的余裕はないのだ。

井川は前もって色んなシチュエーションを考えて望んでいたのだが、いざとなると何にも考えてなかったように思い迷った。ギャルソンが運んで来たコークハイを女に飲ませながら、これからすべきことを頭の中でなぞった。

舞台では「モスクワの夜は更けて」の演奏に合わせてコスプレ集団が派手なパフォーマンスをしていた。

その中の美少女が滝田学であることに井川は気付きもしなかった。

前に続く

なんとしても誘いは女の方からさせなければならない。相手次第ではそんなのは気休めにもならないけど、警察沙汰になった時のいい訳にはなる。

だけどこの手の女はその辺は心得ていて、ちゃんと言質を取っておこうとする。電車内でチカンをでっちあげて大金をふんだくろうとする女子高生など、今日日の若いチーマーは、大人顔負けの狡猾さで情け容赦がないのだ。

媚惑的な姿態で、お小遣い次第ではどこにでもついて行くという素振りを見せても、なかなか乗って来ない井川に、しびれをきらせたのは女の方だった。

「何んだか気分が悪くなっちゃった」と誘い水をかけて来る。それでも乗って来ないものだから、「どこか静かなところで休みたいな」という。

こんなことをいわれて平然としていられる親父はいない。鼻の下を伸ばして、二、三万くらいはくれてやってもいいかと胸算用をして「それはいかな。じゃあ静かな所に行こうか」ということになる。

ところが井川拓馬は、そんな小娘ごときに手玉に取られるような玉ではない。イソ弁風情でありながら大阪ミナミの夜を鳴らした男である。見下ろすようなマツゲだけの眼で「アメちゃん食べますか？」と、飴玉一つで売れっ子キャバ嬢をものにしたこともある。ゼニを使ってモテるのは百姓である。

「さよか、ほな、送ってあげましょか？」という。

女は当然、下心があつてのことだと思うから、精一杯の媚とシナを作ってしなだれかかる。井川は家に送ってあげるといつてるのである。

酔ったふりした女を抱き抱えて井川は店を出た。そしてそこらに

並んだタクシーに女を押し込んで乗る。

「どちらまで行かれますか？」と運ちゃんが訊く。

井川は答えない。

「末広……」と女がいう。

末広町はホテル街だ。

「末広町はどちらまで？」運ちゃんは心得ている。（おいおい大丈夫かい？）と思う。女は素人のようだし、しかも、若い！

「……陸橋の下」女は答えた。

店の前からもう一台タクシーが付いて来ていた。

前に続く

大道陸橋の左側道そくどうに入って最初の信号のない交差点でタクシーは停まった。右手に陸橋のトンネルをくぐれば新町、左手が末広町である。一帯にはラブホテルが乱立している。その暗がりでもタクシーを降りた。

女を抱きかかえた井川は、辺りを見回しながらいう。

「こんなところに、お家があるのんか？」

と、そこへ――

「何いよんのか、オッサン」

トンネルの暗がりから声がして、ゾロゾロと人影が現れた。予想していたこととはいえ、お早いお出ましに、井川はビビくった。

案の定、クラブ『?』への階段や通路に屯していたパンクファッションの連中へ少年? だった。ざっと見、四、五人はいる。

甲冑のような黒革ジャンパーに、鉈を打った黒革ズボンの男が、クチャクチャガムを噛みながら井川の前に立った。リーゼントの黒髪を一部紫色に染めて青いサングラスを掛けている。

「俺のスケに何するつもりな？」

「何するって、い、家に送って来たつもりなんやけど……彼女がいう通りに」

女はぐったりして井川に体をあずけている。

「こんなところに連れ込んでおいて、それはないやろオッサン」

そういわれても仕方がなかった、ラブホテルの真ん前なのだ。道路を隔てた隣もそうだった。左は陸橋の側壁とトンネルである。

「彼女やと? ほっ。何いよる。その子はまだ一五歳やぞ、オッサン。これは、立派な淫行未遂じゃ。俺らがたまたま通りがかったからよかったものの」男は薄ら笑いを浮かべて、後ろの連中を振り返った。「――のや」

「タカちゃんごめん……」と女が小声でいう。「オッサンがウチ

に無理やり飲ませて……ホテルで明け方まで休もう……なんちいうんよ」といって助けを求めるように井川から離れて、その男に縋り付いた。

「何かされたんか？」

「あっちこっち触られた」

（よいわんわ。こないにして守山孝明はこいつらの罠にかかったんやな）と井川は確信した。

守山の場合はしかし、ことが終わってホテルから出たところを押さえられたのかも知れない。脅し取られた金額がハンパではない。法律で処罰されるのはもとより、職場や社会からも糾弾されることを思えば、無理からぬことだ。

「わ、わかりました」といって井川は名刺を取り出し、「ぼくはこういう者ですね。逃げも隠れもしまへん。明日ーいやもう今日ですか、事務所に来てもらえませんか。彼女が素面しらふの時に、事情をはっきりさせて、ケリをつけましょう」

こういう事案では相手が未成年だけに勝算は薄いと思う。下手すれば弁護士免許剥奪の懲戒処分ということになる。でも、彼らに前があれば別だ。守山孝明の事件と一緒に解決できる。井川の作戦は身を棄て実を取る、瀬戸際作戦だった。

男達は名刺を手にして鼻白んだ。根岸法律事務所の名刺である。弁護士・井川拓馬ーとある。何と相手は法律の専門家ではないか、既遂ならともかく、未遂では藪蛇になり兼ねないへというところまで思慮が及んだのかどうか。〳

「こんやたあ！」

いきなりタカと呼ばれる男が井川の胸倉を掴んだ。脅しの最終手段に出た。少々痛めつけても被害届は出せないだろうと高を括っている。

「何様じゃ思うちよるんじゃワレ！　ワレこそ事務所に来いや！」と、ヤクザ者のように喚いた。

その様子を、追隨して来て一通の入り口から四、五メートルくらい入った所で、ヘッドライトなどのライト類を消して待機していたタクシーが、パツと点灯して、スーと近づいて来た。

そして井川を取り巻いた男達の所まで来ると、ひとりの男を吐き出して走り去った。

タクシーを降りた男は、胸倉を掴まれた井川とリーゼントのタカの所にやって来て、仁王立ちした。

「何んか、お前は？」

タカに劣らぬタツパと、それ以上のガッシリした体格をしたその男は、顎を引き、胸を張って、無言で立ったままである。顔は色白で、ウサギのような目をした優しい顔立ちであるが、堂々とした立ち姿から発散される何かが、チーマーの彼らを威圧した。

井川はこの若い男が、付かず離れずいつも光子に影のように張り付いているボディーガードのような男であることに、すぐさま気付いた。そして理解した。光子か遼子の差し金であることを。

しかしそれは余計な差し金だった。少々痛い目を見るかも知れないけど、警察沙汰になってくれないと困るのだ。

と思う間もなく、後ろのひとりがドモリのタツにちよっかいを出した。途端にその者は腹を抱えてうずくまった。振り返り様の膝蹴りを食らったのだ。

ほかの連中は殺気立って、手に手に刃物を取り出して構える。だがタツの敵ではなかった。ひとり、ふたりと、挑みかかつては刃物を叩き落され、もぎ取られて、打ち倒された。

とうとうリーゼントのタカだけになって、逃げようとするところを、襟首を？まれて、陸橋の壁に押し付けられた。

そこへ、タクシーから通報を受けた中央署のパトカーが三台、赤色灯を回転させ、唸り声を上げて、一通に連なってすべり込んで来た。

かくして全員が中央署に連行されることになった。それは井川の望むところだった。

前に続く

取調べ室や、大部屋の中の衝立で仕切られた幾つかのブースや、応接室、会議室のような所でも、一人ひとり単独で事情聴取を受けることになった。

井川は応接室で受けた。村上タツオと金谷高光は取調室で、池辺沙織は会議室、その外の少年らは大部屋のブースにわかれて。

それらの供述を突き合せれば、大体の事情がわかる。誰がウソをいつているのかも。そして、食い違ふところや矛盾点を突いて責めるのだ。

井川の取調べは当直の巡査部長が当たった。

「どういうことですか、先生？」

井川はすべての事情を話した。権藤警部あたりでないと話にならないけど、とりあえず偏見を持たれては困るのだ。

そこへ入れ替わり立ち代り当直の者が現れては巡査部長に耳打ちした。

「あ、ほうか。よし、そうしてくれ」といって、巡査部長は井川に向き直り、「とりあえず、先生はこれでお引き取りください。担当の者が出勤して来てから、またご足労願うかも知れませんが、その時はよろしく」といった。

井川が腕時計を見ると、五時一五分を指していた。

ドモリのタツこと村上タツオはそういうわけにはいかなかった。何しろ傷害事件の当事者なのだ。しかも相手は少年だった。一番年長のリーゼントのタカにしてもまだ一九歳。少年の中にはケガをした者もいた。訥弁^{とつべん}なのも災いする。

「なんじゃ、あんた、弁当持ちかいな。こら、まずいことになるでえ」

その通りだった。事と次第によっては、執行猶予が取り消される

ようなことに。

「しし仕方ないです」

と、しおらしくタツオは頭を下げたけど、留め置かれることになった。留置場行きである。

一五歳の少女・池辺沙織は涙ながらに事情を説明した。しかしどういい繕^{つくろ}っても無理があった。少年達との関係は知らぬ存ぜぬでは通らない。少年達の供述からすぐに馬脚を現した。警察沙汰になった時点で、彼らの幼稚な美人局計画は見え透^{つもたせ}いたのである。

しかし未成年ということで、彼女も少年達もへひとりを除いて、引き取りに来た家の者に引き渡された。

リーゼントのタカだけはそういうわけにはいかなかった。引き取り手がなかったせいもあるが、過去に傷害や恐喝の前科が山とあり、札付きの悪で、暴力団の準構成員というレッテルを四課で貼られてさえた。証拠隠滅――少年達を脅して口車を合わせるなど――の恐れが充分あったから、留め置かれたのである。

井川拓馬は寝ぼけ顔で一〇時過ぎに出勤して来た。

「うとうととしただけや思ったけど、目え醒めたらもう一〇時前ですわ。こらいかんわ思っ^{おも}て、――中央署から何かいって来ましたか？」と訊く。

ひと通りの事情はメールで遼子に報せておいたから、遼子・トシ子・光子の三人がエレベーターの開閉する音を聞きつけて、受付カウンターの顔を揃えていた。

「ううん、まだ」と光子が答え、「タツは？」と鋭く訊く。

「……ということは、やはり、留め置かれましたかあ……」

「それより、先生、朝食まだなのでは？」と遼子が心配する。

「パンをかじって来ましたから」

「それじゃあ、コーヒードも」といった時にはもう、トシ子は給湯室に向かっていた。本当にフットワークの軽い女だ。

休憩室のテーブルでコーヒを飲みながら女達は井川の話に耳を傾ける。

「いや、驚きましたわ。いきなり正義の味方が登場して。いや、強いなんのって。おかげで、か弱いぼくは痛い目を見ないで済みましたけどな」

「タツはどうなるの？」と光子が訊く。

「まあ、大丈夫でっしゃろ。相手の少年達は刃物を持ってたさかいに」

「これからどうなるのかしら？ 井川先生の方は大丈夫なんでしょうね」と遼子。

「うーん。ぼくの方はちょっと厄介ですわ。何しろ未成年の女の子に飲ませて、あんなとこまで連れて行ったことになりますさいに。タクシーの運ちゃんがどういう証言をしてくれるか。店の従業員の心証は悪い思いますよ」

「身柄拘束なんてことには？」

「そこまでは行かないと思うねんけど。まあ、そうなったらそうなたで。連中には余罪があるでしょうし、何より殺人事件に関係する余罪が出て来てはーそうなる但至少、警察のメンツもありますから、生意気な新米弁護士を少し懲らしめてやろうくらいのこと
はーははは」

「笑い事じゃありませんよ、先生。裁判を控えた案件もあって、根岸先生とは連絡がつかないんですから」

遼子の懸念はそっちにもあった。ボス弁の今回の外出は長引いている。連絡も途切れている。

「どこでなにしてんだか」光子も毒づいた。

「でも仕事を忘れたことはないから、そのうち帰って来るわよ。芳かぐわしい匂いをさせて帰って来るわよう」とトシ子。

そこへ、事務所の方で電話がなった。トシ子が飛んで行く。
中央署からの呼び出しだった。

その18 事件の結末

「井川先生よい。あんた、何を企んじよるんか知らんが、立派な淫行未遂じゃ。バカなことをしたもんじゃな。署長は立件せいち、いよるんど」と権藤警部が取調室に入って来るなりいった。

「お騒がせしてすいません」と井川は頭を掻く。

権藤警部は井川の前の椅子にどっかり腰を下ろして、スチール机に左肘を突いて体を斜に構えた。ガラの悪い彼のクセだ。そうやってケンカ腰で相手を見る。

「あいつらがガイシャの守山を脅しちよったゆうんか？」

井川はしおらしさを装おっている。

「はい。たぶんあの少女を餌にして淫行を仕掛けた。調べてもらえばはつきりします」

「ほなら、なんで殺されたんじゃ。脅し取ろうと思えばまだ家がある。食いついたら骨までしゃぶるんが、ヤクザ者」

「タカという男はヤクザですのん？」

「まだ未成年じゃけんど、これが体一面に墨を入れち、イッパシのヤクザを気取っちゃる。兄貴分がいて、これはパリパリのヤクザ、食いついたら骨までしゃぶらにゃおかん。それが金ズルをどうして殺すんじゃ」

「そうですかあ……もうそこまで。さすがですねえ」

「滝田学も連中の仲間いうんか？」

「いえ。多分、滝田は――滝田も、脅されてるんと違いますかあ。守山と一緒にコスプレクラブに通かよっていて、守山は罠に嵌かまった。それを助けようとして因縁を付けられたか、まあその辺はわかりませんけど。警部さんがいわはるように、守山をしゃぶり尽くしたら、次は滝田の番――滝田もそれを感じていたから、クラブ『?』の存在をわたしらに教えてくれたと思うんです」

「ほう、滝田が」

「ええ。その時点では、わたしらは、滝田も何者かの手先という認識でしたけど。滝田にしたら、警察に密告すれば組織からの報復が恐いし、わたしらのような弁護士サイドが調査して発覚したのならーと、今思えば、あの時滝田は切実な気持ちだったんでしょう」

「連中は滝田をパシリに、隠れ蓑にしち、脅し取った金を手にしていたちゅうわけか……」

実際に三百万円という大金が、容疑者の清水紀夫からガイシャの守山孝明へ、そして滝田学へと渡って、連中が捜査線上に上ることはなかった。

権藤警部は斜めに構えていた体を正面に向けた。マツゲだけの眼をした、とぼけた顔の新米弁護士を見直したようである。

しかしメンツがあるから素直には喜べない。

「ほなら、連中が守山を殺したかどうかちゅう問題はどうなるんじや」

「それはどうですやろ、美人局恐喝事件の実態を明らかにする過程で、見えて来るのと違いますか」

権藤警部はコブシを握り締めて、忌々しそうに顔を左右に振った。

その日のうちに関係者全員の事情聴取を終え、井川は不問に付された。村上タツオも正当防衛が認められて解放された。

そして警察は、土木作業員の金谷高光と、その兄貴分の川島組幹部・大野貢を、別件の恐喝容疑で身柄拘束し、そして池辺沙織と滝田学は任意で、連日厳しく追及した。

それによって、クラブ『?』を舞台にした美人局の実態は明らかになった。金谷と大野が、守山から一千万円以上脅し取ったことを認めた。滝田学もやはり脅されて、彼らのいうがままに仲介をしていたのだ。

しかし本件の守山殺害については彼らは頑強に否認した。守山孝明の死亡推定日時の彼らのアリバイは明白にあった。四月一四日は二人とも県外にいた。金谷は宮崎県都城市の建設現場にいて、大野

は福岡県朝倉市の上団体『橘組』の葬儀に参列していたのだ。

清水紀夫の勾留期限はあと二日に迫っている。警察も検察も、そして弁護士サイドの井川らも大いに焦った。

そういう時にふらりとボス弁の根岸ともみが帰って来たのである。光子はオハラモードの根岸を睨み付けた。

前に続く

井川と光子が見晴台案件のこれまでの調査と、警察の捜査の進捗しんちよく状況を、順々と話すのを、根岸ともみは執務机で腕を組んでじっと聞いていた。

そしていった。

「よくやったわね」

（何それ）と光子は腹立たしい思いを露わに、「そんなこといっていいの？ もう時間がないじゃん。あと二日だよ」

「あとは警察に任せましょう」

「警察だってお手上げなんだから」

「そうバカにしたもんじゃないわ。警察の組織力をもってすれば二日あれば充分。警察にだってメンツがあるから。それに、否認事件というのは不気味なものなのよ。検察だって、スッキリした形で起訴したいだろうし、今頃必死なのでは」

「ぼくもそう思いますう」と井川」。

「じゃあこのまま黙って見てればいいんだ」

光子はぶすくれた。

「野島教授はなんていってるのかしら」

「相変わらず変な考えに凝り固まってる。相手にしないほうがいいよ。こっちまでおかしくなる」

「井川君。事故か自殺か――この線でもう一度考えてみて」

そういうともうふたりには眼もくれないで、根岸ともみは机の上で決済待ちの書類に手をかけた。

井川と光子は原点に立ち返る意味で、事件現場を訪れた。

天気はよいし、新緑の季節で、そこから眺めるロケーションは相変わらず抜群だった。

三四歳の守山孝明が満を持して手に入れた家は、主がいないまま

廃屋のようになって、黄色い規制線が張られたままになっていた。棄てられたかした子猫が三匹屋敷の中をうろちよろしていた。

「この家を手に入れた時は、どんなに得意だったことかー！ いろいろわかりますわ。ぼくももうそういう歳やさかいに。さし当たって結婚する相手もいないし」

「どうして？」

「どうしてって、そら縁がないことにはどないもありませんがな」

「縁なんて、作ればいいじゃん」

「そないな簡単なものじゃ、ー！ それやったら光子ちゃん、ぼくと結婚してくれますかあ」

「そ・そんなこといわれても」

「それみなはれ。他人同士が結婚までいくのんは、簡単なようで、大変なことですよう。ましてぼくみたいにモテない男は縁があってもー！ 孔雀のように、声の大きいのがモテるんなら、国東半島^{くにさき}にまで届く声で喚きますけどね、ははは」

「トシちゃん、まんざらでもないみたいだけど」

それは井川も感じていた。でも人間というものは、得難いものを望むものであるへ！ といって光子を望んでいるわけではない。そこにすれ違いが生じて、悲喜交々（ひきこもごも）の恋愛模様を織り成す。

「そんな得意絶頂から、ちょっととした気の緩みから、思わぬ落とし穴に落ちて、一転地獄へ、一千万以上も脅し取られて、その上まだまだ……となると、自殺の動機なら充分ですわな」

「でも、開き直って、これ以上は応じられない、警察に被害届を出す、といって殺されたとも。金谷・大野の動機も充分だと思っよ」

「そやね。まあ、ボスのいわはるように、そこは権藤警部に任せて、ぼくらは自殺に決め込んで考えてみましょう」

井川と光子は家から道を隔てた擁壁^{ようへき}の上にある、落下防止柵にもたれ掛ってー！ ちょうどそこは檜の木の本陰だったー！ 事件発生時からの経緯を振り返った。

「ちょっと待って。そうすると、清水紀夫が無断欠勤が続く守山孝明のことが心配になってここに來たのが、四月一四日の午後だった。けど玄関は施錠されていた。だから明野北町のマンションに母親を呼びに行って、一緒に合鍵で家に入っただのよね」

「そうですね。犯人が持ち去ったのか、どこにもマスターキーはなかった。事故や自殺なら鍵はある筈。ないのはおかしい。そうでしょう。そんなことから、清水氏に容疑がかかった」

「じゃあ、マスターキーが見つければ、容疑のひとつが崩れるんだ」

「でも警察が入念に搜索して出て來ないのだから。そんな見つからないようなところに置く必要もないやろうしね」

「あたし、そういうの探すの得意なんだ。探してみようよ」

「そらできませんよう。規制線を越えたらえらいこってすがな。まして部屋に入り込むなんて。第一鍵もないのにどないして入りますのや。それやったらドロボウですがな。もうバッチが危うくなることなんか、淫行未遂で懲りてますう」

「じゃあ、未成年で初犯のあたしなら、どうってことないわ」

「といって光子は井川の制止を振り切って規制線を越えた。」

前に続く

黒い門扉には鍵は掛けられてなかった。光子は扉越しに門を外して中に入って行った。屋敷の中をうろうろしていたが、ものの一分としないうちに、玄関に続く植え込みから姿を現した。

何やら鍵らしきものを目の所にかざして、チャラチャいわせながら。

「何です、それ？」

「玄関の鍵だと思うけど」

ハンカチ越しに掴んだそれを、井川の目の前でハンドベルのようにチャラチャラ振った。

「ほんまですか！」井川は精一杯目を見開いて驚愕した。それでもイノシシくらいの目だった。「ど、どこで見つけましたんや？」

「玄関の鍵だから玄関だよ」

玄関に続く石畳は湾曲していて、表からはエゴノキやモッコクなどの植え込みに遮られて見えないのだ。

「玄関のどこで？」

「郵便受けの中——と思ったけど裏をかかれて、その辺の植木鉢の下——とも思もったけどまた裏をかかれて、信楽焼きのタヌキの置物が横にあったから、それも動かしてみただけでなかった」

「それで？」井川はイライラしている。

「でも微かに擦れる音がした」

「それで？」

「タヌキが提げている徳利を振ってみたら、擦れる音はそこからしていた。だからそれを逆さまにしてみたら、小さな小口からぼろりと」

「凄いな、光子ちゃん！ どないして鍵が玄関前にあるなんて思いましたんや。守山は部屋の中で死んでいたんでっせ」

「知くらない。だって、戸締りが嚴重で中に入れないじゃん。だか

ら外で捜すしかなかった。出かける時、うちのママなんかいい加減に郵便受けに入れてる。ドロボウさんがまず最初に目をつけるところだというのにさ」

井川は頭を振った。

「警察の家宅搜索も――まさか外にあるなんて思いもよらなかっただろうからね。勿論、鑑識が屋敷まわりの遺留品の搜索は緻密にやったやろうけど」

井川はしきりに感心した。

タツの事件の時も小刀を見つけたし、自分は刑事向きなのかなあと光子は思っている。

「ということは、どういうことになんだろ？」

「そうですねあ………どういふことでっしゃろ。――あつ！ 光子ちゃん！ 誰か来る。早く門から出て！」

やって来たのは下の家の老婆らだった。

「あんたどう、また何事な？」

「また事件現場を見に来たんですわ」

「お前、門を開けち中に入ったな」と少し痴呆が入った老婆が光子を睨み付けていった。「わしゃあ、ちゃんと見ちよったでえ」

この老婆が騒ぎ立てて、隣の老婆を連れて来たのだろう。二階から見ていたのか。

「あん時のお前か」

「あん時のって？」と光子。

「でん、お前いつの間にそげえ大きゆうなったんじゃ？」

（何いってんだろ？）

「そして女が二人出て行ったんでっしゃろ」と、笑いながら井川がいう。

「いんねとなあ、出て行ったのは男じゃ」

「えっ？ 女じゃなかった？ 女が二人で」と光子も前に聞いた話を思い出していった。

「男が一人ちゃ、お前らもわからんやっちゃなあ……」

「それはいつのこと？」

「警察がいつぱい来た日じゃあ」

清水紀夫と今井孝明の母親のことをいつているにはおかしい。

「何時頃のことですやろ？」

「丑三つ時ちゃ」

井川と光子は顔を見合わせた。女といえば女装した滝田しかいない。滝田がその日の夜中に来たのだろうか。でも出て行ったのは男だった？

二人が考え込んでいると、もう一人の老婆がやって来てささやいた。

「うてあいなんなちゃ、もう息子の名前もわからんようになっちゃうんじゃないけん」

帰りの車中でもそれぞれ考えをめぐらせて考え込んだ。

光子がつぶやく。

「夜中に滝田が来た。今井孝明は当然死んでいた。死後四日経っていた。だから、玄関は施錠されてなかったか、滝田が鍵を持っていたか……滝田はビックリして逃げ出す。その時は男の格好で？」

「バアさんのいうことを信じたらそうなりますなあ……でも、ややこしいから、バアさんの話は置いといて考えましょうや」

よろしいかといって、井川は新たな状況から考えられることを、羅列して見せた。

「まずでっせ、玄関前に鍵があったゆうことは、ガイシャの今井孝明は出掛けていたことになりますなあ、普通は。それが部屋の中で死んでいた。これが疑問の第一点。」

第二点は、なのに発見時には玄関は施錠されていた。第一発見者は清水紀夫容疑者と今井の母親だった。誰がどの鍵で施錠したのか？

第三点は、やはりあの死に方ですわ。あんな自殺の仕方はないやろう。あくまでも自殺と仮定した場合でっせ。顔をポスターカラー

で赤く塗ったり、エビゾリは結構辛いものでっせ。それに一人でできるものやろか。実験ではトシちゃんと光子ちゃんでもてこずりましたやろ。下ろす時は三人掛かりだった。

第四点は、“ロシアより愛をこめて”というメッセージじみたものをベットのの上に置いたのは誰か？ 自殺の遺書とは思えない。それにどんなメッセージがこめられていたのか？

——まあ、そんなところですか？ 光子ちゃん、どない思いますう？」

やはり司法試験に合格するような人は違うなあと光子は思った。物事の要点を掴んで、単純化するのがうまい。

でも父は、「司法試験なんか、基本書を何度も何度も徹底的に読み込み、過去の例題を繰り返しやる熱意があれば——」といった。皮肉にも、法学部の秀才の母が通らなくて、ほかの学部から来た凡才の父が通ってしまったのだ。

父の熱意は母に対するもので、母の注意を引くためのものだった。「要するに、やりたい一心のコケの一念の成せるワザだった」と、幼い自分の傍で他人にいつていた。大人は子供だと安心してそんなエッチなことを子供の前で平気という。でも、子供はいつまでも子供ではない。そういうことはちゃんと覚えていて、あとで理解する。「どないしました？」

「えっ？ ああ、そうだね。あたしもそう思う。自殺とするのは無理があると思うよ」

「そやったら、事故ゆうことになりますなあ。どうです、これから野島教授のご意見を伺いに行きませんか？」

「ええーっ」といいながらも、光子は教授に電話してアポを取る。自分が新たな大発見をしたことを自慢したくてしょうがなかったのだ。

この際、エッチな講釈は甘んじて受けよう。

前に続く

「ほう……」といって野島教授は光子を見つめた。

「何だか変な具合でしょう？　どうなってんだろと思って」

「そうだなあ……確かに」

「先生のお知恵を拝借したくてまたやって来ました」と井川。

「まあ、掛けたまえ」

教授は今日は普通のスーツ姿で、研究生に接するような態度でデスクの回転肘掛け椅子に座っていた。

井川と光子はそこらにあったパイプ椅子を広げて座る。

「そんなのよく見つけたもんだね。しかしまずいな。曲がりなりにも規制線が張られてあるんだからね。いや、そうでなくても、無断で他人の屋敷に足を踏み入れたら、これは立派な住居侵入罪になる。弁護士先生を前にしていうことでもないけど」

「はい、はい、そうですね。ぼくもそういつて止めましたんやけど」

「聞く耳もたずか。まあ、そうだろうね、父君がそうだったから。本部長は誰だったっけ？」

「捜査本部長は……」

「いやそうではなく、県警の親玉は？」

「あ？　あー？　すみません、ぼくまだこっちに帰って来たばかりですさかいに」

「塚本本部長じゃん」

「塚本？　塚本か。ああ、何かそんな名前だったな……」

「あたしまだ未成年だし、初犯だし、大した罪にはならないんじゃないの？」

「それに窃盗罪が加わるけどーまあいいか。それくらいは何とかなる。でも、そうだなあ……連中の顔も立ててやらねば……その鍵は、もとの所に戻しておきなさい」

「えーっ」と光子は口を尖らせた。

「捜査員の誰かに知恵を授けて、そこを搜索させればいいさ」

「なるほど」と井川が手を打った。

「さて、それはよしとして、そうなるのであればどうということになるんだね？」

「そうなんですう」

三人は首を傾げて考え込んだ。

そこへ、女子学生がコーヒーを捧げて現われた。

コーヒータイムが終わると、教授はいった。

「これはやはり自殺かも知れないな」

「ええー、自殺うー？」

「ーですやろか？」

「うん。こう考えたらどうだろう。元々彼にはそういう趣味があった。ああゆう仕掛けをして、危ない遊戯をしていた。ポスターカラーを顔に塗ったりしてね。それは彼独特のものだろうけど、そういうのは結構いると思うなあ」

そうらまた始まったと、井川と光子は顔を見合わせる。

「いつからか、そうだなあ、昔は木の枝に縄を掛けて下がるのが主流で、田舎に行けばそんな首吊りの話はどこでも一つやふたつはあった。ぼくの田舎は鹿児島いふすきの指宿だ。いわゆるカゴツマだけだね。

子供の頃、そういう場所を通るのが恐くてさあ。堤つみなどへの入水自殺も結構あったなあ……。

それが今日日は、部屋の中で、ドアノブなんか紐を掛けたりして、簡単に死ねるようになった。困ったことにーだから、昔の謀殺人なんかは、人目を気にしながら、何人もで、嫌がるのを抱え上げて吊るしていたものなんだけど、今や、ホテルの部屋とか、自宅なんかで、誰にも見られず、簡単に締めて殺せるようになった。そして自殺を偽装する。家人の留守の時などにね。

自分の家で死んでるんだから、警察も検察も国民もマスコミもみ

んな納得しちまう。

こんなことを元警察官のぼくがいうことじゃないけどね。疑獄事件の関係者の死は日常茶飯事だけど、どれが謀殺で、どれが本物の自殺なのか、見分けつきやしないのさ。きつと、事件の鍵を握るキーパーソンが死んで、事件追及はそこでストップ、幕が引かれるってわけさ。異論はどこからも出ない。

その先に突き進んで行ったのが、君の父上、城島特捜部検事だった。ああいう不幸なことになってしまったがね。それを恐れるから、どこからも異論は出ないんだ。みんな我が身が可愛いし、我が身以上に愛する家族を、危険な目に遭わせたくないからね。

――神代の昔からの、この因循いんじゆんはなかなか断ち切れるものではない……」

野島教授の顔つきが変わっていた。恍とぼけたような顔ではない。警察庁・刑事局の警視監の顔だった。

光子も井川も教授の顔を見つめたまま固まってしまっている。

光子の目から大粒の涙が流れて落ちた。

そうして父は、そして叔母二人も、惨むごたらしく、葬り去られたのだ。

その恨みの焰ほむらは胸中に赫々（かっかく）と燃えている。シリスベルトを巻けば、いつでも父の受難の痛みを感じる。

その燃えるような瞳を、腫れぼったく押し潰された目蓋の間から、野島元警視監はじつと見つめた。

そこに余人の入り込む余地はなかった。井川はそっと立って窓を開けに行った。窓を開けると、心地よい風が吹き込んで来た。

彼らが導き出した推論はこうであった。

――守山孝明は生死の狭間を漂う遊戯から、一線を越えて死出の旅に出た。自殺の動機は充分。「最早未来を持たない者に、現実は

嘔吐をもよおす」である〈シーボルト語録〉。

だが、ただでは死にたくなかった。せめて一矢報いたかった。それが、かつて清水紀夫のパソコンに打ち込んでコピーしていた「ロシアより愛を込めて」のメッセージだった。

それだとしかし、疑いが友達の清水紀夫にかかってしまう。彼のコピー用紙だから彼の指紋もあるだろう〈現実になっちゃった〉。

だから、鍵を掛けずにイーでもマスターキーが部屋にあると自殺を疑われることにもなるからイー出掛ける時に入れておくこともあるタヌキの徳利に入れた。

やがて、滝田学が来ることを見越してであろう。滝田ならそのメッセージから意味を汲み取るだろう。クラブ『?』では『モスクワの夜は更けて』の曲がよく演奏される。きっと仇を討ってくれるに違いない。

イーパシリの滝田は金を要求しにやって来た。そこで今井の自殺を発見。メッセージから今井の悔しい思いを知る。かといって警察に駆け込めば、彼の不名誉が明るみに出て、なおかつ自分は組織の報復を受けることになる。

そこで思いついたのが、玄関の鍵を閉めておくこと〈この場合、鍵の置き場所を滝田が知っていたということが前提〉。そうしておけば、おっつけ誰かが訪ねて来て、電気が点いているのに応答がない、新聞や郵便物も溜まっている、ことに不審を抱き、警察の知れるところとなり、自殺か殺人かということになって、その捜査の過程で、金谷孝光・大野貢らの恐喝が明るみに出る。そして自分は彼らの呪縛から解放される。

とまあ手前勝手な憶測ではあるが、何とか辻褄は合う。認知症の老婆の証言なんか何の役にも立たないけど、所々符合する。

あとは警察の捜査がどうなるか、権藤警部に会って、鍵の在りかを示唆し、状況によっては、自分らの推理を披露してみようと思う

のだった。

「教授ってけっこう凄みのある方なんですなあ」

「エッチな講釈を除けばね」

「光子ちゃん」

「何？」

「アメちゃん食べますかあ」

井川と光子はとりあえず中判田経由で見晴らし台に向かった。

前に続く(前書き)

前回の家宅侵入罪は住居侵入罪の誤りです。

事件発生当初、諸般の事情から――という大雑把な表現で、細々した伏線を敷かなかったため、唐突感を持たれることが色々出て来ますけど、ご容赦ください。

前に続く

見晴台の事件現場に戻った彼らは、認知症の婆さまのセンサーに感知されないことを祈りながら、素早く光子が玄関のタヌキに鍵を戻した。

それから一度事務所に帰ってボス弁に報告、晩がけの昼食を取ってから中央署に歩いて向かった。

検察庁の前を通り過ぎようとして、「あ、井川先生、ちょっと待って」と光子が腕を取っている。「東浜検事に会ってからにしない」「え？　なんでですのん」

「だって、権藤警部って、ヘソを曲げたら人の話、聞かないところじゃん。でも検事には頭、上がらないから。検事に話を通しておいたほうがー」

「なるほどね」

井川は納得した。本当は検事に自慢したくていっていることぐらいとお見通しである。

しかしいうことは正解だった。

東浜検事は彼らの話を黙って聞き終えて、ポツリといった。

「……よかった」

警察が誤認逮捕を認めるのは屈辱的なことである。だから容易なことでは認めようとしないう。権藤警部はいまだに清水紀夫の容疑を棄てきれず、金谷・大野の恐喝事件とは別物としているという。

「ていうか、恐喝事件の捜査から見晴台事件に繋がる証拠を掴みきれないので、しかたなく、しがみついているってとこかな」

「それでしたら、ぼくらがいうより、検事さんの指揮という形のほうが、素直に対応するかも知れないですね」

それもちよっと味気ない気がした。あの警部の鼻柱を折ってやりたい気もする、光子的には。

「そうね。そのほうがよいでしょう。わたしも、これから最後の頼みである、滝田学の尋問にかかろうとしていたとこなのよ。助かったわ」

「今度お昼ぐらい奢ってくれてもいいんじゃないの」と光子。

「うん。そうだね。でもその前に、住居侵入罪及び窃盗罪、それに公務失効妨害罪もあるわね、それらの併合罪を見逃す代わりに、スリーツを奢ってもらうことになるけど、いいかしら？」

「あははは。検事さんは甘党ですかあ。それやったらぼくに奢らせてください。ぼくも甘党ですもん」

（どうなんだろう、この抜け目のなさ。よくこれで彼女ができないものだわ）

「検事さん、この先生、三三歳でまだ独身なんだよ、彼女もいないし」

「まあ、そうなの」

「東浜検事さんも三〇歳で、独身で、カレシがないんだって」「ちよっと！」

横の席の黒縁メガネの男性事務官が思わず笑った。

滝田学の検面調書が事件の真相を表していた。
それによると。

「――私、滝田学は事実をありのままに包み隠さずに申し述べます。確かに、私、滝田学は守山孝明さんと、よくクラブ『?』に出かけました。だいたいいつも午前零時過ぎに、守山さんの家に女装したまま行き、女装した守山さんと一時か二時頃に家を出て、タクシーで都町の店に行きました。」

実は私は、クラブ『?』で一年前に三ヶ月間だけバイトしたことがあります。守山さんとはそこで知り合ったのです。その頃、守山さんは週末だけストレス解消にやって来ていました。

そして、大学の先輩ということだけで、親しくしていただくよう

になりました。バイト先の紹介などもしていただいたり、本当によい先輩でありました。

その先輩が、クラブ『?』で悪い女に引っ掛かってしまって、困ったことになったというので、ぼくも一緒に女――池辺沙織（一五歳）――の男友達――金谷孝光――の事務所――三川上^{みつがわかみ}――に行きました。

そこには大野貢というヤクザの幹部――川島組――もいて、三百万円で話がつきました。そのお金を滝田――つまり私に渡して、クラブ『?』まで持って来いというのでした。

私は守山さんから預かった三百万円を持ってクラブ『?』に行き、そこで池辺沙織に手渡しました。家を買ったばかりで余裕のない守山さんは、友達――清水紀夫――からとりあえず借りたといっていました。その方とは守山さんの家で一度お会いいただけです。

その後、私、滝田学を通して、私の携帯電話に指示があり、二度三度と守山さんはお金を要求されました――?五〇万円、?八〇万円、?一二〇万円――守山さんは、いわれるままにズルズルと応じて、私は守山さんから受け取ったお金を運び続けました。クラブ『?』で、池辺沙織に手渡ししました。

そして、四月一三日午後五時三十分――携帯の電源を切っていたものですから――大学の門前で金谷らに待ち伏せを受けました。

金谷のほかに二名いて、電源を切っていたことを激しく責められ、携帯電話を取り上げられて、個人情報全部吸い出されましたので、もう逃げられないなと思いました。

金谷がいうには、今度こそ最後にしてやるから五百万円用意するように守山にいえということです。

その場で守山さんに電話しましたがけど、守山さんも電源を切っているらしく、通じませんでした。会社に掛けたら無断欠勤しているということでした。家に行ってみて来いといわれました。

深夜に――午前一時頃――守山さんの家に行きました。電気は点いていて、玄関の施錠はされておりませんでした。

でも、声をかけても、呼び鈴を押しても、返事がないのです。嫌な予感がしました。

恐る恐る上がり込んでーエアコンも作動してありましたーそして寝室で、首を吊って死んでいる守山さんを発見しました。

おかしな格好で死んでおりましたけど、何となくわかるような気がしました。ベットのの上にコピー用紙があり、「ロシアより愛を込めて」という文字が打たれておりました。その意味もよくわかりました。玄関に鍵が掛けてないのも、私が来ることを予期してのこと、私にある思い託しているのだとわかりました。

でも、警察に通報して、ありのままを話す勇氣は私にはありませんでした。ヤクザが恐かったし、恐かったので、守山さんの名誉のためにもと、自分を納得させて、そのままにしておくことにしました。発見者は私ではなく、ほかの人にーという思いでした。

そして金谷には守山さんは自殺しているのかも知れないと報告しました。電気が付いているのに玄関には鍵が掛かっていて、新聞や郵便物がいっぱい溜まっていると。

金谷から大野に代わって、大野貢は、俺らのことを一言でも漏らしたらわかつているなといって、携帯電話は棄てろ、新しいのに買い替えろ、もうこれから一切関係ないからな、といいました。正直助かった！　と思いました。

どうしてそんなウソをいえたかというところ、玄関の鍵を見つけて施錠して来たからです。

鍵は必死で探しました。どうしてそんな考えになったのか、あとで考えたらおかしいことですけど、その時は玄関の施錠をしなければと、一途に考えてしまったのです。

私以外であれば発見者は誰でもよかったわけです。施錠をしているようがいまいが、いずれは発見されるだろうに。恐らく、友達とはいえ人の家に上がり込んだ後ろめたさと、守山さんの死に様を人に見せたくないかったという心理が働いたのでしょう。

そして、殺人事件ともなれば、交友関係から真っ先に私も疑われ

ることになる。その時に鍵がかかっていたほうがよいという考えもあったのかも知れません。とにかく、動揺していたのです。

玄関の鍵をどうして見つけたかといいますと――几帳面な守山さんは玄関の靴脱ぎ場の所の壁に、靴べらと、乗用車のキーと、家の鍵を掛ける三連のフックを取り付けていて、きつとそこに掛けていました。けど、そこになかったし、部屋のどこにもありませんでしたから、一度は諦めたのですが。

ふと思い出したのは、前に一度、玄関の鍵を施錠しないで出掛けたことがあり、勿論、日中のことでしたけど、どうして施錠しないのか聞いたら、妹が来ることになっているからといっていました。その時に玄関前のタヌキの置物の所で立ち止まったような気配を後ろに感じたので、その置物を調べたら、徳利の中でかすかな音がしました。小口は本当に狭いのですが、逆さまに振ったら中から鍵が出て来たのです。

その鍵を持ち去ろうかどうしようかで迷いました。そうすれば完全に殺人事件が疑われることになるだろうし、でもあの様態でも充分に殺人が疑われる――そう思って守山さんも恥を忍んでそうしたのだろうと思います――結局もとに戻しておきました。

コピー用紙のメッセージもどうしようか迷いました。もう用は済んだのだし、変に勘繰られても嫌だから持ち去ろうかとも思いましたが、やはり人の物を持ち去るのは勇気がいるもので、結局手を付けませんでした。

清水紀夫さんが容疑者として逮捕されたのは意外でした。驚きました。私が守山さんから受け取った三百万円の出所が――友達の水から借りたと守山さんから聞いたことを、警察で供述したからだろうか、心を痛めました。

でもきつと恐喝事件が明るみになって助かるだろうと、それまで辛抱して欲しいと思いました。でもなかなか、警察の捜査はそこまで及びませんでした。彼らが巧妙に私を間に噛ませて、ワンクッションおいているからだろうと、焦りました。

そういう時に、弁護士さん――根岸法律事務所の、井川弁護士と
榊原光子助手――が現れて、守山さんの女装趣味のことを訊きまし
た。ですからこれ幸いと、コスプレクラブ『?』のことを漏らした
のでした。

警察ではなく弁護士さんですから、弁護士さんから恐喝事件が明
るようになったのなら、彼らも私の責任だとは考えないだろうと思っ
たからです。

――――――――――

その19 転機

容疑者・清水紀夫は容疑事実なしで、釈放となった。

根岸ともみ弁護士と光子、そして清水志津子とで、中央署に迎えに行く。

天気の良い、ゴールデンウィーク開けの、爽やかな風が吹く日だった。

待合室に、権藤警部と若い刑事に伴なわれて、清水紀夫は右腕をさすりながら「まいったよ」といつて現れた。

「滅多にない体験をさせてもらったわね」と志津子。

「休業補償があるといいんだけど」

権藤警部は少しも悪びれた様子はない。日本国民である以上は、いつ何時、思わぬ嫌疑を掛けられて、吟味の俎上そじょうにのせられることになるかわからない、（そんなものあるか！）といわんばかりだ。

「金谷と大野はどうなるの？」と光子が警部に訊く。

「あいつらにはたんまり罪科を背負わせち、長〜い監獄暮らしにしちやるわい。池辺沙織にもケツにお灸をすえちゃらな、ならん」

「滝田学は？」

「滝田か、あいつがもっとシャキツとしとりや、こんな手間隙かけることにはならんかった。あいつにもー」

「野島教授のいうこと聞いてれば、もっと早かったんと違うん」

「なにや！」

根岸弁護士があわてて光子の腕を取って、「じゃあ、わたしたちはこれで」といつて一行を促して部屋を出た。

イタ高のゴンタクレで鳴らした権藤警部は、出て行く光子の後姿をじっと見ていた。

その日の夕方、事務所でちょっとした慰労会をやった。

といつても、トシ子が、近くのコンビニで、缶ビールにダイエツ

トコーク、ウーロン茶のペットボトル、それに裂きイカなどのツマミ類を買って来て――検察官や裁判官などが仕事が一段落した時に冷酒を立ち飲みして締めるように――休憩室の大きなテーブルを囲んで、飲み食いしただけである。

「結局、野島教授のいう通りになったじゃん」と光子がダイエツトコークを飲みながらいう。

「野島教授といえば、ここにも来たんだよう」と、トシ子がツマミ類を銀紙の皿に移しながらいった。「根岸先生に用があったんだって」

「わたしに？」

アルコール類を飲まない根岸ともみ弁護士は、ウーロン茶を遼子と分け合って飲んでいる。井川とトシ子が缶ビールである。

「先生は教授のこと知ってんだよね？」と光子。「それでもって、教授も先生のことを知っている。でも面識はない。どういうんだろ？」

「光子！ 変なこといわないの」
遼子がたしなめた。

根岸ともみは浮かない顔をした。考えをめぐらせるように瞳を中に泳がせた。

「でも、ぼく、いまだに解せないですよ。ひとりで、丸椅子の上で、あんな曲芸師みたいなマネできるもんやろか」

井川がずっと拘こたわっていたことだ。

「それは、井川先生がメタボで、お腹が出ていて、体が硬いからじゃない」とトシ子。

「そうですやろか。じゃあ、東さん、体柔らかそうだから、いっぺん、試してみますかあ」

「しゅっ！」光子が口に人差し指を当てた。

家に帰ったらもう九時を過ぎていた。

夕食後、久々に母娘が居間のテーブルに向かい合う。

「井川先生って、本当に願ってもない人だね。よい先生が来てくれた……」

お茶を啜りながらしみじみ遼子がいう。

「どうだか」

光子はOBSの歌番組を観ながら気のない素振りでいう。

「トシちゃんとお似合いだと思わない？」

「でも井川先生、そんな気ないみたい……」

「ホントに？」

「きつと、理想が高すぎるんだよ。東浜検事なんて、イノシシが孔雀に恋するみたいじゃん」

「えっ？ そうなの？ 井川先生、東浜検事さんに気があるの？」

「わかんないけど、なんだかね……」

「そう……そうなの……」

いつの間にか光子がじつと母親の顔を見ていた。

その19 転機（後書き）

あと少しで光子は兄・竜平に主役の座を譲ることになります。いよいよ、「リュウヘイ記」に取って代わります。

お名残惜しゅうございますが、光子の出番はぐっと減ります。

” 朝に虚し、夕べに哀し、夜は楽し ”

田川の侠客・城島竜二の長男・竜平は、大学生の分際で女色に溺れ、夜のネオン街を彷徨う…。

前に続く

それから井川・光子コンビは国選弁護人として傷害事件を手がけ、光子はその最中に、ダメ元で七月に警察官採用試験の願書を提出し、九月に一次試験を受け、一〇月に二次試験を受けた。

そして何と、岩のように聳えていた壁を突き破って、見事に合格したのだった。

野島教授がいった通りだった。時の氏神が誰だったのかはさておき、殺人者の親を持つ者が警察官に採用されるなんて、天地が逆さまになっても有り得ないことだった。

田川の侠客の息子が検察官になれた以上に驚天動地のことで、権藤警部などは、「世も末じゃあ」とつぶやいたものだった。

その頃はすでに光子は 警察内でも有名になっていた。只者でない青嵐せいらんの気を放つようになっていて、薫くんずるビヤクダンの香氣に魅せられて、彼女のもとに一人ふたりと、人が寄って来るようになった。東浜明美検事でさえ、何くれとなく光子の傍にいた。

光子は野島教授と頻繁に交流し、薩摩隼人の訓育を受けて、政治・経済・文化・歴史等、万般に渡るエッセンスを享受した。若い生命は、それらを干天の慈雨の如くに吸収した。

その一方で武芸に励むことも怠らなかった。主に柔道であるが、警察官になってからは剣道も始めた。だが、射撃のほうはどうも苦手で、鉄砲の弾より速くに敵を倒す修練をした。

一時は田川の衆も一五の姫が警察官になったつばい、何？ そげんとか、ああ……何ということを一と嘆いていたけど、そのうち諦めて、産土うぶすなの神や、テキヤの守り神である神農様に一どうか姫のご武運を一と祈るようになった。

博多の大御所も、何度か榊原家を訪れて、翻意を促したようであるが、頑として光子は譲らなかった。

そのうち、叔母の竜子は、光子の瞳の中の光に気付いて、慄然と

したようである。早速故郷に帰っていざという時の備えをした。

母親の遼子は、胸騒ぎがしてならなかった。どんどん娘が遠い所へ行ってしまふ。危険な所に。元夫の魂に引き寄せられるように。

かつてこう胸の内で叫んだことがある。

――この国がどうなろうと知ったことですか。

あれから十数年、また同じことが起こるのではないか。

今や、政治は世論調査の人気投票の場となり、その時々々の民意で右に左に振幅して、その都度、ご機嫌取りのばら撒き政治が行われ、株価は乱高下、財政赤字はギリシャの比ではない、百兆円を超えようとしており、最早破産状態、年替わりに首相が変わるこの国に最早屋台骨はない、衆愚を満載した竜骨のない舟である。

国営放送は、誰彼の失言を朝から夜中まで繰り返して報道、顔に絆創膏を張って登場した大臣に、大臣たるものパンツの中味まで明らかにすべしとばかりに、それを剥がして見せろと、マスコミも国民も迫る、中国の文化大革命以上の愚かで破廉恥な集団バッシングで、失言者や、過失を犯した企業などを、完膚なきまでに叩き潰し、次々に葬り去った。

最早ジョーク一ついえない。国民に苦言を呈す者は誰もいない。

政権の取り合いだけの政治となった。

元夫の目指した正義など、初めからなかったのだ。その幻想を受け継ぐようなことだけは――。

娘には綺麗な着物を着せて成人式を迎え、女として幸せな結婚をして欲しい。可愛い孫を沢山産んで欲しい。

成人式前の正月に、博多から振袖と博多帯が届けられた。レンタルで済まそうと話していた矢先である（光子はスーツを望んだけど、それは母親としては譲れないところだった）。

それがまた地味で、生地はそれなりに上等なのだろうけど、女やクザが着るような銀ネズ色の振袖だった。帯びも黒っぽい博多帯び。親としては一生に一度しか見られない晴れ姿だから、もっと色合い

のよい娘らしいものにしたかった。

けど、致し方ない。写真を撮って送る手前、誤魔化しは利かない。病院から正月帰りしている父・史郎とともに写真を撮った。タツオにデジカメで撮ってもらったのであるが、親子孫のそれが最後の写真となった（三ヶ月後に史郎が肺炎で死んだからだ）。

着替えを手伝っていて、長襦袢ながじゅばんの下に黒い帯のようなものを発見して遼子は怪訝な顔をした。

「腕に何か巻いてるの？」

「何でもないよ」

遼子は袖を捲って見た。

「何これ？」

「何でもないって」

光子は袖を下ろそうとする。けど、遼子は二の腕をしっかり掴んで、ベルトをずらして声を上げた。

「あっ、こんなに赤い点々が！ 何これ、トゲトゲがいっぱい付いてるじゃない。何でこんなの巻いてるの？」

それが何であるか見当もつかない。光子が正義のためではなく、父親の復讐に燃えていることなど、知りもしない遼子であった。

後年、それがイエスの受難の痛みを思い起こすために、聖職者が腕や太腿に巻くベルトだと人伝ひとついでに聞いて、ようやく理解し、「親から貰った大事な体に何てことするの。あんたの体はあんただけのものじゃないのよ！」と叱った。

ともあれ、成人式での光子の着物姿は衆目を浴びた。着流しだったらもっと目を引いただろう。一八〇センチの女の着物姿なんて滅多にお目にかかれるものではない。それがとても堂々としていて、摺り足で歩くのだ。

遼子にはもう一人、竜平という息子がいた。

あの子は親思いの優しい子だ。

きつと、沢山の可愛い孫をこしらえて、榊原家の家系を守ってく

れるに違いない……。

前に続く(後書き)

史郎がまだ生きていたかどうかあやふやです。
すでに死んでいたらごめんなさい。

これにて、「ミツコ記」は終わります。
次回からは「リュウヘイ記」です。

リュウヘイ記(前書き)

これよりバイオレンスの傾向が強くなります。
デカダンスにどっぷり浸かった竜平の日常と、血と、暴力と。

リュウヘイ記

朝に虚し、

夕べに哀し、

夜は楽しー。

その一 竜二と遼子の子・竜平

酔客もまばらになった新宿の飲み屋街をー粉ぬか雨が電灯に照らされた部分だけ白く光っているー白いドレスの女に支えられて、若い男が足元おぼつかなく歩いている。

その後方一〇メートルばかりの距離を保ちながら、若い女がコートの肩を光らせて歩いている。

ネイビーのハーフコートへボタンがいっぱい付いているの下は、ふかふかの白いタートルネックセーターに、デニム地の青いスカート、黒革のロングブーツを履いている。

ナチュラルな髪はウナジを隠す程度の長さで、前髪からふっくらした白い頬が愛らしく覗いている。

「どうしたの？ 気分悪い？」というキャバ嬢の声が聞こえる程度の距離である。

「ちよつと、吐く」という若い男の声は聞こえない。

二人はビルとビルの間路地に入り込んだ。

入り口には労務者風情が正体なく丸太のように寝そべっており、狭い路地なので、その男の足を踏まないよう用心しながら、よけて通るような格好になった。

通り過ぎたところで。

「おい！ 貴様ら俺様を跨いだな！」と、寝ている筈の男がむっくり上体を起こして、怒鳴った。

二人はビクツとして振り返る。

「そっちが邪魔なんだよ！ 跨がれなくなかったら、どきな！」と、キャバ嬢が怒鳴り返した。

その意外な剣幕に――しかも女のほうの――男は鼻白んで、目を円くし、「あ、そう」というようにコテンとまた横になった。

若い男のほうなら――薄目を開けて見たところ気弱そうなぼんぼんだ――「何や貴様！」と因縁をつけて金銭を脅し取るところだけど、キャバ嬢には適わない。勢いのある女にはきつと恐いお兄さんが付いている。

今日は日が悪いと思ったか、労務者風情は、クモのように獲物がかかるのを待っていた糸をたたんで、そそくさ立ち去った。

厚手のＴシャツにジーンズ姿の若い男は、ビルの壁に手を突いて吐いた。威勢のいいキャバ嬢が一転、その背中をさすりながら、「リュウちゃん、よかったら、あたしのマンションに泊まってかない？ ね、そうしよう」と甘い声を出している。

くだんの若い女は路地の入り口に立ってそれを見ている。

と、そこへ、三人の黒服の男達が彼女をなぎ払うようにして、路地に入り込んだ。

二人の所へ行って、「おい、お前ら、今何した？」と立派な体格をした男がいった。

「何って？」とキャバ嬢が訊く。

吐いている若い男も苦しそうな顔を向けた。

「お前ら今、酔った親父を追ひ払っただろ。親父の腹の中には、この界限で生計を立てている者の糧が入ってるんだぞ！ 何様だと思ってるんだ！」

キャバ嬢は彼らを見て不思議そうな顔をした。地回りのようなことをいう。

――でも地回りではない。ヤクザのニオイもしない。こいつら一体、何者だろう？

というような顔つきだった。

「お前！」といって、今度は痩せた背の高いのが、女を払い除けてから、若い男の襟首を掴んで引き立てた。

若い男はその胸に向かって、ブオッ！ とゲロをぶちまけた。

「わあっ！ き、汚たねえ！ 何しやがるんだ！」

男は力いっぱい若い男を突き飛ばした。

若い男は仰向けに倒れた。

「何すんのよ！」と、キャバ嬢が若い男を庇うように立ちはだかる。それをまた払い除けて、倒れた若者を引き起こし、膝蹴りを腹に一発食らわせてから、前屈みになったところを、右のコブシで顔面を殴りつけた。

若い男はひとたまりもなくまた仰向けに倒れた。

そして、口から血が混じった吐瀉物を、泡のようにどくどくと送り出した。

なおも痩せた男は前に進んで、若者の腹を踏みつけようとした。そして後頭部に衝撃を受けて、その場に崩れ落ちた。

路地の入り口で若い女は震える手で、携帯から110番通報しようとしていた。

そこへまた誰かがぶつかって来て携帯を取り落とした。

見るとまた黒服の太った男が彼の所へ大股で近づいて行く。若い女は大声で叫ぼうとした。

けど声が出ない。

もう一度叫ぼうとして息を吸い込んだ時、彼に乱暴しようとしていた男が、崩れ落ちた。よく見えなかったけど、後ろ頭を何かで殴られたのだろうかと思った。

そして黒服同士で乱闘になった。若い女は固唾を吞んで見守る。

正義の味方に勝って欲しいと願う。

乱闘はあっけなく勝負がついた。あとからやって来た男はあまりにも強かった。よく見ると何の武器も持っていないようなのに、三人

の悪漢に、たちまち戦闘不能にするダメージを与えた。

三人は逃げるのがせいっぱい。あたふた路地を向こう向きに走って逃げた。

（私服の警察官だろうか？）

と思っただけで、正義の味方は彼の所へ行き、片膝突いて何やら一言二言話しかけてから、スーツの襟足を正すように太い両腕をまわして、何事もなかったような浅黒い顔で、彼女の前を通り過ぎて行った。

彼は水商売の女に助け起こされ、その肩に担がれるようにして――背丈が170センチの彼はハイヒールを履いたドレスの女より小さく見えた――彼女の前を通り過ぎて行った。

その際、チラッと血糊の付いた白い顔で彼女を見た。

だが、瞳を上下させただけで、何もいわずに、通り過ぎた。

――あの女に傷の手当てをしてもらい、そして、一緒に寝るんだ。と、やはり白い顔で、若い女は見送った。

「若、粹狂が過ぎます」

「本庄か」

という二人の会話を聞いた者は誰もいない。

前に続く

白木洋子は重い足取りで東池袋の女子学生会館に帰った。

門限は午前一時、ぎりぎりセーフだった。

管理人室には電気が点いていたけど、さいわい管理人の親父は顔を出さなかった。

いつもは学生が男を連れ込みはしないかと、小さな窓を開けて目を光らせている。色々話しかけて来て、うざい。

それでも女の格好をさせて連れ込む者はいた。長髪の男はざらだし、カツラもあるし、ユニセックスの時代である、女から見ても見分けがつかない。

それと、学生の中には時給の高い水商売でバイトをしている者が結構いて、ホストを連れ込んでドンチャン騒ぎする者までいた。風紀は乱れていた。

女の子のファッション自体が、限りなくお水風になっている。男の子の髪型もホスト風になっている。だから、管理人の親父は猜疑の目を凝らし、何やかやと話しかけて、喋らせようとする。

エレベーターで三階に。三階の305号室が彼女の部屋である。バス・トイレ・家具・家電付きの、今流行りのワンルーム学生マンション。朝晩の食事付で、家賃は九万八千円と決して安くはない。大学まで地下鉄を乗り継いで三、四〇分と、場所的にはまあまあだった。

実家は埼玉の熊谷市で建設業を営んでおり、当節羽振りがよくて一人娘に毎月二十万の仕送りくらいなんでもなかった。洋子はバイトもしないで学業に専念できる恵まれた学生だった。

いわばお嬢さん育ちの何不自由ないお嬢さんだった。見るからにそうだった。

ところがこの娘にしてこの親ありーというわけにはいかず、親のほうは地元では有名な業界人だった。中央政界に太いパイプを持

ち、業界で悪辣な豪腕を振るう強面^{こわもて}だった。公共事業の談合を裏で牛耳っているボスだった。地方で目立って羽振りがよいのはたいいていそうである。

白木洋子はその父親・白木菊馬には少しも似ていなかった。母親に似ていた。というか、母親よりか母方の祖母によく似ていた。祖母は名門の家の才媛だった。洋子の才気と、おっとりした気品はそこから来ていた。

にもかかわらず、祖母の家の格式に馴染めず、父・菊馬のほうから疎^{うと}んじて近付かなかったから、洋子と祖母との交流はほとんどなかった。

ともかく、洋子は菊馬にとっては才色兼備の自慢の娘だった。溺愛する一粒種だった。

その一粒種に、すくと近付いた男がいた。それがくだんの若い男だった。

洋子は部屋に入るなり、電気も点けずに、ベットにうつ伏せに倒れ込んだ。

顔だけ横向けて、爪を噛む。

そして、先程の光景を思い出す。

一年前、大学のゼミで偶然隣り合わせに座ったことから――ほかに席はいっぱい空いていたのに――彼と話すようになった。

気さくで話が面白く、たちまち洋子は彼に夢中になった。

けれども、彼は一定の距離を保って、それ以上は決して近付いて来なかった。

かといって、離れて行くでもなかった。

謎めいていて、自分のことは語りたがらなかった。

いつもその瞳に侘しさを湛えていて、胸に大きな風穴でも開いてるかのよう、荒れた生活をしていた。

その渴きを癒し、その侘しさを潤して、空虚を喜びでいっぱいに満たしてあげたい――という思いに引っ張られて、洋子は前へ前へ

とのめり込んだ。

そうすると、その分だけ彼は後退した。距離は少しも縮まらなかった。もう気が狂いそうだった。

そのうち彼は教授とケンカしてゼミに来なくなった。教授の権力は絶対である。教授に歯向かったらもう大学での将来はおしまいであつた。

洋子は王子駅裏の彼のアパートに行った。

薄汚い旅館のような造りのアパートに彼はいなかった。

大家に聞いて、彼のアルバイト先の居酒屋に行った。

そこも辞めていていなかった。

雀荘でフリーの打ち手をしているというので、そこにも行つたけど、イカサマヤクザに袋叩きにされて、女の所に転げ込んでいると聞いた。

女のマンションに訪ねて行ったら、いきなり「お前がリュウちゃんを！」といって掴みかかられた。水商売の女だった。

その女から新宿のホストクラブで知り合つたと聞いて、彼が勤めていたという新宿のホストクラブにも行つた。

けど、そこも辞めていた。

雀荘や居酒屋やホストクラブに軒並み電話して聞いたけど、彼の居所は掴めなかった。

それでもちゃんとアパートの家賃は払い込まれていたし、大学の学費も納められていて、籍はまだちゃんとあつた。

そして歌舞伎町でとうとう彼を見つけたのである。偶然見つけたようだけど、さんざん探し回つた挙句だから偶然とはいえない。

彼はやはり水商売の女と乱れた関係を繰り返しているようだったが、だが決して満たされることはない、太宰のように。

彼の空虚を満たせる者は、それは世界中で、自分しかない。

と白木洋子は思った。

――そしてそつと、「さ・か・き・ば・ら・り・ゆ・う・へ・い」

とつぶやいた。

前に続く

竜平は久しぶりに王子のアパートに帰った。

ドアから新聞や広告や郵便物などがいっぱい投げ込まれていた。

郵便物はどれもこれも白木洋子からの封書だった。それと実家からのハガキが含まれていた。

それらを抱えてリビングへ、電気炬燵のテーブルの上にドサッと投げ出して――昼でも電気を点けないと薄暗い南向きの部屋だった――コーヒーを入れに台所に向かう。

台所はきちっと片付いていた。食器入れには布巾が掛けられており、シンクに洗い残しはなかった。ガスコンロもピカピカ。彼は神経質なまでに綺麗好きな男だった。

リビングも、その隣りの寝室も、バス・トイレも勿論、一人住まいの男の部屋とは思えないほど整然としていた。

妹・光子の部屋は足の踏み場もないほど雑然としていて、よく母に叱られていたけれど、それは友達なんかも同じ、潔癖症の自分のほうがおかしいのではないかと思ったぐらいだった。

水商売のホステスなんかもそう。散らかし放題で、落ち着ける場所はどこにもなかった。

お湯が沸く間に着替え、コーヒーを入れてから、ようやく彼は落ち着ける場所に落ち着いたのである。

そしてまずハガキを手を取った。

母・遼子のきちんとしたペン字で、光子が警察官になったと書かれてあった。

――そんなバカな！

と思わず竜平はつぶやいた。

信じられない。殺人犯を親に持つ子が、しかも祖父はヤクザ、そんなはずはない。

だったら自分が検察官になってもおかしくないではないか。検察

官の資格のほうが緩い。といっても、父が検察官になれたのさえおかしいのに。

でも、警察学校に行っているということだから、そうなのだろう。竜平は警察官の光子を想像してみた。さぞかし、勇ましい警察官姿なのに違いない。苦笑した。

ハガキには、“近頃携帯電話が繋がらないのはどういうことか、連絡も寄こさないで、心配している、正月に一度帰って来きなさい、来年は光子の成人式もある”——と書いてあった。

電源を切っていたのだ。そういう状況にいた。そろそろ連絡はしなければと思っていた。祖父の容態も気になったし。

次に白木洋子の女の子らしい白地に絵模様のある横向きの封書を手に取った。三通もある。

それは手に取っただけで広告と一緒に横に置いた。そして、蛍光灯を点け、溜まった新聞に目を通し始めた。隅々まで。どんな小さな記事も漏らすまいというような真剣な眼差しで。

全国紙が終わると、経済紙に取り掛かった。

二時間ばかりかけてようやくすべてに目を通した。マグカップに半分冷えたコーヒーが残っている。

熱いのに入れ替えて来て、飲みながら、白木洋子の手紙を再び手に取った。

そしてまた広告の上に投げ出した。

読む気はない。読まずともわかっていた。昨日の夜チラッと見た彼女の顔に書いてあった。

あの牧歌的な眼差しは苦手だ。

文明に毒されてない素朴な少女の眼差し、ソバカスこそないけれど、シルクロードの旅人を物陰からそっと見る顔を布で隠したジプシーの娘。

あの子が白木菊馬の娘でなければ——どうしてよりもよってそうなのだ——最愛の者をなぶ鬻りものにされる苦しみをとことん味合わ

せてやる――そう思って近付いたのに――逃げまわっている。

父がどんなに民^{ねえ}子姉を愛していたか、子供心にもそれは感じていた。妬ましいほどに。

でも、自分ら――光子と自分は父と一緒に風呂に入れたけど、民子姉は入れなかった。それだけが強みだった。

その民子姉を残酷の限りを尽くして罾^{はね}り者にし、死に追いやった奴ら、父がどんなに無念だったろうか。

その父も拷問にかけて殺した奴らを、到底許してはおけない。

同じ苦しみを、それ以上の苦しみを与えて、地獄に叩き落としてやる！

竜平は暫らく震えが止まらなかった。

今なら白木洋子を罾^{はね}り者にして白木の豪邸に送り届けてやれるような気がした。

前に続く

興奮から醒めると、母親に心配をかけていたことに心を痛めた。そして、光子が警察官になったということが、急にクローズアップされた。それは荒廃した竜平の心に新たな局面をもたらした。

俄かに色んな考えが湧き起こって来て、竜平は仰向けにひっくり返って考えた。じっくり考えた。

そうすると状況が見えて来た。

どうかしていたと思う。どす黒い怨念に目が暗んでいた。自爆覚悟で父の恨みを晴らしたとて、母を不幸にしてしまったのではなんにもならないことに気付いた。

母・遼子の人生を思うと、母だけはどんなことがあってもこれ以上不幸にしてはならない。

ならば、奴らへの制裁は合法的でなければならない。法が裁き、世間が裁き、こちらが無傷でなければ、差し引き、母の不幸がいや増すだけで、少しも怨みを晴らしたことになる。

――こんな自明の理に、盲目だったなんて！

――光子のほうがよっぽど賢い！

それ以来良平は、今までの放埒な生活^{ほうらっ}を改めて、明確な目標を定めた学生らしい生活態度を取るようになった。

真面目に講義にも出席するようになり、白木洋子とも正対して向き合うようになった。

大学の食堂で顔を合わすようなことがあっても、もう逃げなかった。週末の金曜日に、洋子が隣に座って声をかけて来た。トレイには彼女の大好きなカレーが乗っている。

「近頃真面目なのね」

竜平はもうあらかた平らげていた。ガヤガヤと煩い所から一刻も早く立ち去りたい気分だった。

「今更じたばたしても晚いけどね。留年は覚悟している」

「でもなんだか人が変わったみたい」

「そうかい」

「何かあったの？」

「何かって？」

「彼女にフラれたとか」

「彼女なんていないよ」

「ウソ、いっぱいいるじゃない。飲み屋のおねえさんたちがいっぱい」

「ああ、ああいうのを彼女というなら、いっぱいいるけどね」

「彼女でなければ、どういうの？ あの人たちとは、どういう関係？」

「お金の関係さ。お金」

「それで癒される？」

「お金の分だけね」

「じゃあ、わたしがお金を出すから、明日付き合ってくれない？」
思いがけない洋子の言葉に竜平は、目を丸くした。

「どうしたの？ いきなり」

「どうもしないわ。お金の分だけ、癒して欲しいのよ」

竜平は周りを憚ってキョロキョロした。みんな食べながらお喋りに夢中だった。

「可愛い顔して、そういうこといふかなあ……」

「ホストクラブでバイトしてたでしょう。さしずめ店外デートってとこかな」

「よしてくれよ、そんな話」といって竜平はトレイを持って立ち上がった。

ゼミでまた隣り合わせになった。

「明日ね。パパの会社の創立五十周年記念パーティーがあるの。政財官界のお偉方がいっぱい来るんだけど。そういうところで、顔を

売っておくのも、いいんじゃない。将来に向けて。

どうせ、学術研究畑に残るつもりはないんでしょう。教授とケンカしちゃったんだから」

「そんなところに、ぼくを連れてって、何て紹介するつもりなんだよ。第一、普通の親ならー女親はどうか知らないけど、学生の分際で男を連れて来るなんて、言語道断だと思うけど」

「その点、家の親は大丈夫。彼氏ができたらまず連れて来なさいって、常々いつてるから」

「品定めされるのなんて、ご免だね。第一ぼくは、そんな晴れ晴れとした席に顔を出すような人間じゃない。場末の酒場でホステス相手に飲んだくれている不良学生なんだから」

といいながら竜平は、（――あいつらも来るだろうか?）、と思った、あいつらが一堂に介したところで、城島元検事の息子ですと、戦線布告してみたい気もした。

これからは正々堂々と正攻法で行くつもりだった。

まず、一月二〇日から始まる願書受付に申し込んで、猛勉強を始める（すでに基本書を取り寄せて始めていた）。試験は来年の五月一四日からだ。それまで約半年間ある。一日八時間勉強したとしても、五年はかかるといわれている日本一難しい試験だけど、突破してみせる。

父・竜二と同じ検察官になるつもりだった。それだけは絶対ダメと母はいうだろうけど。

「わかった。じゃあ、この際顔を売っておくか」

「えっ！ 本当に？ やったあ！」

やがて、御堂教授が入って来て、学生たちの私語は止んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9380o/>

続・テームスの像「ダークマター」

2011年11月10日03時20分発行